

---

# 真・恋姫†無双～南北コンピの三国志～

クーロン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜南北コンビの三国志〜

### 【Nコード】

N7075Y

### 【作者名】

クーロン

### 【あらすじ】

北郷一刀と幼なじみの南郷仙刀のコンビが三国志で大暴れ！！  
「いや、ぜんぶ仙刀の悪ふざけだから！！」 「人になすりつけんな。サイテーだな」 「お前よりマシじゃアアア！！」  
…まあ、こんな具合でお送りする三国志開幕です。

## 碌でなしの幼なじみ

幼なじみ

この一文字に何を考えるだろうか？

同い年のかわいい娘？ちよっと年上のお姉さん？それとも妹系？

だけどさ…現実ってきびしいよね…俺の幼なじみはさ…

「オラ、一刀さっさと打ち込めや。やらねーとシバくぞ」

…こんな奴だよ…

俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の学生。正直、今メツチャ困ってる。その原因が…

「ま、おれからいくけど。何やるっかなー 正拳、前蹴り、貫手、

上段、下段…どれがいい？」

このバカ>幼なじみくだ

因みに言っておくが今の状態は剣道場で向かい合っている状態。俺は竹刀、防具とフル装備で相手は…

下は袴、上は空手着、そして素手。お前の方が有利だと思っ奴…

甘いよ…

実はこいつ目茶苦茶空手が強い。

ついでに合気道も。

あとタイキックもヤバいなガ 使見て習得したらしいけど…

色々あるけど何を言いたいかというところ…

俺、絶体絶命

「仙刀、勘弁してくれよ。まだ死にたくない。ガチで。」

「大丈夫、死にやしねえよ。六分の七殺しにするだけだ。多分…」

「オーバークイルじゃねえか！しかも何だ多分って！！」

「運が良ければそうなるから大丈夫！」

「アウトじゃボケエエエエ！！」

で、この馬鹿が『南郷仙刀』なんごうせんたく『碌でなし。小学校に入る前からの付き合いだけど…どうしてこうなった

素手同士なら普通に勝てるからつまらん。とか、ぬかしやがってこれ。異種格闘戦。

こっちの方が楽しいとか言ってんじゃねえよ。頼むから地下闘技場行け。そして逝け。切実に。

## 外史入り（前書き）

やっと出来ました。

小説書くって大変ですね。

## 外史入り

SIDE 一刀

「ヴアアア、疲れた。体痛い。帰りたい。」

「弱すぎんだろ。何で素手相手に負けんだよ。」

「黙れ外道。いきなり金的とか何考えてやがる。」

仙刀は昔から空手バカだからやったら空手が強い。

あと、合気道も

タイキックもヤバいな

ガ 使見て学んだらしい。

及川を一撃で仕留めてたな、アレ…

ジジイに鍛えられた。護身用と言ってるけど…

武器持ちに素手で圧勝とかおかしいから。

動きが護身じゃなく殺る動きだから。

格闘のジャンルの多さもおかしいから。

他にも色々、手を出してたような…

そして部活中の剣道VS空手。これがウチの部の名物だったりする。

隣の空手部員全員倒したらこっちに来る。そして俺と試合（ルール、

情け共に無用）

不動先輩も顧問もこれを黙認している。

そして、準備運動と称して倒され、隣で寝てる空手部の皆様。ご愁

傷さまで…

こんな奴が生まれたせいで…

「で一刀。お前、寝てて良いの？世界史のレポあるとか言ってるなか

「つた？」

「ヤベエ！！資料館閉まる！！！」

「あーあ、いつまでも寝てるから……」

「誰のせいだよ！！！！！！」

「え？不動サン」

「お前だよ！！何、先輩になすりつけてんだ！！！！！！」

「ノリ」

「舐めとんのかアアア！！！！！！」

「うるせーな。絶叫してないでさっさと行け。閉まんぞ。」

「仙刀。お前も来い。閉じてたら、しばくから。」

「ハ？やだよ。一人寂しく行けよ。」

「いいから来いよ。」

「へーへー、わかりましたよ。」

こんなやり取りは何時もの事。

俺達は着替えて、資料館に向かった。

## SIDE 仙刀

なんとか、資料館は開いていた。面倒い。

そして一刀のレポに付き合う羽目になった。ダルイ。

この資料館は学園長が趣味で集めた物がほとんどらしい。その金俺にくれ。

そんなこんなで色々骨董があるらしい。正直どうでもいい。

「お、三国時代の壺だつてよ。」

「メンマ入れだろ」

「あ！夏侯惇の剣だつてよ。かつけー！！」

「錆びた鉄の棒だな」

「スゲエ！！金印だ！！」

「メツキだな」

「お前さ…もう少しは歴史に興味持てよ。」

「嫌だよ、地理で限界。それに俺理系だし。」

そう、何を隠そう俺は理系だ。歴史、古典とか無理。赤点常習。向上心0。

もう開き直っている。

…まあ、一刀にバカにされるとキレルけど。理科、数学はできるからいいの。

…バカにされたの思い出したらムカついてきた。

後ろから、延髄斬りかタイキック何をやんのか考えていると一刀が

急に止まった。∴ CHANCE!!!

「おい、仙刀。アレ見ろ」

「あ？」

正拳をしようとしたら話かけてきた。  
チツ

「どうした」

「アレ」

一刀の指差す先には白服の男。  
ぱつと見、同年代。  
ただドウチの生徒じゃないな。

「部外者∴泥棒か？」

「多分。アツ逃げた！何か持つてる。∴仙刀追って。」

「何でさ。いいじゃん別に。古くさいもの一つ百個盗られようが。」

「よくねーよ。てか、多いから。お前の方が足速いんだから早く行け。」

「人使いの荒いことで∴。ま、追うけど」

一刀は後で殴る事にし、あの白服を追う。  
当然、足音をたてずにだ。気付いてない∴。油断してやがるな∴∴。

狙うか。

SIDE 一刀

…アレ？あいつ、いい顔してんだけど…

あの顔すると碌なことしないんだよな。

あ、跳んだ。て、事は…

「逃げてエ！その白服！！超逃げてエ！！！」

叫んだのが悪かったのか、白服が振り返った瞬間にバカのドロップキックが顔面に突き刺さる。

そのまま白服は倒れて後頭部強打。

うん、綺麗なドロップキックだ。

タイガー スクモホレボレするだろう。

そして、綺麗な着地。

直後

『パリーーン！！！！！！！！！！』

快音。

まあ、こうなるよね

「よっしゃ！！成功！！！！！！一撃で仕留めたぜ！」

「大失敗だよバカ。どうすんだよ…えっと鏡だなこれ…」

カバンを置いて近づく。うわ、粉々じゃんコレ。どうすんだ。

「ハア？鏡？これが？ボケたか？良い病院紹介しようか？」

「うつさい黙れ。昔はこうなの。つーか、どうすんのこの鏡。あんなとこ置かれてたし、多分かなり高いぞ。」

「マジで？」

「うん。学園の物だし、たぶんかなり弁償することになるな。絶対修復無理だなこれ……」

ピロリン

あれ、今こいつ何した？

「よし、逃げるぞ」

「待てやゴラ。何しに行く気だ。」

「この写メ見せて一刀が鏡割ったことにするだけだ」

「何てことしようとしてんだ……！」

「だってお前の言い方だとメツチャ金取られそうじゃん……！ケツの穴ちぎれるまで……！」

「無えよ……！二つの意味で無えよ……！！！」

コイツ……正真正銘のクズ……っ……！！

「止める！！放せ！！掴むな！！」

「放したら逃げるだろうが！！」

「うん！！」

「絶対に放さないからな！！放したら俺に全部なすりつけるだろ！！」

「当たり前だアアア！！」

「小学校から道徳やり直せエエエ！！」

…武道つて、人間教育も兼ねてるんじゃないっけ？

武道やってガチのクズがいるんだけど、なんとかして下さい。そんなことしてたら急に仙刀が抵抗を止めた。

「おい、一刀…後ろ…」

仙刀に言われて振り向く。そこには

粉々に砕けた鏡から光が溢れだす幻想的な光景  
思わず力がゆるんだ。

「今のうちっ！！」

「逃がすかあ！！」

その瞬間逃げ出しやがったクズのズボンの裾を掴んで捕まえる。  
ベブオとか奇声を発したが気にしない。

「お前掴むな！！鼻打った！！」

「ふざけんな！！てか、何で俺のカバンも持って逃げようとしてんだ！！」

「お前の財布と貴重品をパクるために決まってるんだろっが！！」

「最低だよ！お前！！」

必死で格闘してると何やら引つ張られる感覚。まさか…

「お前何やってる！！引つ張んな！！」

「違う！！鏡が吸い込んでる！！」

「どっという理屈だよ！！」

「分からない！その白服何か知ってる！？」

仙刀が蹴り飛ばした奴に話を振る。

…頼む…答えてくれっ！

だが祈り虚しく、そこには完全に伸びていた白服。

「へんじがない。ただのしかばねのようだ…」。

「なんでそんな余裕なの！？ってウワツ！！」

急に吸引力があがった。ヤバい外れるっ！

「よし、剥がれた！！これで勝て「逃がさんっつ！」ギャアアア！  
！また取り憑かれた！！お前何なの！？新種のボ ビー！？」

「許さない…逃げるなんて…絶対に…！！」

ここで逃がしたらマズイ！！！！

「ヤンデレ風に言うな！！キモいから！！くそっ！！手を蹴れば…  
分かった蹴らない！！止める！！だから登って来んな！！腰から手  
を放せ！！」

「ヤダ」

「正気かお前！！」

傍からみたらヤバい画だけどそんな事気にしてる場合じゃない！！

「オマエハミチヅレダ…」

「怖エエエ！！怖いから止める！！」

「オマエダケニゲルナンテユルサナイ…ッ！！」

「ぐああああ！！貴様ああ！！」

SIDE 三人称

末代から呪ってやるからなあああ！！！！

という叫びが止み静かになった資料館。

そのの伸びた白服以外にもう一人いた。メガネの男が

「やれやれ、災難でしたね、左慈。大丈夫ですか。」

眼鏡の男は伸びている白服に話し掛ける。

「ん、くああ」

「お目覚めですね。さあ、帰りましょう。」

「……………」

「左慈？」

左慈と呼ばれている白服は目を覚ましそして…

「あれー、ここどこー？」

強い衝撃で記憶喪失プラス幼児退行していた。

そして眼鏡の男を小首を傾げてクリッククリの目で見る。

「クハツツツ!」

そして資料館の一部が紅にそまったが、それは些細なことだろう。

## 外史入り（後書き）

次回から本編になります。

これからもこの駄文をよろしくお願いします。

## キャラ紹介 主人公（前書き）

本編の前に。

読み飛ばしてかまいません

## キャラ紹介 主人公

オリ主：南郷 仙刀 >なんごう せんとく

性別：男

立場：武将

特記事項：格闘好き 特に空手、合気道。他の武道の技も使います。

名前：北郷 一刀

従来の主人公。むしろ、同姓同名のオリキャラの扱いが正しいかも。

立場：文官

特記事項：この作品では蜀 で甘やかされるのではなく、成長する一刀を書きたいと思います。突っ込み、ぼけの両刀使い

名前：????

真名：????

性別：????

特記事項：とある有名諸侯の関係者。

外史で出会うオリキャラ。仙刀、一刀が成長するためのキーマンを

予定。

## キャラ紹介 主人公（後書き）

次回から本編に本当に入ります。  
よろしく願います。

**まさかの修業編！？（前書き）**

本編スタート

よろしくお願いします。

まさかの修業編!?

SIDE 仙刀

「一刀!!お前のせいで変なとこ来たじゃねえか!!責任とって去勢しろ!!!!」

「黙れ!!お前が鏡割ったせいだろうが!!責任とって腹切れや!!!!」

何か周りの景色がドラ もんのタイムマシンで入れる空間っぽいけど気にしてる場合じゃねえ!!こいつを始末するのが先だ!!

「大体何でまだ俺のカバン持ってんの!？」

「パクると言っただろうが!!」

「返せ!!」

「ヤダ!!」

いい加減しつこい野郎だ…

そろそろウザイ

「あー!!とりあえず腰から手を離せ!!」

「タラバツツ!!」

SIDE 三人称

さて、ここで賢明なる読者諸兄に聞きたい事がある。柔道技で内股というのをご存じだろうか？

知らない方への説明としては簡単に言おうと相手を掴み片足で相手の太股をとって投げる技だ。

この際、股関節あたりを狙うのがポイントとされている。尚、身長差が大きい。技使った方が下手な時には股間強打の惨事になる。

そして一刀の身に何があったのかは想像にお任せしよう。

そして、この状況下で喧嘩、罵りあいをする二人を見て

『ああ、こいつらはバカじゃないか』

と思った管理者が多数いたそうなの。

『あれー？変なところ来たよー？宇吉ー。』

『ムフフフ。このご主人様なら私の愛を受けとめてくれるかもしれないわねん。』

『ム、抜け駆けは許さんぞ貂蟬！！』

大絶賛キャラ崩壊中の奴と漢女の管理者をのぞいて…

SIDE 仙刀

「そのまま落ちろ！！」

「んぐ、わアアア！！」

足腰を一気に振って投げる。

それで一刀ボ ビーは剥がれた。

「仙刀貴様!!! 氏ねええ!!!」

「恨むなら、あの世で恨みな(笑)」

突如閃光。そして一刀が消える。

「!? 何で!?!」

そしてまた俺も、のまれた。

白き輝く衣身に纏い天の御遣いが降り立つ。

「華琳様!!! 外を御覧ください!!!」

「ええ、秋蘭。見えてるわ。」

その者。一人は己が拳で、

「雪蓮。」

「ええ、分かっているわ、冥琳。あれは、益州の方ね...。」

もう一人は己が知で、

『愛紗ちゃん!!鈴々ちゃん!!あれ!!』

『ええ、ですが…』

『遠いのだー…』

天下に平和をもたらさん。

『桔梗様!!あれを追わねば!!』

『…焔耶。あの山。流星が落ちた山には近づいてはならん!!』

『何故ですか!!』

『あの山は…』

『黄忠様』

『そうね。各部隊に伝達を。命が出るまで待機。』

『ハッ』

『あれはもつ…。どうしようもないわ…。』

『カイオウ様!!!!!!』

『ふむ…擂台にのう。』

天下が動き始めた。

SIDE 仙刀

っ痛ー。なんだここ？

視界が開け目に入ったのは  
少龍寺とある建物。  
周りは山っぽい。

「なんだ…ここ。」

！！？？

突如悪寒。

「ふむ…よき反応…。筋は良いのう。」

バックステップで間合いをとって相手を視界に入れる。  
なんだこいつ…ジジイか？…  
さっきの感覚も何だ？

「多少、拳法をかじってるみたいじゃのう。」

ジジイだ。多分そうだ。

けど何だこいつは？

肌は皺で鱗のようだ。

髪は真っ白。声も皺枯れている。

拳法衣を着たジジイ…

いや、そんなことはどうでもいい。

ただ…

(スキが無え!!!)

只、立ってるだけ。しかし威圧感がおかしい。異常だ。構えは崩さない。

そのまま話し掛ける。

「すま…すみませんお聞きしたい事があります。」

「何じゃ、言ってみい」

普段使わない敬語。

なぜかこいつには有無を言わずに使われた。

「俺以外にもう一人来ていませんか？黒髪で同じ制服着た男が。」

「いや、おらんのう」

「刀はいないらしい。」

…あいつ…どこいったんだよ…

「それより。」

急に話し掛けられ意識を戻す。

「そこは、擂台というのう。拳闘の場じゃ。」

「そうなのか？」

完全に土足…悪いことしたな。

「すみません」

「いや、別に良い。」

頭を下げるのを止めた。

じゃあ、何でそんな事言っただんだ？

「見た所、ぬしも拳法をしとる。そして擂台で向き合ってる。…やることは一つしかあるまい。」

そういつて口角を吊り上げる。

このジジイがヤバいという感覚はある。

…だけどさ…

「そうですね。一試合やりますか。」

好奇心の方が優ってる！！

この人と試合したいッツ！！

「ふむ、その前にぬしの名を聞いてもよいかの？」

「南郷仙刀と言います。」

「わしは界皇、と呼ばれておる。よろしゅう。」

「よろしくお願いします」

挨拶し、そのまま頭は下げずに踏み込む！

先手とった！

昔からやってきてもう何千、何万ダースやってきた正拳 それは…

「青いのう」

当たった。確かに当たった。

…なのに…入った気がしない。

「どうした？打ち込んでみよ。」

「言われなくてもツツ！！」

正拳、前蹴り、手刀、下段蹴り、貫手、掌底。この技が全て当たった。

…なのにツツ！！

「よしよし。基礎は出来ておる。上達は早いじゃろうな。」

紙に当てたぐらいにしか感じないツツ！！  
なんだよこれ！？

「次はわしじゃ。ホレ」

ゆっくりした拳。

だけど…俺は…

「！？」

全力で退いた。

…体から冷や汗が止まらない。

…なんで？あんなヨボヨボパンチに…

「ッオオオアア!!」

タイキツク!!

一刀と及川を実験だ! モルモットにして鍛えた技。  
それを…

「ヒュウ」

宙を舞う界皇。

分かった。この手品の種が。

「…消力>シャオリ<…ですか?」

「気付いたかのう。よもや、知っておるとはな…」

消力。

人間は通常、衝撃がくる際には体が固まる。

それを逆に体を軟らかくすることで衝撃を逃がす技。

それが消力

巧夫の奥義だ。

「それッ」

「ッハッ!!」

腹に一撃もらった。

胃と肺の空気が一目散に逃げ出す。

そのまま地面に叩きつけられる。

辛うじて受け身を取り頭を守る。

「ふむ、大分加減したんじゃが…」

有り得ない。

それであれかよ。

足が震える。怖いんだ。

だけど…

「呼ツツ!!」

逃げない!!

真っ直ぐ正拳を加える。

絶対に一発ツ!!

フワツ

回転する世界。

足元に空がくる。

そして俺の意識はブラックアウトした。

SIDE界皇

「誰かある?」

「ハツ!」

「この者を休ませよ」

「御意!!」

フム、良き士。

良き強者。

あれで諦めずに向かうか。

恐怖を知りて尚。

最後のは意志の籠もった一撃じゃった。

…育ててみるか。

そしてゆくゆくは…

ふむ、楽しみじゃ。

まさかの修業編！？（後書き）

戦闘シーン書くのキツイ…

誰か文才を！

カイオウは強くなりたくば（前書き）

原作キャラとそろそろ絡めます。

仙刀はどうしようか？

カイオウ、強くなりたくば、

SIDE 二刀

「っ痛ー。」

あの馬鹿に投げられた。

ついでに股間も蹴られた。

…絶対に復讐してやるからな…!!

「てか、ここどこだ？」

現在地は何故か荒野。

…資料館に居た筈なのに

あの鏡のせいか？

…それしか考えられない。

てことは…あいつのせいで…!!

「……………!!」

突如、後ろの茂みが揺れる音。  
バカが居るのか？

「!?!」

一際大きくなった。  
今だ!!

「うらアアア!!」

飛び蹴で仕留める！！  
恨みを全てこめてなあ！！

「…アレ？」

しかし足の先に居たそれはバカではなく、  
黄色い布を頭に巻いたおっさんだった。

「ア、アニキイイ！！??」

あ、ヤベ。  
人違いだ。

・・・

「じゃ、そゆことで」

「待たんかイイイ！！」

さりげなく帰る作戦…失敗

「お前！！よくも兄貴を！！」

「ゆ、許さないんだな！！」  
ヤバッ

怒らせちゃったよ…

「すみません。悪気は無かったです。」

「あんな飛び蹴しといてか!？」

「ホントすいませんでした。人違いで…」

「それで許されるワケ無えだろ!!」

「申し訳ございません」

悪いのはこっちだ。  
本当に申し訳ない。

「チツ…本当に謝る気があるんなよ…」

そう言つてノツポが腰に有るものに手を伸ばす。

…あれは…剣？  
まさかね

「身ぐるみよこせや!!」

澄んだ抜刀音。  
本物？

「…銃刀法つて知ってます？」

「ア？何言つてんだ？」

知らないの!?!?  
どんなド田舎でも有り得ない。  
てか、『身ぐるみよこせ』ってどこの山賊だ。  
うん…賊…??

「オラアアア！！」

「！？」

切り掛かって来た！？

足元を見ると草が切れてる。

え、何？マジ？

ガチ剣！？

「嘘！？その剣本物！？」

「ああ、そうだよ。へへッ…、ビビッてんのかあ」

いや、そうでもない

残念ながら仙刀の空手の方が怖い。

…てか、怖さが、刃物<仙刀ってどういう事だ…

でも…

こっちは素手。向こうは剣持ち。

ヤバい事には変わり無い。

どうする…？

「うっくう」

「兄貴！！」

「お、起きたんだな！！」

ヤバいな…復活かよ…

「よくも、俺の顔蹴ってくれたな…」

こいつも剣持ち。

逃げようにも、逃げれる気がしない。

…万事休すか…

「待てーい!!」

遠くから誰かの声。

…なんかゴレン ヤイが頭をよぎった。  
違うよね？

「この賊共が!!その御方に手を出すな!!」

「ひでぶっ!!」

「あべしっ!!」

「たわばっ!!」

一瞬でのされ、世紀末的雑魚風にやられる山賊(仮)

「この賊共!!劉玄徳が一家臣、関雲長が討ち取った!!」

ハ?劉備?関羽?

…何言ってるのこの人。

SIDE 仙刀

「998!!999!!1000!!」

日課の空手の基本技各千本を終わらせる。

ここに来る前からの日課。

今、俺はここ少龍寺>シャオロンジ<で修業をしている。  
半年前

『お願いします!!俺を鍛えて下さい!!』

俺は土下座して頼み込み、界皇様に弟子入りした。

快諾してくれたのは、正直かなり嬉しかった。

俺は界皇様の強さ、レベルの高さに惹かれた。

いや、違う。

…魅せられた。

あの技に

そして俺の修業が始まった。

「『氣』ですか。」

「左様。」

先ず、習ったのが氣。

どうやら、生命エネルギーらしい。

それは女性に多いとか。

…だが気になったのがコレだ。

「それが豊富な者程強い。故に女子が強い。」

どうやら基本的な強さは

一般女性<男性<氣の豊富な女性らしいが。

こんなこと聞いた事無い。

こんな有り得ない理論が通る。

そこから異世界じゃないかと判断した。

しかし、女が皆強いとかいったら…

…元の世界も同じか…

頭に過った俺のジジイで空手と合氣の師匠が婆ちゃんに追い回される姿を思い出し考え直す。

…それよりもだ。

…あの糞野郎のせいで異世界に送られたのかッッ!!

あいつは俺の拳で潰すッッ!!

「さて、やってみると良い」

早速、氣の体感になった。

瞑想して感じるらしい。

しかしこうしていると眠くな…

「どこだ?」

「ようこそいらっしやいました。南郷殿。」

「!?!?…誰だ。」

「お初にお目にかかります。宇吉と申します。この度は恩を返したくお呼びしました。」

「ホントに誰？初対面なんだけど。」

「ですが、あなたのお陰で左慈をモノにできました。重ねてお礼申し上げます。」

「うーん、記憶に無いな。」

「まあ、ごちらの話ですから。そして私としては何か恩返ししたいのですが…」

「なら…」

そして俺は宇吉には氣の修業を頼んだ。

どうやら夢の中でも術で干渉できるらしく、夜に氣の修業となった。

…その結果。

昼に拳闘

夜に氣の修業（睡眠学習）

となった。

何このスケジュール

甲子園常連の野球部よりキツくね？

日に二十四時間、いや三十時間の矛盾ッッ!!

に近い修業の日々  
しかもその内容が…

「猿退治？」

「ウム。」

「一つ目がこれ。」

しかし只の猿じゃない。

『ホキョアアアツ！！』

…夜 猿？

…死にかけたよ。マジで。勝ったけど。

小便チビらなかつただけマシか…

確かにアレなら地上最強の生物も満足するだろうよ…ッ！！

「二つ目が…」

「また猿退治ですか？」

「然り。これはわしが案内しよう。」

そして来たのが

やったら草木が薙ぎ倒された場所。

「アレを倒せ」

「……………アレって」

真っ黒な体毛

鋭い牙

鬼みtainな二本角

「金獅子？」

「よくわかったのう」

…「コレは無い。」

「おお、そうじゃ。」

界皇様が奴の後ろに近付きなせる。

…まさか!!

「それ」

手刀による一閃。それで  
奴の尻尾を切り落とした。  
マジで勘弁してください

『————ツツ!!!!』

言葉にならない咆哮。

え、倒すの？あれを？

当然、黒かった体は金色へ

あの超野菜人っぽくなってる。

「頑張るのじゃ」

「え？帰んの？ちよ待て」

『……ツツツツ！！！！』

「せめてネコ飯を食わせてえ！！！！」

ハンターの皆様の偉大さがよく分かりました。

G級の方々。頑張つて。

そしてネコ可愛がつてね。

チケツトいっぱい持つてるリーダーもね。

その修業をし、帰つて来たら…

「ツツ！！」

不意打ち

やられたらメシ抜き。

不意打ち、奇襲は受ける側の未熟だとよ。

…俺のジジイにもやられてたよ。残念ながら。

そんな環境下だから、氣は内気功と治癒がかなり出来るようになってた。

外気功とかあるらしいけどムリ。

使える奴いんの？

そんな感じのことを振り返っていたが中断された。

「南郷。」

「ん？」

「界皇様がお呼びだ。付いてこい。」

呼び出しかよ。しかもまた。

「げ、またヤバいのやらせんじゃねーか？あの人…」

「さあ？」

同じ門下の人と話ながら、いらっしやる本堂に向かう。  
今度は何を言われるやら…

「南郷よ」

「はい」

いつもとは違う。

門下がかなり本堂に集まっている。  
…こつ見るとかなりいるんだな。

「ぬしが入門し半年が経った。」

「そうですね。早いものですね。」

なるべく当たり障りないことを言う。  
この人の気紛れは俺の命に関わる。

「して、ぬしの目的は何だったかのう？」

「えーと、何だっけ？」

「忘れたのか？」

「いやー、すいません。余りに此処での修業は中身が濃いですから。」

ホントにな。

「なら、これで思い出すかのう？ホレ。」

「これって…」

渡されたのは、修業始める際に預けた荷物。  
そして制服。目的…あ！！

「あの野郎！！ぶっ殺す！！Y A I！！H A I！！！！」

「…思い出したようじゃのう。」

界皇様が何か仰ってるが関係無え！！

ああ、一刀。オマエヲハヤクシマツシタイヨ…

「ぬしが来た時と同じ事がおこったぞ。」

「マジでござりまするか！？」

そうか…これで一刀の手がかりが！！

「界皇様！！！！ますます消してきます！！！！」

「落ち着け。たわけが」

「べブツ!!」

頭へのチョップが入った。

マジ痛い。

「そもそも何処の話と想ってるのか」

「此処。」

「違うわい。」

「なら何処ですか?」

体がソワソワする。

ホント…何処にいるのか…

「東」

「は?」

「ここからずっと東じゃ」

マジ?

何、面倒臭いところに落ちてんの?

「そこでじゃ。ぬしはその友「実験台です。技の。」…まあ、その者の所にいくのじゃろ。」

「…そういう約束ですしね。」

そう。修業当初の約束。

一刀の居場所を突き止めたら教えてほしい。  
厚かましい願いだなんて分かっている。  
だけど教えてほしい。

俺が土下座したのもコレが理由だったりする。  
やっぱ一刀を放っておく、なんて出来ないから。

「じゃから、南郷」

「ハッ」

「ぬしを破門とする。」

「ハ？」

え？今、なんて…？

「ちょっと破門ってどういう事ですか！？」

「破門。師が門人との関係を断ち門下から除くこと。じゃ。」

「意味じゃねえよ！！何で破門の必要が…！！」

「なら、巧を成さずして皆伝にしてもらう気かの？」

「違いますよー!!」

「まあ、これは決定じゃ。覆らん。諦めよ。」

そんな…

ヤダよ。そんなこと。

絶対に。

「そのような顔をするでない。代わりにぬしには号をあたえよう。」

…号？

「ぬしは相手の攻めを受け入れ守ること、そして攻めの激しさ。その緩急さながら海の如し故に…」

「号を『海皇』。南郷海皇を名乗るが良い。」

なんだよ。それ。

「……………」

「どうした？海皇。」

「その号。海皇。ありがたぐいだだギバズー!!」

正座し、深々と頭を下げる。

嬉しい。

目の前がぼやける。

ホントに、嬉し泣きつてあるんだな。

「よかるう。最後じゃ。この言葉を心に留めよ。」

顔をあげる。

真っ赤な目なんて見られていい。

「強くなりたくば喰らえッッ!!

昼も夜もなく喰らえッッ!!

強者を喰らい続けよッッ!!

して、ぬしは喰われ飽きぬ者であれ。

いくら喰われようが喰われ飽きぬ者。

高き壁であり続けよ。」

「その言葉、ぜっだいにわずればぜんッッ!!」

涙をぬぐう

深呼吸。

「ありがとうございます!!!!」

最後に頭をまた下げる。

もう、二度と会えないかもしれない。

…強くなります。

制服に着替える。

懐かしい着心地。

ここんとこずつと拳法着だったしな…

一刃。

すぐにそっち行くからちよっと待ってる。  
元の世界に帰ろう。

堂から出る。

最後に一礼。

なんか、頭をあげたくない気がする。  
でも…行かないと。

「…荷物忘れとるぞ」

最後の最後で何やってんだ俺…

SIDE界皇

「よろしいのですか？」

「何がじゃ？」

「号です。破門の身でありながら…」

そのことが…

「よいよい」

「界皇様！」

「わしは意外と美食家じゃ。」

「……………」

「そして小龍寺は同門の本気の戦いを禁じておる。」

「……………!!」

気付いたようじゃな。

南郷よ。ぬしはこの世で一番の美味を知っておるか？

皇帝でさえ喰らえぬ美味。

それはよい芳香の強者。

その技を全て下して勝つことじゃ。

ぬしなら集めるじやろう。

その芳香を

ぬしからも漂うやもしれん

その日を楽しみにしとるぞ。

何はともあれ先ずは長生きじゃな。

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ!!

カイオウゝ強くなりたくばゝ（後書き）

若干シリアス（？）

やっぱりシリアスってキツイ

…キツイのばっかだ

VS雷銅！〜ここは益州、白帝城（前書き）

戦闘パート多め

体力がやばい

## VS雷銅！〜ここは益州、白帝城

SIDE 一 刀

「お願いします！！私たちに力をかして下さい！！御遣い様！！」

今、劉備って名乗る女の子に頭を下げられている。

今、分かっている事は

一、目の前の三人は劉備、関羽、張飛の桃園三人組だ。

二、今の世の中は黄巾賊がいる。

三、現在進行形で乱世

四、俺は天の御遣い

だ。

最初はドッキリだ、と思っていたが、  
さっきの賊は

黄巾賊であることに間違い無いらしい。

そもそも、本物の武器を持っているんだ。

今の日本なら有り得ない。

で、一番頭を悩ませるのがコレ

この三人、全員女だ。

どうやら過去に飛ばされたんじゃないけど、  
パラレルワールド的な場所に来た。

…この原因つてさ。  
頭に怨敵の顔が過る。

全部あいつのせいか…!!

「お願いします!!今、力の無い人達が虐げられています!!」

「その世の中を変えるため力を貸してほしいのだ!!」

「皆が笑って暮らせる世を作るため協力して下さい!!」

………

「うーん、大した力には成れないけど、協力するよ。」

正直、この話を蹴る気は無い。

また一人でいたら絶対賊に襲われオダブツだ。

「ありがとうございます!!」

だけど、これは言わないと。

「でも、天の御遣いを名乗るのは不味いと思う。」

そう、これがもし本当に後漢

三国時代なら

天 皇帝だ。

そして、そんなの名乗るなんて、皇帝に対しての喧嘩以外の何物でもない。

「でも、それじゃあ人が…」

「うん。だから、どこか集まる場所…公孫贖の所の義勇軍に成るのが良いんじゃないかな？」

「あ！白蓮ちゃんの所か！！」

「桃香様…まさか忘れていらしたのでは…」

「えへへ」

これが劉備…ね

…皆が笑って暮らせる世。か…

そして、戦う…か

劉備、危ないよ。

その理想。

SIDE 仙刀

お、着いた。

界皇様が仰った方に行ったら城があった。

「先ずは情報だな。」

そして一刀の情報を集めるため入った…けどさ。

「うーわ、何コレ？」

アスファルトなんてひかれてない道路。

車は無い。

電車も無い。  
服が昔。

「…映画村？」

有り得ない。

異世界の上、タイムスリップとか何？

ガチで止めて。  
で、

「おい…、こっちはなあ、出すもん出せや、つってんだよ。」

「や、止めて下さい…今、家にはそんなお金が…」

「アア？なら娘出せや…！」

「キャアツ…！」

「お母さん…？」

そっちは何やってんだか。

なんか…助けに行け！！的なものの匂いがプンプンする。

ま、試したい事あるし丁度いい。

「！？ああ？てめえ何か用でもあんのかよ？」

わざと肩をぶつける。

やっぱこっぴくくるよね。

「……………」

「てめえ…何か言えゴルア」

田舎のヤンキーを上回る首の傾き。

そして、メンチビーム

いやー、

「弱そ」

「「何だとゴルア！！！！」」

一言で切れてくれる三流ヤクザ  
実験台に丁度いい！！

「うらあ！！」

パンチ。遅ッ。

左手で払い、右の手刀を首へ。  
滑らかに入る。

「ッハ！？」

一撃で沈む。

「「てめえ！！よくもやりやがったな！！食らえ！！」」

今度は二人同時。

今度の狙いは足。

「「んなっ!!??」」

体を屈めて軽く体当たり。  
それで相手が倒れる。

「コンバツ!!」

倒れた所で足刀を首に。  
それで終了。

「うん。強くなっている。」

数秒で片がついた。

あの修業が身についてない。とかなっていたら、死にたくなるしな。  
いや、良かった。

「良いねえ、アンタ。強いねえ。」

!?まだ居た!?

「そう身構えんな。俺は警備隊の人間だ。そいつらの親玉じゃねえよ。」

「そうか。ならアレ豚箱にぶちこんどいて。」

さよならモルモッツ

「ああ。だがその前にだ。」

あ、戦闘フラグ

「あんと手合せ願いたい!!」

ほら見る。

申し出は快諾。

しかし街中という事も有り、現在は移動中。

「そついや、お前いつから見てた？」

「さっきの喧嘩かい？アンタが肩をぶつけた所からだ。」

「警察がそれってダメだろ」

笑いながら答える

「ハッハー!! 違いねえ!! だが喧嘩好きってのは俺の性分だね。死ぬまで治らねえよ!!」

こいつ楽しいわ、やっぱ。

メツチャ良い奴だ。

豪快な性格。

馬が合うってこの事だな。  
きつと

外見は2メートル近い大男。

髪は銅色で、ライオンを連想する髪だ。

筋肉質な体。

筋力勝負は不利だな。

そして片手には二又になった槍。

その後ろは鉄を固めてある。

刃の付け根には虎の皮が巻き付けられてる。

重そうだ

会話を楽しみながらも観察は欠かさない。

敵のタイプは把握しないとね。

「でだ、今何処に向かってんだ？」

「ああ、手合せなら審判が必要だろうが。お、居たな。」

視線を前にやるとコレまた大男。

鹿の角みたいなのがついた兜に

全身に鎧を纏っている。

そしてやっぱり武器持ち。

槍だ。ただ突きと斬るを両方求めてか刃の部分がデカイ。

「おーい忠!!こつち来てくれよ!!」

「む、慶にござるか。」

どうやら、友ダチみたいだな。

「おう!!これから一手仕合つからよ。審判やってくれや。」

「よかるう。」

話。ついたみたいだな。

「さて、仕合うか」

「え？ここ？」

普通に街中だぜ？

「何言ってるんだよ、あんた。あんたも戦人だろ？戦いを楽しむ奴の面してる。」

真っすぐ俺を見据える。

こっちも観察されてたって事か。

「俺の言葉、間違っているかい？」

喧嘩は試合と違う。

危険なものが多いところなんてサイコーだ。  
そして見物客は

「…大正解だよツツ！！」

多いほどいい！！

「待たんかア！！」

突如一喝。

…楽しい所で ハア

「なんだよ。出鼻挫きやがって。」

「慶。我らは警備隊にござる！街中での私闘など唾棄すべきことなり！！」

「チツ頭固いな、おい。」

「なんとも言うつが良い。道場はそこござる。」

「分かったよ。じゃあアンタ行こうぜ。」

「ああ、さつさとやろう。」

指差す方へ行く。

道場は意外と広い。

…暴れても大丈夫だな。

「所で、アンタの名前は何だい？」

いつまでもアンタは悪いだろ。

ちなみに俺は雷銅。只の戦人だ。」

遅れながらも自己紹介。

なら、俺も名乗らないとな。

「俺は南郷仙刀。よろしく。」

「へえ…珍しい名だな。どう分けるんだい？」

「名字が南郷、名前が仙刀。てか、普通じゃない？」

「普通じゃねえな。名字なんて初めて聞いたぜ。」

何だこの世界？  
俺の常識が通じないかもな…

「まあ、名がなんであれ、南郷が戦人ってことは変わらんさ。  
さあ、戦人と戦人が出会えばそこが戦場だ！！  
楽しくやろうぜ！！」

「ああ、楽しくな。」

自然と口角が吊り上がる  
心搏数も上がる。  
制服の上着を脱ぎ捨てる。  
こんなの邪魔だ

「ところで南郷。お前得物はいいのかい？」

「俺は拳法家。武器は拳足だけだ。」

そもそも使える武器なんて無いから。

「いいねえ。アンタ最高だ！！本気でいかせてもらおう！！」

ああ、芳香だ  
強者の芳香だ

「来いッッ！！南郷海皇舐めるなよ！！」

「戦闘開始ッ！！」

鎧男の大声

太鼓の吠える音

… 始まった!!!

「……………」

迂闊に近寄らない。

間合いを詰めない事には始まらないが、近寄らない。

力をはからないとな…

女性のウエストのような腕ってこんな感じだろうか。

腕力勝負はしない

… となると

戦う手段は限られる。

「オウツツ!!」

下からの振り上げツツ!!

膝を曲げて避けるツツ!!

「シャアツツ!!」

勢いを利用し回転しながらの一閃ツツ!!

はかるツツ!!

「ツハア!!」

掴む!!

手から悲鳴。  
重いツツ!!

「吹き飛びなあツツ!!!!!!」

「んがツ!!」

槍をそのまま力ずくで振り回す!!  
手が遠心力に負けて振り落とされるツツ

「んだツツ!!」

そのまま壁に叩きつけられた。  
だがまだ雷銅は止まらない!!

「ハツハー!!」

ダッシュ攻撃!!  
速さも叩きつける気が!!

「ラアツ!!」

「シツ!!」

屈んで避け足狙いの体当たり!!  
倒す!!

「それは知ってたんだア!!」

跳躍!!

それで躲された!!

「上え!!」

「!?!?」

上からの逆突き!!

槍の後ろの鉄の塊が降ってくる!!

「ッッ」

前回り受け身で逃げる!!

「良い動きだ!!楽しくなってきた!!」

「チッ…この馬鹿力が!!」

こいつ…夜叉 より強い!!

「まだいくぜ」

槍での斬ッ!!

「カツ!!」

只避ける!!

そして懐へッ!!

「オウッ!!」

裏拳！！左の裏拳！！  
馬鹿めツ！！  
とるツ！

よけて勢いが落ちる時を狙う！！

左腕をとる！！

右手で掴み投げる！！

左は顎へ！！

「ツガツ！！」

頭から床に叩きつける！！

左を外し、顔への下段突きツツ

骨と金属の衝突音

槍の柄で防ぎやがった！！

バックステップで間合いを開ける。

「ツハツ！！」

立ったか…スゲエよお前。

だけだよ

「あれだけ打ったら景色がドロドロじゃろっ」

あれは会心の投げ…

それで頭を打ったら相当キツイ。

人によつては死ぬだろう。

「っはー、はー、」

「幕の引き時だな…格好良くな」

構えて深く腰を落とす

正拳ッ！！

腹に拳が突き刺さり

吹き飛ぶ巨体

槍が手から落ちる音

「決着ッ！！」

…勝ったッッ！！！！！！

「驚き申した。よもや素手で勝つとは…」

「スゲエだろ！」

「ああ、本当に強いな。南郷。」

「復活ハヤッ！！」

…こいつ人間？

「慶。お主の負け、素直に認めよ。」

「もう認めてる。槍も落としちゃったしな。」

やっぱりこいつ最高！！  
メツチャ気持ち良い奴だ！！

「あ、スマン。少し聞きたい事があるんだけどいいか？」  
「刀、そしてこの世界の情報を集める。」  
「こいつらなら嘘はつかない。」

「ああ、いいぜ。なんだって聞いてくれ。」

「先ずここ何処だ？」

「益州。永安の白帝城だ」

どこ？

「何それ？」

え？マジで分かん。  
どこ？

荷物の中に地理の教材あるか？  
あった。

「益州：無いぞ」

「何だいその本は？」

「え？地図帳だけだ」

「なんだいこの絵は？」

「世界地図」

…なんで知らんの？

なんかスツゲー穴が開くほど見てる。

「益州か…中国っぽいな」

「中国？どこだい？」

は？

え、どういうこと？

「中国知らんってアウトだろ。アメリカ知らんぐらいやばいぞ。」

「あめりか？あうと？」

え？

何か凄い食い違いしてるような？

地図帳めくり中国のページへ何だ？何が起きてる！？

「忠、慶いるか？交替だ」

「うつせー邪魔だ！！」

「何事だ？」

誰か来たが気にしない！！

あつた！！

このページ！！

「これ！…中国コレ！…」

「ここらが益州だ」

ハイ？

「…慶は何をしている？」

「あれの相手にござぬ。」

外の声は気にしない。

どゆこと？

「この国の名前って何？」

「」「漢」「」

なにそれ？

「すみません。もう一回」

「」「漢」「」

「あ、聞き間違いじゃなかったのね。」

……

行き詰まった…

「なあ、あんたスマンこつちからも聞きたい事が出来た。」

「？何？」

「あなた、天の御遣いなのかい？」

…なにそれ。

VS雷銅！〜ここは益州、白帝城（後書き）

…原作キャラそろそろ出さないと…

く旅立ちく 一刀殺るため三千里 (前書き)

やっと旅立ち。

合流するのはいつやら…

く旅立ちく一刀殺るため三千里

SIDE 仙刀

… 大体理解した。

漢 II 中国らしい。

初めて知った。

そして俺だが今の立場が

外国人そして…

異世界人、且つ未来人

… 誰か憂鬱な奴がいんの？

涼宮 ルヒ的な奴が。

氣を超能力としたら俺一人でS S団三人分だ。

ちなみに外国人、未来人はバレタ。

一刀の荷物のなかにあつた世界史のせいだ。

その結果

「漢が滅びるねえ。まあ、兆候はすでにあるな。」

「左様。最早漢は末期にごぞる。」

「ふん、曹魏、孫呉、蜀漢の三国か…」

この国の歴史ばらしちゃった。テヘッ

… 我ながらムカついた

で、あと聞いたのが真名。  
それがもう、大変でさ

「そついや、雷銅。お前さっきから慶って呼ばれてるけど何？  
あだ名？」

「「「！」「」」

「あれ？悪いことした？俺？」

なんかヤバい雰囲気…

「南郷殿。それは真名にご迷惑。」

マナ？

あー、デュエ でクリーチャー召喚に支払うアレ？

「真名とは命と等しいものだ。勝手に呼んだら斬られよう」と文句は  
言えぬ。」

かなりヤベエ！！  
何それ怖い。

「雷銅ゴメン！！ほんとすいませんでした！！」

秘技！バク宙土下座！！  
全身全霊で謝る。

…ゴメン。

本当に良い奴なのに…こんな事しちゃって…

「……………」

無言

ヤバいメツチャ怒ってる。

「ごめんなさい。本当ごめんなさい」

「？何謝ってたんだ？」

「ハア？」「ハア？」

「俺を無手で下す程の漢。アンタの事気に入ったあ！！」

「は？」

あれ？何かおかしい。

「アンタに真名を預ける前に呼ばれた。むしろ光栄。首を取る気は毛頭無い！！」

「お前何言ってるの！？」

こいつらの説明と俺のバク宙を返せ！！

「あべこべな形だが俺の真名を受け取って欲しい。俺の真名は慶>ケイ<！！よろしく頼む。」

「え？命と等しいんじゃないの!？」

「ああ。あんたじゃ無ければ叩き斬っている。たが…」

「だが？」

「あんたが異国の人間だと知って予想はついていた。可能性の一つが現実になっただけさ」

「……………」

デカイ…器がデカイ。

「アンタには真名が無いんだろう?返す必要も無いぞ。」

「…仙刀だ。」

「うん?」

「俺のダチは名前と呼ぶ。」

…仙刀と呼んでくれ。」

「ああ!?!」

てな具合に友情が芽生えた。  
戦って勝って仲間が増える。  
どこの週間少年ジャンプ?

そして他にも…

「仙刀殿。用意はできてござるか？」

「ん。大丈夫」

この侍言葉が

張任

真名が忠>チュウ<

あの後、慶がそこまで認める漢なら  
とか言って預けてくれた。

真名って重いんだよね？

俺の中で真名のインフレがヤバい。

で、もう一人。

「何をしている。買い物に行くのだ…早くしろ。」

途中から来たコイツ

名前を冷苞

真名を仁>ジン<

身長は俺よりちょっと高い。

180センチぐらい？

外見は

黒髪で前髪をセンター分けして

後ろ髪は一本に首の辺りに纏め下げている。

なんか面が冷酷ってか、冷静っーか、冷の字が似合う。

ポケ ンなら間違いなく、こおりタイプ  
そんな感じ。

そして今、武器屋にいる。

慶が『素手だけじゃ危ないから』と提案したからだ。

確かに分かるけど…

絶対、武器なしの方が強いぜ俺は。

武闘家にどうのつるぎとか装備させたら攻撃力さがるじゃん。  
それと同じ理屈だ。

「よう！ー！親父！ー！邪魔すんぜ！ー！」

「らっしやい」

「うわー、メツチャRPGっぽいわー。」

「オイッ」

「ヤバッ」

俺たちの間で決まった事がいくつがある。

？御遣いであることを隠す

これは占いが原因だ

カンロだったか、カイロだったかが言った占いの内容がかなり有名  
になったからだ。

どうやら『天』がアウトらしい。

理由は… 忘れた。

？ 制服は着ない。

これまた占いで白き輝く衣とあつたのがマズイ。制服がその条件にじっくり当てはまつたからだ。で、特定されるのを避けるためだつてさ。

？ 偽名を名乗る

これまた特定を避けるためだ。

まあ、偽名といつても

姓 南 名 郷 字 仙刀

となつた。

… 偽名？

？ 武器を持つ

これも占いのせいだ。

どんだけ占いに縛られるんだよ…

て、ワケで武器屋。

色々ある。

ひのきのぼう

こんぼう

どうのつるぎ

たびびとの服

皮のよろい

皮のたて

… これなんて最初の町？

割ってくださいと言わんばかりにある壺とタルから目を離す。

うまのふん。なんかありませんよ。

ほのかにかぐしい香なんか無いんだっ!!

今だけつまれ俺の鼻!!

ふと気付くと赤い宝箱。

「……………」

開けた方がいいのか？

いや、やったら泥棒だろ

しかし、あれだぞ。宝箱だぞ

ミツクの可能性が…

駄菓子菓子ここまでドラ エなんだ。

開けた方が…

「おい。」

「!?!?はいつ!?!?」

急に店主に話し掛けられる

めっちゃビクツた…

「その宝箱は開けるなよ。いいか!!絶対の開けるなよ!!」

開けるということですね。わかります。

ご丁寧にダチヨウ倶楽部的流れまで。

…こりゃあ開けるべきでしょう

「すまんが一時、廁に行くから待ってる。いいか絶ッッッ対に開けるな」

「……………」

そう言っでどこかに行く店主。

「……………」

パカッ

「開けるなと言ったるうが!!」

「戻るの早いなオイ!!!!」

俊足で戻っできやがった!!

ボトより早くね!?

「で、何これ？」

中に入っでたのは手袋。

ただのではない。

全部の指先に長い刃がついている。

てか、某海賊漫画で服にウコの絵がある、あの執事で海賊だった奴の武器っぽい

「何これ?いくら?」

「引き取ってくれるならそれで構わん。」

マジ？ラッキー

でも何で？

「それは…呪われた武器だ…」

「呪？あるわけねーだろ」

「いや、事実だ」

そう言っただ店主はポツリポツリ語りだした。

「それは…俺が昔作った武器だ…切れ味は最高。俺の最高傑作になる筈だったんだ…」

俺は店主の言葉を茶化さず静かに聞いた。

「名前を『化猫』と言った。

だからかもしれん。これは化けたんだ。

…呪の武器にな。

これは今までに三回売れたんだ。」

「……………」

「だが一人目は抜刀した際に自分の足を斬り…」

「待てや」

「何だ？」

「どう考えても買った奴の不注意じゃねえか!!」

「いや、呪だ」

「.....」

「話を続けるぞ。二人目は汗を拭おうとして腕を切り」

「おい待て!!また不注意だろ!!」

「いや、呪だ」

「呪すきだな!!」

「三人目は.....」

「話続けんなアアアア!!!!!!」

「上官との訓練で上官の髪の毛を剃り落とし  
それが原因で惚れた女にふられ、その腹いせに軍をクビにされたんだ。」

「どこが呪!?てか、もう面倒臭いから、これ貰っていくからな!!」

「待て!!!今、それに続く話を考えているんだ!!」

「じゃあ呪とか嘘八百じゃねーか!!!!!!」

「だって呪とかあったりするとか格好いいじゃん!!」

「黙れ、髭面厨ニイイイ!!!!!!」

「ギャアアアア!!」

「おう、仙刀。決まったかい？」

「うん」

「じゃあ金……」

「タダだよ。」

「は？」

「タダ」

「……ま、それでいいか」

翌日

「本当にお前らも来んの？」

「ああ、こつちに居た所で暇だからな。」

「左様にござる。劉障でなく仙刀殿の力になろう。」

「フツ…貴様の目指すもの見届けさせてもらおう。」

結局全員ついてくるってさ。

男四人の旅…

最悪以外の何物でもない。

ムサイから。ガチで。

「さあ、仙刀。先ずは真つすぐ北に行くぜ。」

「北？何で？」

さっさと一刀を抹殺したいのに…

「ああ、涼州に行って馬を何とかしないとな」

「俺としてはさっさと虫けらと合流したいんだが…」

「なれど、急がば回れとの言葉もござる。」

「馬をさっさと手にいれるぞ。無駄口叩く暇など無い。」

一刀との合流。

この旅の目的は皆、受け入れてくれた。

ちよつと回り道だけどすぐ行くから待ってるよ。

「そっか…じゃあ行くか!!」

「おう！」「ハッ！」「行くぞ」

まともれよ…

SIDE 黄忠&嚴顔

「桔梗様、紫苑様お手紙が来ております。」

「なんじゃ？焰耶みせよ」

「ええ、誰からかしらね」

「はいッ！こちらです。」

「どれどれ」

「ふうん」

「誰からですか？」

「焰耶の兄弟子からじゃ。『再見』とデカデカ書いてよこしおったわい」

馬鹿弟子が。碌に挨拶も出来んのか。

「兄弟子？」

「ふふつ『恩に報いずに去る不孝な弟子をお許し下さい』ね。相変  
わらずねあの子は」

大丈夫。あなたは私の自慢の弟子よ。

「しかし、行ってもうたか」

「そうですわね…」

行ってくるがよい、慶。

行っでらっしやい、忠。

く旅立ちく一刀殺るため三千里（後書き）

簡単キャラ紹介

名 雷銅

真名 慶>ケイ<

中国読みだと>チン<になりますが  
ケイでお願いします。

イメージ 戦国無双の前田慶次

名 張任

真名 忠>チュウ<

イメージ 戦国無双の本多忠勝

名 冷苞

真名 仁>ジン<

イメージ 三国無双の曹丕

そろそろ原作キャラが多くなります。

これからもこの駄文をよろしくお願いします。

南郷流格闘術奥義亜空間殺法（前書き）

ちよつとした番外です。

## 南郷流格闘術奥義亜空間殺法

SIDE 一刃

「今日は此処で野宿となります。」

「…ゴメン。皆」

「うん。悪いのはご主人さまじゃないよ。」

本来、村に辿り着く筈だったが着かずに野宿。  
その原因は…

「うん。よろしく三人とも」

桃園の誓いを生で見れた。

凄いな。本当に三国志の世界なんだな。

そして三人から真名を預かった。

…問題はそこから公孫贗のいる所に向かう途中だ。

「そういえばご主人さまともう一人、御遣い様がいるんだよね？どんな人が知ってる？」

「たしかに、気になるのだ!!」

無邪気にあれについて聞いてくる桃香と鈴々。

…どうする？オブラートに包んで説明するか…

「外道、人間のクズ。世のため人のため死ねばいいと思う。」

「「「はい？」」」

うん。上手く包んだ。

「えーと、ごめん。もう一回言ってくれないかな？」

「外道、人間の最低辺。さっさと死ね。」

「変わってない!？」

マズイ。ちよつと本音がでた。

「…すいませんどこか良いところ」微塵もない「…そうですか…」

愛紗が控えめに聞いてきたけど、あいつの評価は変わらない。

仙刀のいいところより、Gのいいところの方が絶対多い。

「な、何があったの？」

「此処に来る前に色々。」

資料館のことやら、部活のこと、普段の生活の事を話した。したら、桃香は

『…無い。そんな人がいるなんて…』  
と青ざめた顔で呟き

愛紗は

『…賊徒の方がまだ真人間ですね…』  
と賊に対する評価が軽くアップ  
まあ、人類最低辺と比べたら相対的にそうなる。

で、一番重傷なのが鈴々。

『……………（ガタガタガタガタ）』

…無言。あの明るい鈴々がただ震えていた。

「まあ、これはまともな方で…」

「…え？これ以上があるの！？」

うん。俺だつて信じたくないよ。  
でもあるんだよ。

「でも、ご主人さま。」

「うん？」

いつの間にか復活した桃香。  
意外とメンタル強いのか？

「なんか、その人のこと話すとき楽しそうだね」

……………

「そう?。」

「うん。なんか明るい感じがする」

「確かにそうですね。」

「楽しそうだったのだ!」

そうか?

かなりあいつを殴りたくなっただけだな…

「ま、楽しいこともあったな。」

「だから、いい人でしょ!!…多分」

「あ、やっぱりそこらの信用は無いんだ」

「まあ、話を聞く限り鬼畜ですから」

愛紗も笑う余裕ができてきたのか、笑ってる。

「仕方がないことなのだ!」

あんな状態だった鈴々も完全復活し笑顔。

やっぱり桃香には不思議な力があるんだな。

同時に自分の中を見抜かれたような恥ずかしさもあって…誤魔化すようにポケットに手を入れた。

「ん？」

気付かなかったけど何かポケットに入ってる。

「何が？」

取り出すとラムネ菓子みたいなモノが入ってるケース。

表面に『大丈夫！！頑張れ！！』と  
見覚えある馬鹿の字。

「何見てるの？」

「仙刀…。もう一人の方からのもらい物だな。」

いつ、もらったのか分からない。

けどその文字は素直に嬉しい。

…ちよつとぐらい、いいとこ話しておくか。

「なんて書いてあるのか分からないけど、  
その人が実はいい人って何となく分かるよ  
今、ご主人さまとっても優しい顔してるもん」

「…桃香。この菓子いる？」

「別に良いよ。ご主人さまのものだもん。」

「いや、感謝の気持ちだからもらってくれないかな。」

「じゃあ、それなら」

ハコを開けま<sup>ず</sup>は桃香の手に一粒  
当然二人にもあげる。  
でも、ま<sup>ず</sup>は桃香に。

そして地獄の幕が開いた。  
だ<sup>っ</sup>て仙刀だ。  
マトモな物が入<sup>っ</sup>てな<sup>か</sup>った。

桃香の手に落ちる筈<sup>だ</sup>った白いラムネ  
だが実際は  
茶色いなにか  
何<sup>で</sup>？

「あ<sup>ー</sup>!!」

止める間もなく桃香が飲<sup>ん</sup>だ。  
嫌な予感<sup>…</sup>

「臭い!!臭いよコレ!!何!?何なの!?!」

桃香の手に落ちたアレ  
匂いで分<sup>か</sup>った

『正丸』だ。

そして吐き出しても尚、残る異臭。

川にいつて濯いでも匂いが消えない。

あのバカの細工があるんだろう。

そして、その結果、野宿。

「「「許さん！！！！南郷仙刀！！！！」」」

その時、俺たちの心は物凄く一つだった。

**南郷流格闘術奥義亜空間殺法（後書き）**

この 露丸トラップはリアルでやりました。

教室内に入りたく無くなりました。

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません(前書き)

先ずはここ。

予想通りの人たちが出ます。

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません

SIDE???

「ほら、月こつちよ」

「へう…待ってよ詠ちゃん。ちょっと疲れて…」

最近、領内に賊が増えた。

それで月と僕の仕事が増えた。

…それだけならいいんだけど最近、月は頑張りすぎて休んでないみたい…。

だから僕は月を外に連れていく事にした。

選んだのはこの森。

木が適度に生えているから、陰と光が丁度良い。

森の周りは霞とその部隊が守っているから賊の心配は無く、虎がいたなんて報告もない。

「月ここ。座って」

「ふう、良いところだね詠ちゃん。」

森林浴。

これなら月が休めるし、気分転換になる。

『……………』

と思った矢先に影が差す。

後ろを見ると

「キヤアアア!!」  
居ないはずの虎がいた。

SIDE 仙刀

旅に出たはいいが困難に早速打ちあつた。  
…食糧難だ  
だから昨夜…

『グルアアア!!』

「あーもう、うっさい!!」

『グオオオ!!』

狙いは首!!

首の上で座禅をくむ!!

『グルオオオ!!』

とつた!!

「転蓮華」

一瞬ドヤ顔。

そして体を傾けるッ!!

骨の碎ける音

首のまわりを一回転ツツ！！！！！！  
戻ったら下段突きツツ！！！！！！

「突きイイイ！！！」

そうして俺は虎を狩った。

「…素手で虎を殺すとか、あんた本当に人間かい？」

「当たり前だろ。愚 独歩もやったんだからよ。」

「誰にござるか？」

「こつちの話だ」

夜叉、金獅子と比べたら虎なんて可愛いもんだ。

「私としてはあの技の方が気になるが」

「転蓮華か？」

転蓮華>てんれんげ<

界皇様から教わった中国拳法の技の一つ  
相手の首の骨を破壊する技だ。

「…恐ろしい技だな…」

まあ、今の時代なら治せないからな  
いや、華陀ならいけるか？

『ゴットヴェイダー!!』』

華陀とは旅の途中、漢中で知り合った。

ノリで仲良くなり氣で他人を治す事を教わった。

『ゴッドヴェイドゥー』で治療が出来る事を言った時何故か白い目をされた。

仁に至っては0ケルビンの視線だったからな…

「で、この虎どうすんだ？」

「え？食わんの？」

「あんた猪も狩ったじゃねえか。誰がそんな食つんだよ。」

「慶、忠、仁」

「…否定できぬ」

ま、虎は明日の飯。

楽できたから良しとしよう。

で翌朝、虎を担いでいたら

『キヤアアアア!!』

悲鳴。

音源の方に女が二人倒れてた。

…俺のせい？

『月つち！！詠！！何があったんやー！！』

遠くから声

「仙刀。」

仁から話かけられ意識を引き戻す。

「身なりからしてこの二人はこの州の重鎮、富豪である可能性が高い。」

気絶させたとあらば厄介だ。誤魔化せ。」

仁からのアドバイス。

ここは素直に受け取る。

「！？虎！？何で此処にいるんや！？」

来たのは関西弁の女。

…強い。そして速い。

「アンタ等、此処で何しとるんや？」

殺気が滲んでる

そしてさり気なく倒れてる二人の盾になってる。

…関係者か

「ああ…実は…」

「仙刀さん。危ない所をお救い頂きありがとうございます」

「月を助けてくれた事に対しては礼を言っわ」

「仙ちーのお陰やな!」

「……………ありがとう」

「月殿救助の礼をする。ありがとうございます。と恋殿は仰っているのですぞ!」

「貴様が居なければ董卓様は無事ではなかった。礼を言う」

ざ、罪悪感がアアア!!

あの後、仁にも協力してもらって上手く誤魔化した。その結果犯人 命の恩人となり、今は城で感謝されている。

だからさ…

「ええ、本当にありがとうございます。貴男は命の恩人です。」

罪悪感がヤバい!!

だってこの娘メツチャ良い笑顔してる！！  
疑ってないもん！！全く！！

あ！！何か胸の中に黒いものが！！  
取ってエ！！この黒いのとってエエエエ！！

「心からの礼。嬉しく思います。」

仁！？なんでお前そんな堂々としてんの！？  
嘘の七割お前の口からだぞ！！

おい！！笑うな！！

何良い奴の笑顔してんの！？

「だが、私達には旅の目的があります。

願わくばその旅のための馬を頂けませんか？」

え？ここで頼むの？

図々しくない？

「はい。そんなものでよろしいのなら」

止めてエ！！

そのキラキラした笑顔！！

頼むからそんな顔で見ないで！！

この汚れた俺を！！

申し訳なさがヤバいから！！

「見た所、四人いらっしやるので四頭でよろしいですか？」

ホント止めてエエエ！！

「…何してるのよ南郷は？」

「……………びよーき？」

うアアアア！！

俺の所為なのに！俺の所為なのにイイイイ！！

申し訳なさから額を叩きまくる。

月、その優しさが痛いよ…

俺の心に刺さるんだ…

この娘が起きたら、霞が事情を説明。

そして感謝の印として月、詠、霞から真名をもらった。

で、月はかなりの有名な権力者らしい。

名前だけで慶と忠は驚いていた。

大守ってやつらしいけど意味は知らない。

…聞いたらマズイ気がしたからな…

で、城に来てここ…玉座の間だったかに招かれた。

そこで、赤毛の娘と子供、恋と音々音から真名をもらった。

華雄は結婚相手にしか言わないってさ

で、その赤毛が呂布。

…かなり強い

音々音はこの国最強だ。と言ってた。

反論できなかった。

俺は界皇様だと思う。

でも、恋が相手ならどっちが強いかなんて分からない

でだ。

その時点で申し訳なさがマックス。

しかし、仁が

『真実話したら始末する』

的なビーム出したから話せず、

ズルズルときたらこの流れ

…ゴメンよ、月。

俺は弱いんだ…

「しっかし、仙ちーって強いんやな!! 虎を素手で叩き殺すなんて初めて聞いたでウチ!!」

「別に他にも居ると思うけど…」

愚地 歩とか範馬 次郎とか範 刃牙とか花 薫とか…

ダメだ。グラップラーでしたらアウトだ。

「謙虚やな!。そないな人間そう居るわけないやろ。せやから…」

あ。この流れ…

「ウチと戦ってくれへん?」

ほら。

「別に問題な「待て!! 霞!! 私も目を付けていたのだぞ!!」」

………恋も「…は?」

あれ？まさかの展開？

「ほら！！アンタたち！！南郷は僕達の恩人なんだからあんまり迷惑な事しない！！」

「いや、少しぐらいなら大丈夫だ」

申し訳なさがあるから、向こうからの提案も飲む。  
見れば三人とも強そうだ。  
少なくとも見かけ倒しは無い。

「なら、三人共や。」

おい待てや

「もてるねえ仙刀」

「ヤダよこんなモテ期。」

どこか呑気な慶。

俺にそんな呑気にいられる余裕は無い！！

美少女三人に取り合われるシチュエーション。ハーレム展開だ。  
戦いが無ければな！！

心の中で愚痴っても始まらない。  
話は三人ともやるになって、今は順番決めしてる。  
なんとか一人に…！！

(仁頼む!!)

目線でメッセージを送る。  
慶と忠は煽る気がしたから頼まない。

(ふん。まあ、良い)

薄く笑ってくれた仁。

…良かった!通じた!!

「話し合いの折にすまんが、私達には旅がある。  
それ故、一人に決めてもらいたい。」

仁ナイス!!

心の中でガッツポーズ!!  
強い奴ら三連続はヤバいんだ

「くじで決めるのが良いだろう。すまぬが用意してもらえぬか？」  
「あ、はい。では…」

「月は座つてて。僕が取りに行くから」

「えー、そないな事せんでええやん」

「……………やりたい」

取り敢えず一人になるっぽい。  
流石仁!!  
頼れる!!

「持って来たわよ」

「すまん」

仁が受け取り、筆をとる。

墨がついてるのがアタリだろう。

そしてアタリを一本、二本、三本

「待て」

「何だ？文句でもあるのか？」

別に変な事は無いように聞き返す仁。

強心臓にも程がある。

「全部アタリじゃねえか！！」

「だからどうした」

「あの視線の意味分かってる！？」

小声でのやりとり

それで叫ぶという器用な事をやってのける。

「大体貴様はさつきから狼狽え過ぎだ。

堂々としろ。しないならこれで三連戦にする。」

「だって申し訳なさが…」

「労せず馬が手に入るのだ。

その程度気にする必要あるまい。」

「悪人だな！！お前！！」

こんな外道だったのかコイツ…！！

「なあ。くじに外れたら俺達の相手をしてくれないかい？」

「左様。仙刀殿がいずれであろうと、天下に名高き張文遠、呂奉先、華雄が相手に不足はござらん！！」

「ああ！！戦人としての血がたぎるってもんだあ！！」

結局三戦はするらしい。

まあ、軽い恩返しって事にしといて、罪悪感を減らそう。

「ふん。戦人どもが…」

「では鍛練所に案内しましょう」

…こいつらのどれかが相手。

一丁頑張るか

く涼州へく 嘘を吐いてはいけません(後書き)

再び戦闘パートへ

…どっしょよ

**V S 霞！！ この世界で生きるための覚悟**

くじの結果、仕合いは

一戦目 慶 V S 恋

二戦目 俺 V S 霞

三戦目 忠 V S 華雄

となった。

審判は仁

月、詠、音々音は観客だ。

「まさか人中の呂布が相手なんてな…」

「…有名なのか？」

「知らないのか！？あの呂布だぜ！？」

「全く知らん。強いと分かるだけ。」

「アンタもう少し世の中知った方がいいぜ。説明するから聞きな。」

呆れたのだろう。

それでも説明してくれるのは有り難い。

「呂布。恋は先の戦で黄巾賊三万を一騎で潰したんだ。」

ハア？三万！？

「嘘だろ…」

「事実だ。だから涼州の賊は少ないんだ。他の州なんて酷いもんだ」  
そう言っつて慶は他の州の噂も話してくれた。

今の世の中は政治腐敗が進み、荒れに荒れてる。

東では放火、略奪、殺人は日常茶飯事。

都も治安が悪く浮浪者、孤児が多く餓死する人間がいる始末。

…なのに国のトップは自分だけ考え私腹をこやしている。

酷い話だ。

こんな言葉でしか言えない自分の語彙力がイヤになる。

「そういえばだアンタに人を斬る覚悟はあるかい？」

唐突な質問。…殺せるかってことか？

「…無えよ。…慶お前はあるのか？」

当たり前だ。

俺は一般人。

…あるわけ無い

人を殺すなんてしたくない。

「あるさ。殺さないで殺される。

それが今の世だ。」

俺の質問に答える慶。

顔には普段の明るさは無い。

「俺も、忠も、仁も人を斬った。」

衝撃だった。

仲良くなったのが人殺し。

何も感じない方がおかしい。

「怖いとか、辛いとか無いのか？」

「そりゃあ、あるに決まってる。だけどよ……」

話を一旦きり呼吸音

「戦う力のある奴つてのは、力の無え民を守らないといけねえんだ。アンタには力がある。」

…まあ、殺す覚悟は後で決めな。

今はこの仕合いを楽しもうぜ」

話を変え、普段の笑顔になる慶

…気を遣ってくれたなんてこと言われなくても分かる。

…覚悟、守る…か

「一戦目！！慶対恋！！中央！！」

真名は俺達も教えた。

まあ、俺は外国人と教えただけだ。

…なんか偽名使わない気がしてきた。

…と、関係ない事考えている場合じゃない。

始まる。

慶の相手は、三万人に勝った奴だ。強いに決まってる。

この世界の女の強さ。

ゆっくり見物しよう

「恋どのー!!そんな奴、一撃でやってしまつのですー!!」

「始め!!」

仕合いは一瞬だった。

慶の払い上げの一撃を恋が受ける。  
そして、パワー勝負。

それで慶が負けた。

恋の腕は普通の娘と大して変わらないにも関わらずだ。  
信じられない。

そのあとの連撃にやられて負けた。  
パワー、スピード共に超一流。

…界皇様でもどうなるか分からない。

「仙刀殿。あれが呂布にごござる。」

「…すげえな」

「ああ、手に雷が落ちたみたいだ。痺れてやがる」

力の強さは

俺<慶だ。それは間違いない。

俺対恋でパワー勝負はどうなるかなんて考えたくない

「次!!仙刀対霞!!中央!!」

俺の番だ。集中!!  
コイツも強い女!!  
強い女と戦うのは初めてだ。

なんか、殴っちゃいけないって感じるけど…  
いや、実際マズイ  
顔なんて殴ったら焼き土下座モノの気がする。

なら、狙いは  
掌底でおっぱい…胸狙いじゃなくて投げで自然にバストタッチじゃなく横に回って袴のスキ間から覗きた…って何考えている!!  
うがアアアア!!

「…仙ちー、何してんねん」

「放っておけ…」

「せやけど…」

霞がどこからかハリセンを取り出す。

「いつまでやっとなねん!!」

「アダア!!」

スパーンと小気味いい音。  
取り敢えず目が覚めた  
つてなんか霞…

「なにそのハリセン!? 体の一部!?!」

「んなわけあるかい!？」

再び快音

「だってメツチャ似合ってる!!てか、それが本体!？」

「なんやバレてもうたんか…実は…て、なわけあるかい!!！」

「アブシ!!！」

ノリ突っ込み!？」

コイツは本物だ!!！」

「…アンタたち漫才でもやったら?」

「するワケないやろ!!！」

「そつだ!!お笑いの世界は厳しいんだ!!！」

「突っ込むところおかしいやろ!!！」

四発目。そろそろ痛い。

「ああ、もう。バカやっくらんで始めるで」

「え!?!ハリセン捨てるの!?!武器それじゃないの!?!」

「ドコの世界にハリセンで戦う奴がいるんや!!！」

どこかにいるさ

「…始めていいか？」

「ええよ。始めて」

「えー、もうちょいイジリたい」

「もうええわ！！」

「どうも、ありがとっ」ざいましたー…ノレよ

「なんや！？ウチが悪いん！？」

「締め挨拶はしないとダメだろ。」

「なんや正論なんが腹立つわ！！」

あー楽しかった。

「待てや！！何一人帰ろうととんねん！？」

「ネタが終わったら舞台から下がらねーとダメだろ」

「漫才しとらんわ！！」

「…アンタたちやっぱり向いてるわよ」

気が付いたら、月と詠が苦笑いしている。

ふざけすぎたな

「さて、一仕事やったし始めるか」

「やっとや…ホンマ長かったで…」

「本当にな。約束が今から三年前…。誰のせいだ」

「おまえや！！てか、そんな長くないわ！！」

ひとしきり突っ込み終わり額に手をあてる霞  
素晴らしい突っ込み要員だ。

「吉本に履歴書、勝手に送っておくか…」

「やめい！！何処か知らんけどやめいや！！」

突っ込みは条件反射。  
実に好い

でも…ふざけるのはもう終わり

「じゃっ始めるか」

呼吸を整える

「やっとやる気になったかい。」

霞も武器を構える。  
薙刀みたいな武器だ。

リーチは完全に負けてる。

「仙ちー。素手やけどええの？武器なら貸すで？」

「別にいい。俺は拳法家。武器はこの体！！」

「…ウチもなめられたもんやな…。」

そないなこと二度と言えへんようしたるわ」

「さっさとこいや！！！」

「なら…いくでっ！！！」

一撃ッ！！速い！！

強烈な突きッ！！

ギリギリで躲す

次はこつち！！

踏み込んで正拳ッッ

？居なッ？

「横やアアア！！！」

横から柄の打撃！！

チッ！

辛うじて左でとる！！

あれ？な…

「ゲガツ!!」

軌道変えやがったのか!!  
ぬかった!!

「まだいくで!!」

連撃ツ!!息のつかない連撃ツツ!!

チツ!!これは使う気無かったのに!!

氣で体を強化する!!

…だけど全身強化まで、できない。  
せいぜい一部分だ。

なら強くするのは!!

「す、すい…」

「霞の連撃をあそこまで弾くなんて…」

「……………せんちー、守り堅い」

「むむっ!!あのようにするのは…」

「前羽の構えに…」

「……前羽?」

「左様。仙刀殿が用いる武道の守りの型に…」  
その守りの堅きこと、語るにおよばん。」

「ああ。あれは思いだしたくねえな…。  
自分の突きが全部弾かれるんだ。  
自信無くすぜ」

強くしたのは『動体視力』  
これで守って、隙を作るしかない！！

「なんや、仙ちー見えとるやん！！  
なら、もっとはようするでっ！！」

まだ上があるのか！？  
防ぐしかねえ！！

ただ必死に耐える。  
さばききれず、何発も当たる。  
なんつー速さだ！！

「おまつ！速くなるなら  
『まさか人間相手にこれを取るなんてな…』  
とかいれるや！！」

「何無茶いうとんねん！！」

戦いでも突っ込みを忘れないその姿…  
目に焼き付けよう。

…サラシごと

「何考えとんねん！！」

上半身への袈裟切りか！！  
手を上にやる！！弾く！！

「下やアアア！！」

「マズツ！！」

ヤバい！！上だけに集中しすぎた！！  
フェイントに反応しきれない！！

「ツツア！！」

脛への強打。

畜生、見えねえ。

本当に速い。

こっちは汗が尋常じゃない  
なのに霞は余裕の表情。

…コイツ…！！

「ハツ…ハツ…」

「なんや、もうしまいかいな？」

「まさか…な」

服が重い。

かなり汗を吸っている。

…邪魔だ。

「な、何しとんねん…」

こっちに来てから履いてる袴。  
その裾に手を掛ける。

縫い代の軋む音。

…いける

服が裂ける音がする  
同時に体が軽くなる。

「さ、仕切り直しだ」

服を切り裂いて脱ぐ。

今は完全にトランクス一枚だ

「なっ!?!」

「へう…//」

「正気かいな!?!何考えとんねん!?!//」

「何だ?顔赤いぞ。このムツツリスケベ」

「うっさいわ!?!露出狂!?!」

「だからどうした!?!」

「開き直るなや!?!」

そう言って突っ込んでくる霞。  
まだ顔が赤い。

「どうせ弾いても隙が無いなら…避ける必要なし!!」

そう。半裸になったのには意味がある  
手を高く上げ、守らない。

「侠客立ち>おとこだちく!!」

…守り切れないなら、避けず、弾かずただ攻めれば勝てる!!」

少なくともさつきよりは!

「メチャクチャやな…」

「だろ？」

「うらぁ!!」

上からの突き!!

「ちいつ!!」

防がれる!!

「ウチもいくで!!」

再び連撃!!

避けない!! 当たり続ける!!

イタイツ!!

「ツツアア!!」

握力×体重×スピード＝

破壊力！！

「狙いマル分かりや！！」

防がれる！！でも関係無い！！

「アア！！」

そのまま振りぬく！！  
霞が浮く！！

「っ！！と。」

しかし上手く着地。  
ダメージ無しかよ…  
でも、

「ツハアアア！！」

追撃！！

絶対一発はやり返す！！

「なめんなやアアア！！」

横薙ぎ！！  
コレだ！！

「ツシヤアアツ!」

当たる瞬間に浮く!!

柄を軸に一回転ツツ!!

「つらあ!」

「なっ!」

側転の形での蹴り

それは吸い込まれるように決まった

「つな」

倒れる霞

それを見て俺の意識は旅立った。

「…ん?」

「あ、起きましたね」

「あんだ気が付くの早いわね」

「まあ打たれ強さぐらいしか、自慢すること無いからな」

なんか情けないな。この言葉…

「を？仙ちー起きたんやな」

「もう霞復活してたのかよ…」

この世界の人、復活早くない？  
ホ 三使えんの？

「ホンマ素手相手に負けるなんて思わんかったで…  
仙ちー強いで。かなり」

「ありがとう」

真っすぐに言ってくれる霞。  
顔が赤くなる

… あんま素直に言う奴いないからな

「なんや〜？顔真っ赤やで？  
何考えてん？このムツリ」

「なんでそうなの！？仕返し！？」

「仙ちーずっとウチの胸、見とったやん」

「ずっとじゃない！！」

「ならちよっとは見てたんやな」

「んな!？」

バレテル!？何で!？

「いやそんな…」

「ええよ。別に仙ちーなら気にせえへんよ」

はい？え？ちょっと待ってアタマが追い付かない。

「柄…亜の…干つ支………」

「何やってんねん」

悪戯つぱく笑う霞

…ハメラレタ!？

「お前ええ!!!一瞬甘い展開期待したじゃねえか!!!」

「何や？何期待したんや？

言うてみい？」

「何でそんな追撃すんの!？」

「何もないで。

ちよつち仕合いでのヤツやり返したろ  
なんて全然おもうとらんで」

「確信犯じゃねえか!!!」

「仙刀殿。起き申したか」

なんてやってたら忠が帰ってきた。  
アレ？

「あれ？忠、仕合いは？勝った？」

「うむ。危のうござった」

「なんや華雄。負けよつたんかい」

「うるさい！！次は負けん！！」

ま、これで全部の仕合いが終わった。

…同時に気になることもある。

「なあ霞、華雄。お前たち恋に勝ったことある？」

「ウチも華雄もないで。

…恋は別格や」

恋の強さだ。

俺は辛うじて霞と相討ち

そして恋はそのずっと上。

…目標ができた。

「皆さん。馬の用意ができました。」

月からの言葉でまた罪悪感が…

「こちらでも良馬を選ばさせて頂きました。  
どうぞお乗り下さい」

ニコツと笑つ月

頼む…俺を…見ないで…

「そろそろ出るぞ」

「はい！また近くにいらしたらぜひともお越しく下さい！！」

仁の出発の合図。

行くか

月達と別れまた旅へ

目的は東。

涼州から出ると賊に合う可能性が高い

『殺す覚悟』が必要になる。

そして…こんなに早く必要になるなんて思わなかった…

## 人殺し（前書き）

なんでもこうなった…  
早くふざけてる展開にしたい…

## 人殺し

SIDE 仙刀

「……………」

野宿。しかし、普段と違う

「仙刀。時間だ」

「…………慶。いやな予感がする。」

誰かいるような感じだ。  
というより…いる。

「武器つけときな」

「…虎かもしれないだろ」

「残念ながら賊だ…」

残酷な宣告。

俺だって普段と違うなんて分かってる  
…でも人じゃない可能性に縋りたかった。

「きましたな」

いつの間に来てた忠。  
仁も起きている。

「いくぞ」

慶、忠は槍を

仁は普段は鎖鎌だが今は剣を構える。

「おい！！相手は人間だぞ！！

…本当に殺す気か！？」

「しないなら死ぬぞ」

確かに殺らなきゃ殺られる。

そんなの分かってる。

「覚悟が無いなら下がれ。

…行くぞ」

茂みに三人とも入る。

間髪入れずに

人の肉が切れ、血が出る音が聞こえる。

…嘘だろ…

「おい。こつちにまだいやがるぜ…」

「！？」

がらの悪い男。

手には剣。

火の光を反射し不気味に光っている。

手に化猫。

あの武器はつけてある。  
武器同士で…いや、殺し合い自体初めてだ。  
手が震える。

「へッ…震えてやがる。」

アンタに恨みは無いが、殺して身ぐるみ剥ぐか…」

来る!!

怖い!!

「ヒイツ!!」

高い金属音。

本当に…!!

「っらぁ!!」

ッ!!

そのまま押され木に叩き付けられるッ  
殺されっ!!

「ウワアアア!!来るなアアア!!」

左手を突き出す。

…脅しのつもりだった。

鈍い音。赤い何かが刃に垂れる。

首の無い体。

…マサ…力…

「あ…ああああ…！」

倒れる賊

…殺した？俺が！？

「仙刀！何…が…」

「これは…」

戻ってきた。

でも…

「…童貞を捨てたか…」

初めて殺したんだ…人を

「辛いかな」

落ち着いた。一応は  
でも

殺した？誰が？俺が？

…震えが止まらない。

寒気が酷い。

火に当たってもダメだ

「貴様はいつまでも殺さないでいれる。  
などの夢物語でも考えていたのか」

仁の言葉。

キツイ

「人を殺したくないなら死ね。  
甘い理想などいつまでも掲げるな。  
…胸やけがする。」

……………

反論しない。  
できない

「殺す覚悟が無いか？」

「…当たり前だろ」

なんとか出た声。  
擦れている。

「私も慶も忠も常に貴様を守る余裕はない。  
見ただろ。恋に負ける慶を…  
強い者と戦えば貴様は邪魔になる。  
生きたいなら戦え。  
まだ覚悟が決まらないなら来い」

そう言って背中を向ける仁。  
付いていった先には

死体

「う…げえつ…」

「吐くな。見る

私たちが斬った賊だ

これを斬らねばこれ以上の地獄ができる」

仁に無理矢理顔を上げられる。

止める…止めてくれ！！

「仙刀。

賊を斬れば民が助かる。これを言い訳にし「ざけんな！！」…」

声を荒げる。

いくらなんでも…

「人だぞ！！人殺すんだぞ！！

言い訳ですむか！！」

「人だと思うな。奴らは獣だ。

そう思え」

「んなこと」「なら背負え」…」

ムリだろ…んなこと

「背負えるわけ」「背負える。」「…」

仁が肩を掴み真つすぐ話してくる。

目は逸らさない。

「重いなら私も背負う。  
貴様が割り切れるまでな……忠も慶もだ。」

「……………」

真つすくな目。  
本気で言ってる。

「だから、貴様は越える。  
それまで頼れ。」

そう言つて肩から手を外す。  
…ちよつと出来た気がする覚悟が。

「725!!726!!727!!」

結局寝れなかった。  
でも、それでいい。  
覚悟が鈍らない。

「仙刀。」

「ん？」

後ろには三人揃っている。  
話すか…

「…できたよ覚悟。  
腹くくった。」

「いいのかい？アンタが居た世界は知ってる。  
戦が無い国だつてのは  
辛くないかい？」

慶…ありがとう。心配してくれて  
でもよ…

「決めた。戦う。  
俺はお前たちの力になる。  
守って貰うだけではいたくない。  
だけど…頼っていいか？  
一人で人殺しを背負うのは辛いから。  
本当に腹くくれるまで。」

「…当たり前だ」「」

「ありがとう。本当にありがとう…!!」  
覚悟できた。

こいつらとなら大丈夫。  
守る理由もできた。

俺はこいつらに死んで欲しく無いんだ。

ダチには死んで貰いたく無いんだ。

だから…戦う。

満ち足りた月の夜に（前書き）

初の女オリキャラ

原作キャラがない…

## 満ち足りた月の夜に

SIDE???

「ハア……」

雛里と朱里が此処を卒業。

淋しくなったなあ……

で、暇そうにしてたら水鏡先生に頼まれて買い出し  
軽いからいいんだけど……

雛里も朱里も仕官か……

私も良い君主見つけないとダメかな？

「つきや……いったあ〜」

他の事考えていたら、つまづいた……

『ガサツ……!』

「ひゃあ!？」

後ろから物音。賊!？

逃げなきゃ……!!

「ツツ……!」

足に鋭い痛み

やだ……!!こんな所で……!!

だけど…そのあと来たのは…

「待てや今夜の晩飯イイイイ!!」

『ブヒイイイ!!』

猪を追う草塗れの何かだった。

SIDE 仙刀

あのあと荊州ってどこに来た。

…賊も斬った。

けどあの夜みたいにはもうならない。

一番怖いのは分かっているから…

時間が経つにつれて覚悟が固まってきたのが分かる。  
慶も良い面構えだと言ってくれた。

でも、やっぱり頼りは必要だ。

で、頼りっぱなしはやだから…

「止まりなさい!! その暴走猪!!」

食料調達。

コレをしている。

しかし…コイツ通り道狙っているな…!!

藪ばっか通りやがる!!

『ブヒイ!!』

「べブ!!」

なんか罾が…足を引っ掛けるロープが…

『プギヤー!! ( ^皿^ ) m9』

バカにしたような鳴き声。  
ちくせう。ムカツク

「……………猪の罾にかかる人なんているんですね…………」

「キサマ!! 見ているな!!」

「しつかりと」

マジか…見られてたなんて…ハズイ

「…誰?」

そっぴやコイツ誰だ?

てか、あいつらは?

「他のこと考えていて転んで怪我とか…バカだろ」

「あなたに言われたくないです。猪の餌にかかったくせに」

怪我してた娘を送ることになった。

そして、その送り先で迷子になったアイツら見つけるまで、待っていても良いことになった。

「まったく…迷子だなんて…」

「何才ですか？」

「うるせー。必死で現実から目を逸らしてたんだ。」

痛いところくなー!!

今は怪我した娘を背負ってその娘の私塾とやらに向かっている。

この娘の見た目は

白い肌にさらりとした黒髪。

長さは背中ぐらいまである。

顔も整っていて可愛い

より美人という表現が正しいだろう。

背負う時、胸を触ったら殴るとか言ってたが正直、気にするほど

「痛い痛い痛い!!髪掴むな!!」

「何か失礼な事、考えましたね…?」

「謝るからはなギヨあああ!!」

「考えていたんですね」

確かに柔らかいのはある!!

当たると嬉しいけどこれは割りに合わん!!

「ツツウ…。着いたぞ。」

なんとか痛みを耐えて家の前に着く。

…辛かった…

「すみません。中まで頼めますか？

足を怪我してるので…」

あ、そうだった

「そつえば名前何？」

言わんと門、開かないでしょ？」

着いたはいいけど門には鍵が掛かっている。

中から開けてもらうしかないな。

「そうですね。」

私は除扉と言います。」

「分かった。呼ぶわ

すいませーん!!誰かいますかー!!?

ジヨジヨって娘を連れてきましたー!!」

「除庶!!」

「空条 太郎ってやつですー!!」

「じょーしょー!!」

「ん。東 杖助ね」

「違アアう!!ああ、もう!!!!」

「お前なにみゃあああ!!」

「除庶だつて言つてんでしょ!!」

人の話を聞きなさい!!」

急に俺を引き倒し、蹴り付ける除庶。

∴足の怪我は!?

「おまつ!!」

ここまで連れてきたのに、これは無いんじゃないの!?!」

「貴方への礼なんか蹴で十分です!!」

そう言つてストンピングを続ける除庶  
だから足の怪我は!?

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!」

「ハヤッ!!何なの!?

お前スタンドでもいんの！？  
ちよっ！！そこはらめええええ！！」

こいつ…人間辞めてるだろ…

「…白雪>はくしえく？」

門から人の声  
助かった…

「すみません。遅れました、先生。」

「うっわ。ムリあるわー」

「五月蠅いから黙って」

身なりを整え頭を下げる除塵。  
今更、誤魔化した所で無駄だ。

「白雪…。驚きましたよ。」

「？何のことでしょう？」

まだ誤魔化せると思ってんのか？  
諦めなさい。

普通にあの人見て…

「あなたに加虐嗜好があつたなんて…」

「待ってください」

「待てや」

同時に突っ込む。

…驚くトコそつち!?

「まさか、野外でやるなんて思ってもいませんでした。」

「先生!!違います!!」

只の処刑です!!」

「え?処刑!?マジでやめて!!」

何なのこの二人…

話からしてあの人が先生らしいけど大丈夫か!?  
問題しか無い気がする!!

「自信を持ちなさい、白雪。  
貴女には才能があるわ」

「いりません!!そんな才能!!」

ここつて本当に塾?

「大丈夫よ。」

私はその才能を引き出してみせるわ」

「本当に止めて下さい。」

S Mの才能引き出す塾、って斬新にも程がある。

「すみません。話に入っていないですか？」

勇気を振り絞り話に入る。

なにあるか分かんないからめっさ怖い。

「すみません。」

旅の連れとはぐれてしまっ「探したぞ!!」にみゃあああ!!」

何!?

急に何なの!?

後ろを向くと居たのは仁。

驚かすなよ…

「貴様のせいで旅が進まん。」

このままだと今日は山中で野宿になる。

早く来い。」

「でしたら、私の塾で泊まりませんか？」

襟を掴まれ、連行される時に向こうからの提案。

ありがたい。

「仁。飲んで良い？」

「急ぎの旅の筈だな…

まあ、貴様が良いならそれで良い。

私は慶と忠を呼んでくる。

大人しく待つてる。」

そう言って消える仁。

あいつ、何？忍者？  
チャ　ラ使えんの？

「すいません。お世話になります。」

宿泊は決定。

久しぶり布団…

「ええ。歓迎いたします。

…フツ…若い子が…ジュルリ」

「お世話になりました」

帰る！！もう帰る！！

「遠慮する必要なんてありませんよ。

さあ、ごゆっくり。」

中に入れられ部屋を与えられる。

四人なら楽々入るな。

「そついえば除庶どこだ？」

いつの間に居ない。

話相手がいない暇から、俺は除庶を探しに行った。

「先輩。ここの記述なんですけど…」

「あ。これね。これは…」

教室らしき所で質問に答えていた。  
やたら似合っている

「ありがとうございます!!」

「別に良いよ。何回でも聞きに来て」

説明が終わったらしい。  
面倒見の良い奴なんだな

「おつかれー」

「…貴方ですか…」

急に雰囲気の変わる除庶。  
嫌われたかね？

「何やってたの？」

「説明です。分からない箇所があったらしいので」

「熱心だなー」

てか、何の勉強教えてんの、この塾？」

実はさっきからこの塾で教えている事が分からない。

「色々です。」

ここで勉強した事は仕官した後、軍師や文官として役立てます。」

話としてはここは水鏡女学院と言い

将来の官僚的な人の教育をする所らしい。

…女学院？

「じゃあ、俺いるのマズくない？」

「不味いですよ。」

みんな男の人が来たから騒ぎになってますね。  
授業終わったら質問攻めにありますよ。」

「マジかい…。」

その後、連れが来るまで質問攻めだった。

取り敢えずそこのロリッ娘。

下ネタの質問は止めなさい。

てか、水鏡さん。除庶。

お前らが止める。

で、忠が来たら皆一目散に逃げた。

凹むな、忠。

## SIDE 賊

「水鏡女学院なら飯、金がある。」

女は多いが戦える奴はいないってよ。」

「まじか…」

「頭。どうしやす？」

「今夜。今夜襲う。女は楽しんだ後に奴隷として売れ」

「「「「「へいつ！」「」「」」

SIDE除席

夜になつても勉強だ。

私も卒業が近い。

雖里、朱里は義勇軍に仕官できたらしい。

…私も決めないと…

…？

足音？こんな遅くに？

気になつて外に出る。

誰も居なつ…賊！？敷地内に！！

不味い。皆に知らせないと！！

逃げようとしたが音がして気付かれた！！

どうしよう…向こうは十人ぐらいいる。

…逃げ切れないよ…

伸びてくる汚い手。

だけどそれは急に払われた。

S I D E 仙刀

予感通り！！

嫌な予感で皆、目が覚めた。  
賊が来た感じがあった。

完全に的中！！

「女一人に十人がかりって…」

「ああ？何だオメーは？」

「客だよ。ただの」

「あっそ。さっさと消えろ。じゃねーと殺すぞ」

剣を構える賊共。

でも…

「ムリだよ。海皇舐めんな。」

「うるせえ！！やっちなまえ！！」

SIDE 除庶

綺麗だった。

賊の手を払い。

助けてくれたのは、あの失礼な人。

苦手意識があったけど、嫌いだったけど…あの人から目を離せない。

素手で賊を一撃で倒す。

月光に彩られ、まるで舞台みたいだ。

「ぎゃあ!！」

「はぁ、もう終わりか…」

除庶。無事か？」

満月を背負って手を差し伸べる姿は幻想的で…

見とれた私は何もおかしくないとおもっ。

翌朝。

私は布団で寝ていた。

あれは夢だったのかも…

それはない。

頭を振ってその考えを消す  
あれは、現実だ。  
敷地に人の倒れた跡があるから…

「もう、いくんですか…」

「ん。旅の途中だしな」

先生とあの人、南郷さんの姿。  
…もう、いっちゃうのか…

「お？除庶。お前も見送り？」

「いえ。」

偶然目が覚めただけです。ですが、ついでにしますよ。」

「ふーん。じゃ、行くわ連れが待ってるし。」

そう言っつて馬に乗る。

やっぱり行くんだ…

「お世話になりました。」

「じゃあな除庶。」

そう言っつて出ていく南郷さん。  
やっぱり最後はしっかりしないと

「ええ。また会いましょう」

頭を下げる。

しっかりと

頭をあげても、まだ手を振っていた。

あ、落馬……

「ふふっ面白い人。まだ手を振ってる。」

「本当に。」

何となくだけど

仕えるならあの人にしようかと思った。

……

「あー！！」

旅の行き先聞いてなかったー！！」

## 仁の秘密（前書き）

できました。

原作キャラがやっと増えてきた。

## 仁の秘密

SIDE 仙刀

俺達は女学院を出て北へ向かう。

もう、けっこう一刀の居場所が近いらしい。

詳しい場所は知らんが…

そして今は

「そういえば仁。」

どうやって女学院にいるって知った？」

どうやって、はぐれたのを見つけたのか。

これが気になる。

あと消えたのも。

「ああ。」

こいつなはぐれた事に気が付いて必死に走り回ったんだ。」

「慶!!！」

「左様。」

発見の報の際には、心底安心した顔にござった」

「貴様等!!！その口閉じろ!!！」

「そうだったのか

悪いな心配かけて」

「心配などしとらん!!！」

「何言つてんだ。」

真っ先に心配したのアンタだろうが」

「へー。そうだったんだ。」

よっ！！このオラニヤン！！」

言ったら苦無投げられた。

…意味知ってんの？

「貴様貴様貴様…！！」

あ、切れた。

「仁。ゴメンな落ち着いて。  
巴とやら見えてきたぞ。」

あの町が今日の所の宿泊所。  
取り敢えず仁を宥める。

「ふんつ。さつさと行くぞ。  
遅れるな。」

馬を走らせる仁。」

俺達も遅れないように走らせた。

「あずあッ！！」

「アンタ…さつさと馬に慣れな…」

兎に角、向かった。

「貴様ら!!! 賊か!!!」

で、早速アクティブに絡まれた。  
銀髪に長い三つ編みの娘だ。

「いや。俺達はただの…」

「問答無用!!! 聞く耳もたん!!!  
はああああ!!!」

「キケヨ!!!」

あいては素手か!?  
やった!!! 久しぶりの格闘だ!!!

「やつ!!!」

「おっ!?!」

ふむ。

勢いは良い!!! でも…

「我流?」

「答える必要は無い!!」

そう言つて突き!!

引くのが遅い!!

突いてきた腕をとり、  
投げるッッ

「くっ!!」

「はい。一本。」

きれいに一本背負いがかかる。

「なめるな!!」

蹴り?

いや、違う!!

「なっ!!」

気弾!?

撃てる奴、本当にいやがった!!

「呞い!! 待ちいな!!」

「その人達は賊じゃないの!!」

向こうから二人来た。

あーあ、面白くなりそうだったのに…

「風、よくみいや。」

この人達、黄色い布つけとらんで」

「何…」

本当だな…失礼しました。」

姿勢をただし、しっかり頭を下げてくる。

「このような時代だ。」

疑うのも無理はない。」

「なんでお前がまとめんの？」

「貴様が気にするな、など言ったところで何にもならんからな」

ひどいなこの扱い！！

「申しわけありませんでした。」

私は楽進と言います。」

「ウチは李典や」

「于禁なの？」

「ん。俺は南郷だ。」

「冷苞だ」

「雷銅ってんだ」

「張任にごぞる」

「いきなり襲い掛かって、すいませんでした。」

また、頭を下げる樂進。

礼儀正しい娘だな。

「そういえば、さつきも聞いたけど…」

その格闘、我流？」

「あ、はい。よく分かりましたね」

そっか…なら、

「格闘。教えようか？」

育ててみるか…！

あのあと、ここへの短期滞在が決まった。  
仁が情報を集めるってと。  
それまで、各自由に過ごすことが決定。  
だから…

「じゃ、まずは正拳からだな」

「はい！！お願いします！！」

「師匠！！」

格闘の授業。

師匠になるんだからってことで凧の真名を預かった。  
ま、俺も凧から氣を習うけど。

「しかし、このように習うなんて思いませんでした。  
仙刀殿は格闘にどれほど精通しているんですか？」

「ん。」

『海皇』名乗れるぐらいだな」

「カイオウ？」

「ん。俺の号だ。

まあ、弱くないから安心して。

はい、じゃあ正拳から」

「はいっ！！」

ちよつと教えたが筋が良い。

すぐに伸びる。見ていて楽しい。

「あ、さっきのだけど」

「はいっ！！何でしょうか」

やっぱり楽しいねえコイツの相手。

後で俺も凧から授業を受けてみたが、  
外気功は無理。

撃てない。

元 玉とか、かめ め波とか撃てるって期待したのに…

そしてその夜

「凧、きたでー」

「お邪魔なの〜」

凧の家で夕食会になった。

メニューは鍋だ。

因みに俺の連れはいない  
先に食っちまったってさ

「おー、ゆっくりしてけ」

「……………」

「…何で南郷はんが作つとるん？」

「凧ちゃん大丈夫なの〜？」

「ああ、修業でやりすぎただけ。

あと、料理スキだしな。」

「ホンマなにやったんや…」

「普通のこと  
で、疲れたからって休んでる。」

「普通のことって何や」

「虎とタイマン。  
氣は無しで」

「おかしいやろ!」

「あ、熊ともついでに」

「ついでじゃないの!」

「それで無傷。風強いね」

「ホンマかい!!  
ならなんで倒れとんや?」

ああ、それね  
それなら…

「その後、風は俺が奇襲かけたからだな。」

「普通やないで!!  
なんで修業に奇襲がはいるんや!!」

「やられる奴が悪いから」  
「…けっこつビドイの」

「仙刀殿。ありがとうございます。  
もう大丈夫です。手伝います。」

お、復活。元気みたいで何よりだ。

「そういえば、何作ってるんや？」

李典が聞いてくる

そついや、言っていないな

「やったら唐辛子多かったから麻婆豆腐と火鍋だ。」

「沙和あ！！風近付けたらあかんで！！」

「合点なの！！」

急に動く二人

何事！？

「何！？この献立だとマズイの！？」

「違うの！！風ちゃんに辛いもの任せちゃダメなの！！」

風…何があったの？

「どっしたん？」

「風は辛党なんや。

それも極度の」

「そうなの風？」

「別に普通ですよ？」

「なら、どんだけ使うつもりか見せてみいや」

ドサツとテーブルに置かれる袋。  
中身は唐辛子。それも粉、大量。  
見てるだけで辛くなる。

「…正気か？」

「はい。」

「お前これ多すぎだろ！？」  
常人なら、何年かかると思ってたの！？」

「師匠。それ一日分です。」

「よし！！于禁！！風を離すな！！」

「分かってるの！！」

あんな量食ったら一発でアウトだ！！  
俺たちは死にたくない！！

そのまま、凧を料理に参加させずに作る。  
料理は好評だった。

一刀が味にうっさかったから身についたスキルだ  
で、凧。

お前本当にあの量をかけるのか…

真名も教えてもらった。

李典は真桜。于禁は沙和だ。

まあ、当たり前の話だ。

俺達は死線を越えた同士だからな…！！

着いてから五日。

仁が二つの情報を手に帰ってきた。

？一刀は、公孫さんの所にいる。

で、？が…

「黄巾賊か…」

最近増えてきた黄巾賊が接近してる、というものだ。

「数は三千。大梁義勇軍は？」

「…約一千です」

淡々と報告する仁に対して凧は辛そうだ。

「戦力差は三倍以上ねえ…」

「苦しい戦になりましょう」

慶、忠もキツいらしい。

…俺も出ないと…

戦争になるなんてガキでも分かる。

殺すのは怖い。

でも、こいつらが死ぬのはもっと怖い。

「あと、朗報が一つ

陳留から、曹操の援軍が向かってきている。

残念ながら先鋒が着く頃には戦だな。

数は五百。ただし精鋭だ。

旗は夏侯と許。

許は知らんが夏侯は夏侯淵だ。」

「詳しいな」

「情報とはこのようなもの。  
当然の話だ」

「でも、スゲエ!!」

お前、メツチャ頼りになるじゃん!!」

「…ふん…」

一瞬、嬉しそうな顔して背ける。

本当にオラ「苦無が欲しいか?」

素早い反応。

お前、エスパー?

「とりあえず、私は賊の動向を探る。  
貴様等は守りを固めろ」

そう言つて消える仁。

だからエスパー？

「さて、俺達は守り固めんぜ。」

「左様にござるな」

心のなかで仁をこおり、エスパertypeに分類し、俺も二人についていつて守りを固めた。

「真桜？柵どう？」

「どうにもあかんわ。材料たりひん。」

一夜明け、ただ今柵の突貫工事中。  
やっぱキツいか…

手伝っていると沙和から伝言が来た。  
仁が帰ってきて、援軍が来たらしい。  
挨拶に行くか

「夏侯淵だ」

「許楮です」

いたのは青髪で鬼 朗かサ ジのように髪で片目を隠した娘と  
ピンク髪の元気っ娘  
援軍の将軍かね？

「凧。この二人が…」

「はい。援軍の方です。」

やっぱりこの二人か  
強そうだしな…

「仙刀才！！敵さん来たぜ！！」

慶からの呼び出し

…いよいよだな…

「仁は？」

「こつちだ。外にいる。

で、配置だが…」

援軍を交えて会議。

仁が配置をくんだらしい。

援軍も快諾よつて

東 慶、真桜

南 俺、凧

西 夏侯淵、許楮

北 忠、沙和

遊軍&諜報 仁

の配置が決定。

…戦争は初めてだ。  
でも、戦うんだ。

「曹軍本隊もこちらに向かっている。  
それまで耐えてくれ」

そう言つて頭を下げる夏侯淵。  
いっちょやるか!!

SIDE夏侯淵

軍議を終え、外に出ると  
見覚えあるあの方がいた。  
軍議中、幾度となく出てきた名前。  
そうかもしれない、という期待はあった。  
やっぱり、あの方は…

「仁…様…?」

「どうしたんです?秋蘭様?」

聞かれたか…?

季衣を誤魔化して戦場へ行く。  
季衣には悪いがこのことは黙ったままにしておく。  
確認するのは戦の後で良い。  
あの人なのだろうか…

SIDE 仙刀

「なあ、凧。お前氣弾で狙撃できる?」

こつちでも一応作戦を立てる。

この戦争で重要なのは、時間稼ぎだ。  
それを意識してやる。

「はい。師匠狙えます。」

「なら、ぶつ放して牽制しよう。時間稼ぎだ」

凧は俺の教えた空手をすぐに覚え、形にした。  
本当にこういう奴を天才って言うのかね?  
外氣功まで使える、なんてイヤになる。

「師匠。」

「ん。分かってる。

全員構え!!来たぞ!!」

賊がきやがった!!

戦争勃発だな…

「猛虎蹴撃!!」

開幕氣弾!!

これが開戦の合図になった。

「っはあ!!」

化猫での貫手

これと

「っふ!!」

合気道で育てた膝のバネ

これが俺の武器だ

剣術なんて無いから完全に我流

凧のことも言えないな…

「師匠!!大丈夫ですか!?!」

「当然!!こつちの台詞だ!!」

他の門から連絡来たか!?!」

「まだです!!」

連絡こないなら今のところ各自上手くやってるらしい。  
だけど、援軍もまだか!!

「危ねえ!!」

殺られそうになつてた一般兵を助ける。

目の前で助けられるなら助けるんだっ!!

「冷苞様より御報告!!」

これより8里先に砂埃!!

旗は曹!!援軍です!!」

「よし!!お前等あと少しだ!!必死で守れ!!」

この戦争勝つぞ！！

「仙刀！！終わりだ！！  
援軍が着いた！！」

仁からの報告。  
勝った…のか…？

「これで、終わりだ。  
旅に出る。二人にも言った。  
先に行くからな」

「待て！！なんでそんな急ぐ必要がある！！」

「…曹操は人材集めが趣味と聞いている。  
捕まったら面倒になる。」

先に行くぞ。と言って去る仁  
俺も行く。  
だけど、その前に…

「悪いな凧。  
まだ教え切ってないけど行くわ。」

凧に別れを告げないと

「イヤです!!」

まだ、教わって無いことが一杯あります!!」

服を掴まれる。

そんなことされて、言われたら別れたくなる。

「でも、基礎は全部教えた。

あとはそれを毎日百回やれば伸びる」

行かないと

「なら、私も師匠に着いていきます!!」

だから、もつと色々と教えてください!!」

「そんだけ言える覚悟があるんだ。

大丈夫。強くなれるよ」

あの仲が良い二人と別れる決心があるんだ。

大丈夫。いけるよ

「じゃあな。また会おう」

そう言って別れ、仁たちを追う。

「遅いぞ。

貴様が遅いから雨が降りそうだ。ウスノ口」

「わり、別れの挨拶してた。」

一言詫びる。そして、公孫って奴の所へ

雨も降ってきた。

仁。

今回で気になることが二つある。

何で、曹操との接触を拒んだのか…

そして、

雨で落ちた黒色の髪から、微かに見える金髪がなんなのか…

仁の秘密（後書き）

完全にフラグ

誤魔化す気は一切ありません

ついに合流南北コンビ!!

SIDE 一刀

公孫贇の所に着いて義勇軍を設立。

これで理想の一步を踏み出した。

…確かに賊は倒さなければならぬ、でもその戦いで死んだ兵士の家族は笑えるの？  
そんなことより、この戦だ

敵は黄巾賊。

数は四千

対してこちらは三千

義勇軍はそのうち七百

…厳しいな。

「申し上げます!!」

趙雲殿が単騎で突撃しました!!」

「何だと!!」

何を考えているんだ星は…」

「朱里ちゃん、雛里ちゃんどうしよう!?!」

「はわわ、それでしたら…」

最近、軍師として朱里、雛里が仕官した。

この二人が諸葛孔明とホウ統つてことには驚いた。

そんなことより、この戦だ。

策は

？愛紗が趙雲を助け一旦引く。  
？賊が追ってくるだろっから待ち伏せる  
？来たら矢を射ち、伏兵を出す  
やるしかない！！

策は順調に進み？へ  
これで…

「申しあげます！！  
賊の新手です！！数は五百！！」

「「「「「！？」「「「「「

マズイ…

愛紗、鈴々、趙雲は向こうにいる！！

「はわわ！！

もう余裕がありませんから、早く倒してもらおうよう伝令を…！！」

「申し上げます！！所属不明の部隊、三百が新手に突撃しました！  
！」

「「「「「！？」「「「「「

どういっことだ？

SIDE

仙刀ここに来るまでにくらかかった。

それも、クビになった兵士。

賊になりかけてた村人、

食うに困り、山賊になった奴等を旅の仲間にしたからだ。

数は三百。

短期間でこれ

…それだけこの国は終わってるってことだ。

目の前で死にかけ、

人の道を外しかけている、こいつらを助けたかったから助けた。

助けられるのなら、助けたいから…

そんな事をしつつ戦場へ。

早く、一刀の所へ行かないと。

「よし！！助けにいくぞ！！」

「待て仙刀。賊の新手だ。

あれを討つ」

「何言ってるんだ？

あっちだって戦っているだろ？

それに一刀も居るから合流した方がいいだろ」

「だが、向こうはあのままなら片が付く。

だが、新手が入ればわからん。」

「んー。確かにそうかもしんないけどさ…」

「俺は仁に賛成だ。」

「拙者もでござる」

慶、忠もか…

「貴様が向ここの遣いと友人だろつが、こちらは寡兵だ。手柄を立てねば会えん。

あの賊を止めたら手柄になる。」

「左様。さらに賊は我らに気付いてませぬ。

奇襲の型になり、被害も少のうございましょう」

「反論できないな…」

やっぱり戦争になると分からない。

こいつらがいて良かった。

「なら、一戦といくかあ…」

『うおおおお…！』

慶の号令で沸き上がる。

こつなると出番が無い。

「仙刀殿。惚けてる場合にございませぬ  
指揮を」

「必要か？ま、いいけど  
行くぞ…！お前等死ぬなよ…！」

俺の号令で突撃する…！！

絶対に負けない!!

「ヒャッハー!!」

「汚物は消毒だぁー!!」

「俺の名を言ってみろお!!」

何故だろうか。

おれ達の方が悪党の気がする…

「ハッハー!!」

「き、奇襲だぁー!!」

賊は混乱。

このまま押し切る!!

「死ねエエエ!!」

「戯言無用!!武で語れい!!」

「らあああ!!」

「…クズが」

忠、仁も上手く立ち回っている。  
当然俺も。

返り血ひとつ浴びてない。  
この武器はやっぱり優秀だ。

賊は混乱中、被害も無い。  
そこに…

「ほ、本隊がやられたあ！！  
新手が来るぞ！！」

「何だと！？  
逃げるぞ！！」

駄目押しの情報。  
賊は逃げ出している。

「追うな！！相手の方が多勢！！  
今は合流だ！！」

仁の指揮。  
流石に的確だ。

「仁、忠。これで手柄になるか？」

「十分にござる。」

「なら…慶！！」

「どうかしたかい！？」

「ちょっと一仕事頼んだ」

挨拶でもするか…

あと制服に着替えないと

SIDE 一刃

「勝った…のか？」

「はい。」

「危ない所がありましたか…」

朱里に聞いたたらなんとか勝ったらしい。

本当に危なかった。

「すいません…」

本来ならこのような場合も想定するべきでした…」

「大丈夫だよ、雛里。」

雛里が居なければ多分敗けてたよ…ん？」

向こうから人が来る。

あの部隊の人だろうか？

「アンタ等がこの軍の大將かい？」

「うん。そうだけど…」

「へえ…。なら、アンタが御遣いとやらかい？」

「まさ…」「なんで分かったんですか！？」桃香…」

隠してって言ったのに…」

「ハツハツハツ！！素直なお嬢さんだ！！」

ほら、笑われた。

「なるほどねえ…」

見てくれは良い。面構えはあの人以下つてとこだな。まだ、覚悟固まらないかい？」

顔を覗き込んでくる大男。

朱里、雛里顔が赤いけど何を考えている？

「俺等の頭がアンタに会いたがっている。お目通り願えるかい？」

一際大きくなる迫力。

…飲まないとマズイか…

「ご主人さま、どうする？」

「助けてもらったんだし、お礼もしないと会おう。」

「はい。私も賛成です。」

「あわわ、会わない方が不味いですね。

でも、念のため愛紗さんと鈴々さんを戻してからでしゅ」

二人とも賛成。

それなら問題ない。

てか、雛里。まだ赤いよ



「分かった！！一発殴ろう！！」

「だ、ダメでしゅ！！」

「そいでしゅよ、相手は助けに来てくれたんでしゅよ！！」

「「知ったこつちやない！！」」

「「知つてくだしやい！！」」

「大丈夫だ。まともな奴だ

まあ、虎殺しとか、人間凶器とか呼ばれてるぐらいだな。」

「「すいませんん！！どうか、無かったことに！！」」

「じゃあ、帰るぜ」

「「話を聞いてくだしやい！！」」

「「ふははははは！！」」

後で愛紗に説教された…

こんな程度で折れる俺だと思っな…！！

SIDE 仙刀

「おう、仙刀。面会できるってよ

「よし！」

この服着てる奴だったか？」

「おうよー!!」

「ヒャッハー!!」

「一刀だな!!」

間違いない!

で、お前等。ヒャッハーに共鳴すんな

心の中でモヒカンをたしなめる。

こっち完全に世紀末な人間や

不良マンガのキャラみたいな奴ばっかなんだよな…  
よく、賊として討伐されなかつたな…

「よっしゃ行くぞ!!」

「一刀貴様、ぶっ潰したるけんのお!!」

SIDE 一刀&仙刀&三人称

「はわわわわ（ガクガクガクガク）」

「あわわわわ（ブルブルブルブル）」

さつきから、軍師二人の様子がおかしい。

世紀末とか、拳王とか言ってた。

…何があつたの？

「ご主人様。来られたようです。」

愛紗からの報告。  
来たか…

「あれが義勇軍の大將にござるか」

「そつちが公孫贖だ。」

慶、忠、仁そして野郎共総出で会見。

居たな…

「ご主人さまが言ってた仙刀ってあの人？」

「確かに、同じ服を着ていますね」

仙刀…

もう、我慢できない！！

「あつ！！ご主人様何を！！」

「愛紗ちゃん。久しぶりの再会だから、見守ろう」

「…分かりました」

「おっ、来たねえ。」

「あいつが一刀で良かったかい？」

「ああ、慶。十分だ。」

「一刀が走ってこっちに来てる。  
俺も！！」

「仙刀オオオ！！」

「はわわ…感動の…」

「再会でしゅね…」

「一刀オオオ！！」

「全く。あの男は…」

「うむ。これで旅の区切りだねな」

「仙刀オ！！」

「やっと…やっとだ！！」

「一刀オ!!」

これでお前を…

「死ねやこのド腐れ野郎オオオ!!」

ぶっ殺せる!!

「えええええ!!?」

『いよっしゃあああ!!』

感動の再会は、ラリアットから始まった。

「一刀オ!!お前のせいでこんなところに来たじゃねえか!!  
塩食い過ぎて自殺しろオオオ!!」

「お前が鏡割ったからだよ!!  
頭破裂させて死ねえ!!」

「うるせえ!!人のこと道連れにしゃがって!!  
反省しろ!!」

罵倒のやりあい。  
さらに殴り合い。  
醜いにも程がある。

「悪いのお前だろうが!!  
てか、さっき!!」

お前等、よっしゃあとか叫んだのだゆこと!?

「あらかじめ殴ると言ったただけだ!!」

( (この糞野郎が!!) )

だが、この二人考えるのは全く同じ。

仲の良さについては賛否が…別れるか？

その傍ら、義勇軍陣営は…

「え？何！？どうなっているの!？」

愛紗ちゃん止めて!!」

「分かりました!!」

貴様ああ!!ご主人様に何を…!!」

「待つて!!武器置いて!!」

「ご安心を!!」

まとめて叩き斬りますから!!」

「ダメだよ!!」

鈴々ちゃん!!お願い!!」

「お兄ちゃん頑張るのだ!!」

「ダメでしゅ!!完全に楽しんでましゅ!!」

「白蓮ちゃん!!趙雲さんお願い!!」

「桃香：あれをどうしろと…」

「ふむ。アレを肴に酒も乙なものですな」

「何とかしてええええ!!」

桃香が苦悩していた。

で、一方仙刀御一行は

「よおし!!右だ!!狙え!!」

「下がスキだらけにござる!!」

「顎だ!!やれ!!」

「ぶっコロせえ!!」

お楽しみムードだ。

「すみません!!あの喧嘩止めてください!!」

そこに入る桃香。

ある意味勇者だ。

「止める必要なんかないさ

二人ともあんなに楽しそうだ。」

「すみません!!」

ご主人さまが一方的に殴られているんです!!」

気が付いたら一刀はマウントポジションを取られ、フルぼっこナウ。

「ふん。安心しろ。仙刀とて鬼ではない。加減してる」

「あの人の拳、真っ赤だよ!？」

気が付いたら仙刀の手は綺麗な深紅。へモグロビンが付着しているのだろう

「安心なされよ。殺しはいたさん」

「じゃあ、あれは!？」

そこにはバックドロップを決める仙刀。一刀の完全敗北の瞬間だ。

まあ、こんな形で再会した。

ついに合流南北コンビー！！（後書き）

やっと合流。

これから悪ふざけが加速します。

L e t · s 顔合わせ (前書き)

早速奴らが悪ふざけを始めました…

Let's 顔合わせ

SIDE 仙刀

「あー、すつきりした」

久しぶりに気持ち良く殴った。

やっぱり、一刀以上のサンドバックは中々いない。

「仙刀…貴様あ…」

あ、復活。

「まあ、いいじゃん。

怒んなよ。いつものことだ」

「いつもあつてたまるか」

「あの…ご主人さま…大丈夫…なの？」

話に入ってくるピンク髪。

あれ？

「一刀。コイツ誰？」

「ああ。紹介しとく。

義勇軍の仲間でごつちから…」

「えっと…劉備です。」

「関羽と言います。」

「鈴々は張飛なのだ!!」

「ああ。俺は南郷仙刀

一刀が世話になったな。」

まともに挨拶はする。

やっぱ初対面はしつかりとね

「…意外ですね」

「なにがだ。」

「ご主人様から話を聞く限り外道や鬼畜だと思っていましたから…」

「愛紗。再会直後に殴りかかる人間はマトモかい？」

「いや!そういうわけでは…」

「刀もこっちで楽しくやってたらしい。」

「安心だ。」

「で、そっちの子供は？」

「こ、子供じゃありません!!」

「そうでし!!百歩譲って大人な子供です!!」

「結局子供だな。」

「いや、仙刀。こいつらただの子供じゃないから。頭メチャクチャ良いから。」

「そうか…一刀は、ついに子供に学力で敗けたのか…」  
可愛そうに…

「いや、違うから。」

「強がらなくていいよ。俺は分かっているから」

「分かってねーだろ」

華麗にスルー

一刀より、こいつらにも挨拶しとかないと

「よろしくな」

「は、はい!!…諸葛亮孔明でしゅ!!…」

「ほ、ホウ統土元でしゅ!!…」

「……………」

「あれ？仙刀…何が…」

今、こいつ『こづめい』と言ったか？

「…そうか、お前が、こづめい…ね」

「は、はい」

震えながら返事するこづめい  
そんなことよりだ…

「お前のせいで俺の百人マ 才がああ…！」

こいつは リオの仇だ…！

「はわわ…！？」

「仙刀…！何で暴れんの…！」

「うっさい…！」

こいつの罠で何人マリ が死んだと思ってやがる…！」

「そんなことしてましえん…！」

「別人だから…！別人…！」

「こいつを殺してマ オと踏み台のヨツ ーに詫びるんだ…！  
無くなった命は戻らないんだ…！」

「何回も蘇っているから…！あのおっさん…！」

一刀が止めるが知ったことじゃない…！

あの隠しブロックにバカみたいにやられたんだ…！

「落ち着け仙刀」

「あ た っ」

仁のチョップ

地味に痛い

「貴様がその様子では話が進まん。

こちらも自己紹介し、今後を話すべきだ。」

圧倒的正論

ちっ、あと一歩で…

「まあ、それもそうだな。

こいつらは…」

「雷銅ってんだ」

「張任にござる」

「冷苞だ」

こつちからも自己紹介。

したら、一刀がかなり驚いた顔をしてた。

「…お前どこにいた？」

「えーと、四川だな」

「お前等、頑張ったな…」

「だろ？もつと誉める」

久しぶりの軽いやりとり  
一旦止めて陣に向かった。

「さて、まず何から話すべきなんだろうな」

「はい。お互いに何をしてきたかですね」

質問に答える孔明

俺はまだ諦めてないからな…！！

「ん、なら俺は四川に半年前に落ちて、そこから修業。  
そのあとあの三人に会ってこっちに来た」

「それだけ？てか、修業って…」

「うん。結果、巧夫もある程度いけるようになった」

「レベルアップしてやがる…」

頭を抱える一刀。

別に、お前のボコリ方のバリエーションが増えたただけなのに…

「で、一刀お前は？」

「こっちに来たのは最近。」

こっちの三人と会って、三国志だと知った。  
そんな感じだな」

そう話す一刀。  
て、事は…

「じゃあ、何。

お前この美少女や幼女に囲まれて生きてきたってこと？」

「うーん、そうなるな…」

そうか…ならよ…!!

「お前ざけんなあああ!!」

「ひゃうっ!!」

「て、事はお前は

『ドキッ!!美少女だらけの三国志』かあああ!!?  
こっちはなあ

『ウホッ!!いい男だらけの三国志』だぞ!!  
ふざけんなああ!!」

「それ普通の三国志!!」

ロリ二人がびびっているが関係無い!!

こいつは殺す!!  
嫉妬なんてないよ!!

「落ち着け」

「へぶっ！」

仁のパンチ  
本当に痛い

「一刀とやら話を進めろ」

「あ、うん。」

で、そこから資金不足で義勇軍を作れなかったから、

桃香：劉備のツテで公孫賛頼って義勇軍をつて感じだな。」

「誰？」

「その人」

「オケ、地味ん党な人ね」

「地味って言うなあああ！！！」

「白蓮ちゃん。大丈夫！！  
普通じゃなかったよ！！！」

「伯桂殿、進化ですぞ！！！」

「星、桃香：全く慰めになってないから……」

あれが公孫ね  
なんでみんな、さん付けしてんだ？

「で、資金不足はどうした？」

とりあえず気になるときを聞いておく  
もしかしたら何とかなるかも

「はわわ…まだキツイでしゅ」

復活したロリ

やっぱまだ必要か…

「なら、一刀。」

オレらの物で要らないやつ売るか」

「うん。俺も考えていた」

意見一致

売れるの探すか…

「カバンの中にあるのは…」

一刀の物

教科書（世界史、国語、英語、数学、日本史、政経倫理） ノート

筆箱 ジャージ 携帯電話 財布 電子辞書

「まあ、ボールペンや使っていないノートあたりかな。  
仙刀のは？」

「俺のは…」

仙刀の物

教科書（物理、化学、数学、英語、地理、大人の保健体育二冊）  
ルーズリーフ 筆箱 ジャージ 携帯電話 MP3プレイヤー P  
SP DS ソーラー充電器 THE ナース白濁の天使 萌え萌え  
猫耳メイドちゃん 人妻ダイナミックファンタジア

「俺のエロ本がああああ！！」

てか、最後の誰のだあああ！！」

「じゃあ、この五冊は軍師のふたりに…」

「渡すなあああ！！」

「はわわわわ／＼／＼」

「あわわわわ／＼／＼」

「読まないでえ！！それは俺と誰かの最高秘密だから！！」

まったくくつるさい…

「何だよ。」

金になるだろそれなら」

「黙れ！！どこから取り出した！！」

「お前の部屋、寮訪問になる前に掃除してその時見つけた。  
今更ベッドの下とか…」

どうせなら、正しい手順で開けないと燃える引き出しとか作れ」

「あさったってことかい…！！」

「ああ。机の上に置くのも可哀そうだから、  
教室に置くか、古本屋に売るか迷ううちにな…すっかり忘れてた」

「お前の可哀そうって何!？」

てか、朱里、雛里読むの止めてえ!!

桃香も見ないで!!」

そうやって取り上げる一刀

チツ秘密の暴露を楽しんでたのに…

「てか、これ!!人妻って誰の!？」

「及川」

「よし!!売ろう!!」

切り替え早いな

結局売るのは

ボールペン ルーズリーフ数枚 人妻ダイナミックファンタジア  
になった。

「さて、次にこれからの事だな」

「うん。…それなんだけどさ仙刀」

「何だ?」

「桃香の理想を聞いてやって欲しい」

…面倒になりそうだ…

L e t · s 顔合わせ (後書き)

次回またシリーズ？

## 甘い理想（前書き）

気が付いたらほとんど男しか出てない…

## 甘い理想

SIDE 一刀

仙刀に一度、桃香の理想を聞いて欲しかった

「で、何なのお前の理想って」

「今、世の中は乱れ力の無い民が苦しんでいます」

「そんなの間違っているのだ!!」

「しかし、国の上層部は皆、自分の私腹を肥やすことだけ考えています。」

「ですから、そんな国を変えたいのです。」

「私は、みんなが笑って暮らせる世の中を作りたいんです。」

「アホか」

…そうなるよな

「一刀。何でこんな話を聞かせたん？」

俺はさっさと元の世界に帰りたいんだけど」

「理由は

桃香に甘い理想だつて分からせるためだ…」

「ご主人様!!何を…!!?」

「……………」

そう、これは分かって欲しい。  
この二つは

「皆が…」

「一刀。いい。」

俺が言う」

仙刀が遮る。

やっぱり言いづらいつて分かって…

「皆が笑って暮らせる世界ってんなら、戦わねえ方が良いだろ」

「でも、相手は賊です!!」

あの人達は弱い人から物、お金、命を奪っています!!  
だから戦います」

「んなこと言っただってよ

そうしないと生きていけない奴、一杯いんぜ?

現に、俺に付いてきた奴らはそうでもしないと生きていけないよ  
うな状況だった。

…運良くやらかす前だったけどな

皆ってんなら、そいつらどうなの?

ダチ、家族のため、仕方なくって奴らは」

「…でも、賊は…」

「黙れ劉備」

この中で口を開いたのは冷苞だった。

「仙刀。貴様の言いたい事は全て私が言う」

「いや、俺が聞いてた事だ。

俺がやる。」

「だが、貴様はこの世についての知識が足りん  
まともは私がする方が理論的になる」

「…分かった。すまん、仁」

下がる仙刀

…ごめん

嫌な役させて…

「なら、貴様が言うとおりに賊を悪とみなす。  
だが、その戦で死ぬ兵はどうだ？  
その家族、友人は笑えるか？」

「…それは…」

「皆などと口にするが現実を見る  
戦が笑顔にするのは権力者だけだ。  
賊退治なら笑う奴もいる。」

しかし、それ以外では泣く。

貴様はその現実を見ているか？

戦で兵に死ねと命じている現実を」

「……………」

桃香は何も答えない。

いや、答えられない。

…今まで信じてきた理想を真っ向から否定されたんだ。  
ムリはない

「……………」

皆、黙っている

反論できないから

「仙刀。私は野営の準備をする。  
何かあったら呼べ」

「あ…ああ、今夜は戦勝祝いの宴になる。  
夜まで休んでいな」

公孫贇も気を遣ったのだろう。  
休みを薦める

「一刀。まだ話したい事あるし、場所移すか。」

「ああ。」

そして、俺達は場所を変えた。

SIDE 仙刀

正直、あいつは危ないと思った。  
脆さの点でだ

「ごめんな、仙刀。嫌な役させて」

謝る一刀。

まあ、事実嫌われたらろうしな…

「あとで仁…冷苞にも謝つとけ。  
でだ、他に話あんだろ？」

昔からの付き合いだ  
考えなんて大体分かる

「ああ。」

俺はすぐに帰るんじゃない  
桃香の夢を支えたい」

「…正気か？」

「…ああ…」

だけど、コレはあまりに予想外だ。

「あいつ、自分の夢の矛盾に気が付いてないぜ  
…付いていくのはヤバいだろ」

これが素直な印象だ。

…一刀もマズイことになるかもしれない

「うん。だから支えたいんだ。」

もし、仙刀が来なければ、こんな話できなかった。

…でも、しなかったら桃香はいつか理想と現実の間で苦しむ。人一倍優しいからさ、桃香は。

…そんな苦しみ味わさせたくないんだ。

本気で皆が笑って暮らせる世を作ろうとしているんだ。

だから、力になれないかもしれないけど支えたいんだよ。」

…本気なんだな

「はあ…、なら止めない」

「仙刀はどうするんだ？」

そうだな…

「帰る方法でも探す。」

見つけたらお前と一緒に帰ろうか、と思っていたけどさ…。」

完全に頓挫したな…

「なら、仙刀も手伝ってくれないか？」

「はあ？」

突然の誘い

…意味が分からない

「やだよ。付いていくのヤバいって言ったじゃん」

「頼む!!」

俺一人じゃ無理だから、仙刀の力が必要なんだ!!  
無茶言ってるのは分かるけど、協力してくれ!!」

そう言っつて土下座する一刀。

…そこまでの覚悟か…

今まで互いに意地はったり、けなし合つてた分  
頼み込む、土下座するなんて見たことない。

「…取り敢えず、これからは後で考える。

お前はあの娘達と今後を話しな」

そう言っつて一刀を送る。

…俺も決めないと…

SIDE 一刀

夜になり、宴会になった。

だけど桃香達や仙刀の姿がない。

仲良くなった人に聞こうと思つたけど…

「…そいつは…」

「…アイツなら…」

「……………」

皆、戦で死んでいた。

辛くなつて一人でいれる場所を探してた。

とにかく、ゆっくり考えたかつたんだ

「ん？」

そんな場所を探していたら仙刀を見つけた。

… 普段のような雰囲気ではない。  
震えている

「仙刀…？」

話かけたら一瞬ビクンと動いた。

………

「仙刀どうした？」

「… お前には関係無い」

擦れた声。

………

「仙刀。話せよ。辛いならさ。」

「… 辛くなんか無い」

「その嘘、通ると思ってんの？」

昔からの仲だ。

嘘なんて大体分かる。

「… 辛いんだ…」

仙刀も分かっているんだ。  
だから、話してくれた

「俺は仲間死んで欲しくない。

…だから、人を殺した。

怖いんだよ。

仲間が死ぬのも、人殺すのも…

でも、怖いからって選ぶから、結局ダメなんだよ!!

いつまでも人殺す覚悟なんてできない!!

あいつらは。乗り越える、重いなら背負う。って言ってるからこれ

以上重荷になるような弱音なんて言いたくない!!

だから、まだ…怖いし、罪悪感があるんだ!!

簡単に割り切れないんだよ…」

そう言って泣く仙刀。

まるで言葉の弾丸だ。

おもい。あまりにおもい

「仙刀。」

肩に手を置く

震えが伝わってくる。

…本当に怖いんだな

「お前が何人殺そうが変わらない。

俺はお前の味方だ。

お前は俺の親友だ。」

顔をあげる仙刀。

目が真っ赤だ

「俺は背負えないかもしれない。  
その分変わらない。」

お前がどれだけ殺そうが、恨まれようが親友だから」

「一刀オ……」

本当に怖かった……

お前からの目が変わるんじゃないかって……」

「……………」

普段、絶対に聞くことの無い本音。  
ただ、黙って聞く。

「……もう、迷わない。」

お前が味方なら、親友なら俺もそうする。」

落ち着いた顔。

恐怖は感じられない。

決まったんだな……

「……お前は、あの娘の夢を支えるんだっけ？」

「……うん。」

そう。

俺達は話し合って決めた。

愛紗、鈴々、朱里、雛里は皆、桃香の理想のために力をかす。

……桃香も少し顔つきが変わった。

だから、大丈夫。

「俺はあいつの理想なんてどうでもいい。  
だけど、お前は別だ。  
俺は一刀を助ける。  
お前と一緒に行く」

「…ありがとう…」

仙刀がいる。

大丈夫だ。何でもできる。  
そんな気がした。

SIDE仙刀

もう、決めた。  
全部決まった。  
覚悟、決意、意志。  
全部だ

「で、お前は何でこっちに来た？」

こんな陰は、ただの散歩で来る場所じゃない。  
一人でいたいと思わない限り。

「戦で仲良くなった奴、皆死んでた…  
冷苞が言った通りに家族や友人はどう思うのか、って考えたらここ  
に来てた」

…そうだよな。

戦争だ。人は死ぬ。

当たり前の話だ。  
でも、割り切れないよな…  
難しい話だ…

「俺には答えられねえよ…  
賊がやることで酷いことになる。  
だから止めるなんてどこも間違っていない  
だから、難しいな…」

「そうだな…やっぱり難しいよな…」

そうして、俺達は宴会に戻った。

翌朝

俺は一刀に呼ばれて、あの娘達と会っていた

「あの後、皆と話し合いました。」

「ああ。一刀から聞いた。

で、お前の結論はどうなの？」

「…私は理想を諦め切れない!!  
甘い話です。」

「ただ、叶えたいんです!!  
確かに兵の皆さんには死ねと言っています。  
でも、戦わないといけないんです!!  
そうしないと、もつと酷くなるから…!!  
だから、戦います。」

「平和にしないと絶対に笑えないから…!!」

少しは変わったか…

「だから、平和にするために力を貸して下さい…！  
お願いします…！」

そう言つて頭を下げる劉備。  
答えなんて決まっている

「俺はお前の理想はどつでもいい」

「……………」

「貴様あ…！何ということ…！！」

「愛紗…！止めて…！」

一刀が黒髪を止める。  
ありがとうな

「だけど、俺は一刀がお前の夢を助けるって言ってんだ  
…十分だよ。俺が動く理由なら  
俺は一刀を支える。  
味方の味方だな。」

「…ありがとうございます…！」

また、頭を下げる劉備

その後、一刀の連れから真名をもらった。  
仲間に預けるのは当然だつてさ。

…あとは

あいつらに話さないと…

「慶、忠、仁。」

「「「……………」」」

「決めた。全部

もう、大丈夫。乗り越える

そして…俺は一刀の味方をする。

俺が勝手に決めた話だから、お前等が来る理由は無い。  
今までありがとう」

心の底からそう思う。

こいつらがいたから、ここまで来れた。

感謝しきれない

「…いい顔になったな。

覚悟が決まった男の顔だ」

「左様。武士の顔にごさる」

「ふん。多少は見ていれるな」

そうか…

なら、大丈夫だ。

俺はへこまない

「仙刀。実は俺達賭けをしてたんだ。

アンタがこれから何やるか

当たつたら自由にやる。  
外れたらアンタに力貸すつてな。  
何に賭けたか見るかい？」

「…ああ」

「ならば、我らの右手を見よ  
それが答えにござる」

右手を見ると『協』の字

「あいつらに協力するってことね…」

…正解。その通りだ。

今まで本当にありがとう！！」

ここまで世話になった。

まだ、居て欲しいけど止める権利なんて無い

「…はあ、また早とちりか

ま、自由にやるさ

俺はアンタに仕える」

…慶…

「左様。一度決めた道。  
今更違えぬ」

…忠…

「私はあの女が嫌いだ。

…あのような甘い考え、反吐が出る  
噴飯ものだ

だが、貴様に力を貸すのはやぶさかではない。」

…仁…

「あいつらは？」

「皆、アンタについて行くつてよ。  
慕われてるねえ」

「…バカだろ。」

これ、俺の我儘だぜ？」

「愚問。我らが選びし道に」づる」

「…いいのか？」

「くどいぞ。さっさと決めろ。  
良いのか悪いのか」

本当にありがたい。

「ありがたい！！」

俺に力貸してくれ！！」

「……………おおおおお！…！！」「……………」

…ありがとう

本当にありがとう

「仙刀、良かったな。」

いつの間になっていた一刀。

…良かったよ。最高だ

「一刀、俺はお前を助ける」

「仙刀、俺は桃香を支える」

「一丁」

「頑張るか」

「「南北コンビの三国志開幕だな!!」」

甘い理想（後書き）

これで一区切り

…長かった…

VS 愛紗 界皇伝説〜ガチで軍事衛星で見張れ〜 (前書き)

界皇II 郭海 プラス範馬勇次 ÷ 2

VS 愛紗 界皇伝説〜ガチで軍事衛星で見張れ〜

SIDE 仙刀

一つ気になる事がある。

「なあ、一刀。お前何で桃香達にご主人さま なんて呼ばせてんの？」

「 を付けるな。

キモい」

「それは、ご主人様が御遣い様であらせerからです。」

説明してくれる愛紗。  
なるほどね  
でも、

「俺はいらんよ。

一刀みたく幼女にまでそう呼ばせる趣味無いから」

「おい！！俺を何だと思っている！！！」

「ロリコンORペド

パソコンのファイルの中、ロリ画像ばっかじゃん」

「変な事言つなあああ！！！」

「うるせえな…」

仲間が五人中三人が子供、幼女だぜ？

まあ、お前の趣味なら仕方無い  
応援するよ」

「何をだあああ!!」

「ロリハーレム作ること」

「やらねえよ!!」

「ろり?」

桃香が疑問を持つてるっばい。  
チャンス!!

「子供のことだな。一刀は子供好きだ。  
性的に」

「そうだったの!？」

「違うから!!」

おい、待てや!!

「事実を否定するな!!」

あと、一刀は

『もし、児ポ法が無い世界に行ったら少女を…ゲへへへへ』  
とか言つて…」

「ネエよ!!」

「ホント…？ご主人さま…」

「嘘だから！！」

「桃香：ゴメンな

本当はそこで（息の根を）止めるべきだったのに…」

「おい。なんか変なの入ったな。」

へ？何のこと？

俺はシラナイヨ

「そう…なん…だ」

「違うから！！」

桃香頼むから話聞いて！！」

「あと、そんなこと幼女にしたら捕まるな」

「！！大丈夫。」

私はご主人さまが更正して戻ってくるって信じてるから！！」

「話を聞いてええええ！！」

全くウザいな

「仙刀！！今すぐに取り消せ！！」

「寄るな！！離れる！！」

この変態！！

「うるさい！！取り消すまで離れない！！」

取り憑かれた！！

畜生！！

ンビーより悪質だ！！

「はわわ、ご主人さまと仙刀さんってやっぱり…／＼／」

「あわわわわ／＼／」

「お前等何考えてんの！？」

いや、言わなくていいけど！！！！」

隣から恐ろしい妄想が来た気がした。

こいつら…この年で腐って…

「「違いましゅ！！」」

「「え？心読めんの？てか、読むな」」

何この2人。第三の目でもあんの？

「二人とも仲良いんだね」

「「良くなーよ！！」」

桃香からの一言

マジで腹立つ。止めて

「息ピッタリなのだ！！」

「あつてねーよ!!」

「十分ですよ」

ぐううう…

何でハモる…!!

拳を作り、一刀を殴る準備をしたら…

「仙刀さん。」

「一つ聞きたいことがあるのですが」

「ん。何？愛紗」

急に質問

…何かあるか？

「慶さんから、素手がお強く虎を殺したと聞きましたが…  
本当ですか？」

「あ、それね。マジ」

「お前、何でそんな化け物になった!!  
道理で最初の殴り合いが痛かったわけだよ!!」

「ああ。仕留める気だったしな。」

「この野郎…!!腫れた所が治らないわけだ…!!」

畜生が…



「ふむ。虎殺しとは大層な名ですな」

「だろ？しかも、骨を折ったんだ。強いぜえあの人は」

「はわわ、頑張って下しやい！」

「愛紗やっちゃうのだ！」

「あわわ、仙刀さんも応援しましゅー！」

「頭の喧嘩だー！！」

「やれえ！！南郷さん！！」

「死ねえ！！仙刀！！」

「ふん。今回は見物だな」

「黒髪の山賊狩り、いかほどにござるんか」

「おい誰だ死ねっつったやつー！！  
てか、一刀だろー！！」

あいつは殺す。

でも、その前にこの仕合いだ。

「武器はいいのですか？」

「ああ、化猫は加減効かないから。」

間合いがアレだしな。」

「しかし…素手というのは…」

「俺は素手が最高だから。

一番鍛えてあるし。

手加減の武器あり

本気の武器なし

…どっちかなら本気でしょ？」

「しかし…」

「いいの。始めるか」

あー、クドイ！！

さっさとやるか！！

「仙刀ー！！愛紗かなり強いからー！！  
怪我してねー！！」

「怪我すんなよだろ！？普通！！」

「無理なら死んでー！！」

「ざけんなああー！！」

「一刀は絶対に殺す…！！」

「始めッ…！！」

さ、開始だな

「はああああ!!」

いきなり突き!!

早い!!

「っち!!」

横に躲して、蹴りッ!!

「やッッッ!!」

防がれる!!

反応早い!!

「ならッ!!」

柄を掴む!!

投げっ…られな!?

「ハアッ!!」

「よっ!!」

蹴り返される!!

大丈夫!! 反応できる!!

「っつと」

間合いをとる。

うーん、どうやって守りを崩すか…  
懐に入るしかないか…

S I D E 一 刀

「…凄いね…ご主人さま」

「うん。かなり速い…」

愛紗の突き、仙刀の蹴り。

両方ともかなりの鋭さだ。

しかし、一番の注目点は仙刀が武器を掴んだ時だ。

一瞬、膝にタメを作った。

投げ技のために

愛紗はそれに一瞬で気付き重心を戻した。

そして、蹴返し。

かなりハイレベルだ。

…強いな仙刀は

「行つた!!」

次は仙刀からだ

正拳!!手刀!!

しかし、よける!!

「愛紗!!距離とつて!!  
中に入れさせないで!!」

「分かってます!!」

適度な距離。

上手く届かない!!

「チツ!!こうなりやよ!!」

仙刀もやり方を変えた。

武器狙いの戦法。

手が狙いか!!

「なめるなあああ!!」

「つらあ!!」

袈裟斬りツ!!

そこに合わせアツパー!!

違う!!フェイントだ!!

柄がツツ!!

「ツツ!!」

「…決まり…かな」

「愛紗の勝ちなのだ!!」

「しかし、南郷の拳…鋭いですな…」

何か引つ掛かる。

あの構え…!!

手の甲を見せ、内股気味の構えは…！！

「愛紗！！離れる！！三戦だ！！」

「ツな！！」

遅かった！！

袖とネクタイを取られた！！

「この程度で終わるか！！  
海皇なめんなああ！！」

「きゃあああ！！」

捨て身！？あれは…

「巴投げえええ！！」

柔道の大技だ！！

「きゃん！！」

強かに地面に着く愛紗  
しっかり受け身はとれた  
しかし…

「俺の勝ち」

締め技の形ができていた

「負け…ました」

『……………』

誰も話さない。

それもそうだ。

あの一撃を耐えたんだ

普通はそこでやられる。

「…何で柄の一撃を…」

「あれね。三戦>さんちんく  
三戦の型だ。

完全にできると打撃なら耐える。

しっかし効いたア…」

イタタと言って腹を押さえる仙刀。

ま、無事ですむわけないか

しかし、何故か公孫贄が…

「も、申し訳ございません!!界皇様!!

直ぐに治療いたします!!」

「は?」

かなり、焦っていた。

「なんだ?無事なんだけど

てか、勘違いしてない?

俺、そんな大層な奴じゃないぜ?」

「しかし、界皇様は!!」

「待って。」

「何か食い違っている。」

絶対におかしい。

「仙刀。カイオウって何？」

「関取？」

「違うからこのバカ

俺の号。海の皇って書いて海皇だ」

なるほどね

「え？」

「何だよ、その地味かつ普通の反応。  
派手な驚き方しろよ」

「地味って、普通って言うなー!!」

「普通だな」

「揃うなあああ!!」

こんなことしてる場合じゃない。  
聞かないと…

「太守様。

お聞きしたいことがあります」

「いや、そんな急に畏まらなくても……」

「カイオウって何ですか？」

「……………話しないとダメか？」

「そうだ。

何か隠してるだろハムソン。界皇様について何か」

「はむそんって何だよおおお!!」

あー、もう!!

「黙ってて仙刀。

お願いします。お教え下さい」

「……………分かった。」

「界皇様は、俺の師匠だ

詳しい事を知りたい」

「!?!?…分かった来てくれ」

俺達はみんな付いていった

「これは、漢王朝にとって最高機密だ」

他言しないでくれ。  
という前置きから始まった

SIDE 仙刀

界皇様についての話か…

「本来は、太守や刺司にだけ教えられる話だ。  
まず、界皇様が初めて歴史に名をだしたのは秦の時代だ」

「死皇帝がいた時代？」

「字が違う！！」

あれ？何か間違えた？

「…始皇帝は自ら皇帝を名乗るに際し、邪魔な人がいた。それが…」

「界皇…ですな」

「そう。だから、除くために軍を発した。

数は四万、五万と言われている。

…しかし、壊滅した。」

「……………！！」「……………」

「まだ、続くんだ。

そして、漢建国の時代になった。」

「リユー・ホーだっけ、ご主人さま？」

「絶対違う。高祖ね。」

「酵素？」

「仙刀は黙れ」

「……続けるぞ。」

その際に高祖陛下は  
界皇様と友好条約を結んだ。」

「……個人と国とがですか……」

「その通りだよ孔明。」

しかし、その事を快く思わない家臣も存在した。  
……韓信だ。

彼女は、界皇様討伐の策を練った。

しかし……その策は露見し、高祖陛下は界皇様との対立を恐れ、彼女は謀殺されたんだ。

……謀反を企んだことにされてな」

「……嘘……」

……

「仙刀。お前寝てない？」

「ふあゝあ」

「せめて隠せやああー!!」

「やだ、たるい」

オーウ、ワタシ、レキシハワカリマセーン

「…話止めようか…?」

「すみません!! 続けて下さい!!  
ほら、仙刀も!!」

「おねふあゝあ」

「欠伸、堪えろ!!」

「はわわ、すいません!!  
続けて下さい!!」

「お願いしましゅ!!」

頭を下げる朱里と雛里。  
…そんなに聞きたいか。

「…最初に言ったのお前だからな…」

「何のこと?」

「そして、今だが…」

「マジ!? 教えて!!」

「変わり身ハヤッ!!」

今は別！！メツチャ知りたい！！

「今代は歴代最強だ

益州の太守が代替りした理由に界皇様が入ってくる。

界皇様がいらつしやる山を賊が荒らした。

それを咎める話だが…

驚くな。界皇様は成都に向かい

まず、一撃で城門を破壊

次に、王座に向かい劉焉の手を切り落とし

それを咎めた将を葬った

そして…漢王朝はその全てを不問にした。」

…自由だな。

最強だから、できることだ

「冗談では！？そのような事が…！！！」

「関羽。事実なんだ。全部」

「嘘…」

「ガチで大国と同じ軍事力あるな。

…バカ強いからなあ、あの人」

やばいからな…

「だからこの先、何があっても界皇様には手を出さないでくれ。」

そう言って話をしめるハム。

…そんなあの人から、俺は海皇をもらった。  
この名は本物にする。  
今のままなら、偽物だ

界皇に匹敵するぐらいのモノにする。  
そんな形で貴方へ恩を返します。  
強くなります…!!

VS 愛紗 界皇伝説〜ガチで軍事衛星で見張れ〜 (後書き)

さて、そろそろ曹操達も出さないと…

黄巾も終わらせて色々やりたいことがありますし

劉備軍成立！！（前書き）

すいません！！  
遅れました！！

## 劉備軍成立！！

SIDE 仙刀

あのあと、ハムソンの城に戻り適当にゆっくりしてた。しかし、今日に限っては呼び出しをされた。それが…

抗菌賊退治

お偉いさんからの命令だ。  
で、ハムが好機だ、とか言って俺等は独立する流れになった。

その時に町で義勇軍の募集をしたらかなりキタ。  
六千ぐらい

…日ハムに悪いとか、思わないのか？  
あいつ半泣きだったぞ。

ま、もしもの時に頼れと言ったからいいか。

で、賊退治に、そしたらいたよ…

「賊軍！！この先にあり！！  
数は一万！！」

「本当！？朱里ちゃん、雛里ちゃん  
どうする？」

「はわわ、戦うべきでしゅ  
私達は賊退治で結成されましたから」

「それに勝機はあります  
この先は衢地でしから」

「くちー？なんなのだ？」

「くちー？なにそれ？」

あ、ハモツた

「衢地は各所からの道が集まる場所です。  
そこに…」

「ふむ、一万の雑兵か…」

何か考える仁。  
いい考えあんの？  
頼りにしてんぜ

「しかし…敵を選べというのは…」

「愛紗。仕方ないよ。  
俺達も少ないから」

まだ、愛紗には不満があるらしい。  
でも、これは仕方ない  
事実だ。

「はい。そして、賊にとって重要な地に雑兵…」

「狙い目だ。名を上げるぞ」

雞里の説明を切る仁。  
… 雞里負けないで

「でも、どうするの？」

「俺も気になる」

おい、一刀。被んな腹立つから

「それはこの先に…」

「溪谷がある。そこに誘き寄せろ」

今度は朱里の説明を切る  
バツサリだ

「…私達、必要ですか…？」

あ、拗ねた

「朱里、雞里！！必要だから！！大丈夫！！」

「そう！！ロリ好きには需要あるから！！」  
フォローはしっかりしないとね。

「……………」

「あれ？無言？」

「止め刺されたからな  
お前に」

は、何のこと？

「朱里、雛里。策の詰めは頼んだ。  
私は準備がある。」

「おい、仁。せめて慰めてから行け」

あれを放っておくな。

あれ？二人とも泣いてない？

目の端に涙が…

クラスに一人二人いるよ！！

あんな泣き方するやつ！！

「大丈夫でしゅ

私は大人でしから！！」

「そうでしゅ！！」

なんか、完全に子供扱いされて拗ねた子供だけど…  
ま、いいか

「で、策は…」

「俺達が前線ねえ…  
サイコーだ。戦人の血がたぎる!!」

「慶。戦にごぞる  
気を引き締めよ」

「さあ、仙刀さん。参りましょう」

策は、前線アンド呼び出しが愛紗、慶、忠、俺、  
仁、鈴々が伏兵。

総指揮は朱里、雛里。

一刀と桃香は荷も…後方待機となった。  
…しっかしよー

「一万対四千…無理でしょ」

俺達の兵は四千。

相手は倍以上ってマジ無理だから。

「大丈夫です。

賊がいきなり全軍でなんて有り得ませんから  
それに、もしものための四人の編成です」

「うーん。信用すんぜ？」

やっぱりまだ不安だ…  
しかしよ…

「さーあ、お前等!!!抗菌賊退治だあ!!!」

『うおおおおお！！』

字が違うからあああ！！

なんて一刀の叫びは聞こえないよ。

あいつは今回は空気だ。

「進軍！！」

さーて、向こうはどうくるか…

『ブツ殺せええええ！！』

「…愛紗…。どう考えても全員来てんぜ…」

「予想外デス…」

「ネタに走る場合じゃねえ！！退くぞ！！」

一万対四千はホントに無理だから！！  
撤退して、

さっさと溪谷へ…！！

アレ？

そういえば溪谷って何処？

「賊と付かず離れずの距離を保て！！

一気に駆け抜ける！！」

あれ？

愛紗は道知ってるの？

やったら自信ありげ…

「向こうだあ!!」

「あと少しにござる!!  
駆け抜けよ!!」

お前等も!?

知らないの俺だけ!?

そして溪谷へ…

こっからは…何やんの?

「石と丸太を落とせ!!

賊を閉じ込める

閉じ込めたら火をかけよ!!」

仁の指示。

なる程ね。大体分かった

落石の音や賊の断末魔

成功か!!

「で、俺達はこっちにキタ奴を倒せばいいんだ」

「正解です。行きましょう

賊共が!!劉玄德が一の家臣関雲長の刃を受けよ!!」

さて、一刀のため頑張るか

『へえ…ここに目を付ける諸侯がいたなんてね』

『しかし、官軍ではないようです。』

『…華琳様。』

お耳に入れて頂きたいことがございます。』

『どうしたのかしら秋蘭？』

『はい。あそこで落石、火計の指示をした男ですが…』

戦は俺等の勝ち。

仁の放火が効いた。

準備ってこれね！！

「仁お疲れ。何時の間に準備したん？」

「当然の技術だ。」

私は隠密の技を心得ている」

え、隠密ってそんな事できるの？

「スゲエなお前！！」

何、やっぱ ヤクラ練って『火遁・豪火』とかやって放火したの

「!?」

「…貴様の話す事が分かん」

おい。コイツはスゲエ

ひよっとしたら写 眼とか持ってたなり!?

「…貴様は気味悪く思わんのか? 隠密だぞ」

何だ急に?

「別に。」

力になってくれるなら絶対、居たほうがいい!!

「…いつ、寝首をかけられるのか、分かんぞ」

「何それ? どういう意味だ?」

寝首…

寝ている時か…?

かく…、まあ近くに来るのかね…?

寝ている時に誰か来る…

夜這い!? 止める!!

俺はノンケだ!!

「……………」

「はっ!?!…何だ仁?」

「ふっ、貴様らしいと思ったただけだ。」

「ホントに何だよ」

「まったく、さっきのは何だよ  
まったく」

「居た！！仙刀！！仁！！  
大変だ！！」

「どうした一刀！！お宝ロリ画像が消されたか！？」

「違う！！いつまで引っ張るんだ！！」

「違ったか…」

「なら、何？」

「あいつのカバンに、生の蒟蒻入れたの俺だってバレタか？」

「そ、曹操が来た！！」

「面会するから来てくれ！！」

「S O S O ?」

「何か面倒臭そうだな」

「さ、仁も行くぞ」

「……………ああ。」

仁：「…やっぱりそいつと何かあるのか？」

お前、辛そうだぜ

劉備軍成立！！（後書き）

やっと、曹操

…いつになったら孫呉は出るんだろう…？

霸王登場！……え！？お前、仁の（前書き）

先に謝ります。

申し訳ございません

霸王登場！……え！？お前、仁の

SIDE 仙刀

「で、仁、一刀よ

曹操ってどんな奴？」

今は陣で、曹操の出待ち

曹操か：なんかで聞いた気がするんだよな

「歴史の話しか、できないから何とも言えないな…  
仁は知ってる？」

一刀もまだ見てないか…  
と、なると仁頼りだ。

「治世の能臣、乱世の奸雄  
文武共に優れ、人を惹きつける魅力がある。  
覇道を歩む者だ」

「マジかよ…」

チートだろそんなん

頭良いわ、運動できるわ、人気ある？

何だそりゃ。欠点とか知らない？」

「……………さあな」

少し表情が変わる仁

やっぱ何かあったのか…

「…ただ一つ言えるとしたら…」

「何？」

止める一刀。揃えんな

それより欠点だ。何があんの？

「小さい」

「「はあ？」」

器…じゃないよな  
話からすると

「……………あとは…」

「ご報告します！！曹孟徳様がお越しになりました！！」

来たか…

「正面のが…そうか」

仁の話も気になるが後だ

あれが曹操ね…

「仙刀…」

「間違いないな…  
ツンデレだ。」

「何を確信してるの!？」

「?属性やタイプじゃないのか？」

「真面目に見るオオオオ!!」

チツ。これだと思っただのによ…

「ハイハイ。」

分かりました」

この時代というより、この世界で分かった事がある  
それは氣の量、行き場で人の強さが分かる。

あくまで観察できればの話だけど…

俺は、修業で流れと量の観察はイけるようになった  
というのも戦闘に回せる氣が無いからというのが理由だけど…

話を戻すが曹操はヤバい  
量は比べる氣にすらならない  
流れも全体的だ。

氣は体に回ると運動が強い

例は愛紗と鈴々だ

頭に回ると頭が良い

例は朱里と雛里

で、こいつはそれこそ運動は愛紗、鈴々に

頭は朱里、雛里に負けるがバランスでいったら比じゃない。

…万能型ってのは間違いない



目論み通り一刀を狙うデコ  
一刀よ。

お前の責任はお前の物  
俺の責任はお前の物だ  
諦める

「春蘭止めなさい。  
その男は関係ないわ」

チツ、余計な事を…

「華琳様！！この男は…！！」

「止めなさい」

「はい」

剣を引く赤いの  
…なんか、しょんぼりしてない？

「別に斬ってもいいのに…  
あんなの代わりがいるし。」

綾波 イと違って

「仙刀貴様あ！！よくも…！！」

「お前さー、客の前だろうが。  
襲い掛かるな」

「お前の正論は腹立つんだよオオオオ!!」

何なのコイツ?

最近のキレる若者か?

「止める仙刀、一刀。

曹操の御前だ。」

あ、そうだった

「すっかり忘れてたな。」

仁に止められ、我に返る。

そついえば…曹操って…

「お前と同じ>金髪くだな」

「「「「「「「「「?!?」「「「「「「「「

「何のことだ?」

「お前の地毛。

今は黒く染めてるけど、元は金だろ?」

…そろそろ、はっきりさせるか…

一刀へアイコンタクトで命令

…分かってくれたか

上手く席を外したな

「…確かに秋蘭が言った通りね。  
似てるわ」

乗ってくれる曹操。

やっぱり何かあったか…

「私の「そおい！！！！」何事！？」

「「一刀！！貴様のせいで濡れたぞ！！」」

確かにアイコンで水持って来いと言ったさ…

…けどよ…！！

「俺を巻き込むなああ！！」

ふざけんなよ！！この野郎！！水を俺にも掛けやがった！！

「フハハハハ！！ザマアみやがれ！！

！？

…仙刀…仁を」

「ああ！？」

ちよつと振り向く

そこには…

「ホラ、言った通りだ」

所々、金髪になった仁が居た。

一部黒は溶けたみたいだ

「さあ、曹操との関係を…」

「じーーーーん!!!!!!」

話してもらおうとしたら

赤いのがキタ

「やはり仁だったのだな!!」

一年間もどこに行ってたのだ!!」

心配したのだぞ!!」

「やめる春蘭!!他人だ!!」

関係ない!!」

「ええい!!誤魔化すな!!」

私の鼻はだまされんぞ!!」

「匂い以外で気付け!!」

俺と一刀のダブル突っ込み!!」

…あれには効果なし

仁は赤い奴に絡まれて…

というか、大型犬にじゃれつかれている感じだ

「…秋蘭。

春蘭を回収して…」

「分かりました。

フツッ、姉者は可愛いなあ

そして、やはり仁様であつたか」

あきれ気味に回収命令を出す曹操。  
まあ、いきなりアレだからねえ…

「えーと、ご主人さま、仙刀さん。  
どういうこと？」

「「シラネーヨ」「

さっきまで空気だったな桃香。  
見事に  
そんなことよりもだ、

「さあて、仁。  
金髪とか、コイツが真名を知ってる理由とか、  
曹操との関係とか全部話してもらえるか？」

取り調べだ。

「…仕方ないか…  
私の名は曹徳。字は子廉  
真名は仁。  
曹操は…」

「姉よ。  
その子、仁は私の弟。」

「「「「「「「「「「嘘オオオオオ!?」「」「」「」「」

マジでえええ！？

義勇軍＋猫耳フードの大合唱

え？マジ！？

「お前、弟！？」

どう見ても曹操が妹だろ！！

大きさに考えて！！」

「お前はなに驚いてんだアアア！！」

え？そこじゃない？

皆は何に驚いてんの？

「姉が曹操って！！

じゃあ、何で仙刀と一緒に居て、益州にいたのさ！？」

「強いて言えば家出だな」

「ハアアア！？」

何してんのコイツ！？

「仁！！大丈夫だぞ！！

私達と帰るぞ！！

部屋は汚くなつたがな！！」

「きれいなままだ。じゃないの！？」

仁を攫おうとする赤。

何してんの！？

「はわわ、曹操様。

わざわざこちらに来て頂いた理由をお聞きして宜しいでしゅか？」

話を変える朱里。

ナイスだ

「…そうね。陣の中で話しましょう。」

……………？

陣の中では、

「さて、劉備。あなたは何のため兵をあげたのかしら？」

「…私は、この大陸が皆、笑って生きていける平和な国にしたい。」

全てをみるような曹操の目。

桃香もしっかり見る。

その目から逃げてない。

「そう。」

なら、この乱を静めるため力を貸しなさい。

貴方たちには殲滅する力は無い。

しかし、一刻でも早く鎮圧することが大事…違つかしら」

「その通りです」

こんなシリアス展開だった。  
さっきまで

今は…

「……………」

「……………」

仁と曹操の睨み合い。

一刀や赤いの、夏侯惇は曹操を霸王と言っていた。

睨み合いでこの覇気だ…

間違いないだろう。

その弟である仁も負けてない。

皆、遠巻きに見守るしかない。

その覇気は何人たりとも動く事を許さない…

のでは無く

「貴方が勝手に居なくなっただけだけ苦労したと思っているの？  
怒らないから帰ってきなさい。」

「相変わらず尊大な態度だな。

その性格で私がどれほど、要らぬ苦労をしたと思っている。」

…何か…その…

人の家庭事情の点で…

仁と曹操の姉弟喧嘩中だ。

言ってる内容が最初は のような感じだったが

『チビ、バカ、そのクルクル何？、髪切れ鬱陶しい』

になり、今は…

『そんな奴だとは…親の顔が見てみたい』

『お前の爺さん、かーんがん』になった。

…いやお前等、姉弟…

でだ、仁と曹操の間にはそれなりの身長差があり、仁が見下ろす形だ。

それが気に入らないのか、曹操、あの娘は必死で爪先立ちをしてい  
る…

ダメ…泣いたらダメ…

少しプルプルしてる

ホント…その、頑張って

そして、曹操が連れてきた奴ら…

てか、夏侯惇はかなりオロオロしてる。

涙目だ。半泣き

『華琳様に…いや、仁様を…しかし…』

とか、言ってるけど

結論でそうにねーな

夏侯淵は『フフツ、姉者は可愛いなア』とか言ってるけど…

現実逃避してない？

視界からあの二人外してない？

そして猫耳フード

苟イクとか言うらしい毒舌は、仁を睨んでいる。

ただし遠くから

いや、近くで睨めないのかよ!!

ウチもウチで困っている。

一応ウチの陣の中だからねココ。

三者面談中に、目の前で親子喧嘩が勃発したのを見てる先生もこんな気分なんだろうか…

具体的な例が浮かぶから困る。

「おい、一刀。止めるよ」

「ムリ。

お前なら仁を止められるだろ。  
止めるよ」

コイツ…

バカに頼っても仕方ない  
他の奴を…!!

「朱里、雛里。頭使って…」

「はわわわわわわわわ…」

「あわわわわわわわわ…」

ダメだな

「愛紗!!君に決め…」

「居ないな」

いつの間に!?

いいの!? 完全に空気になるよ!!

「鈴々は…」

蜘蛛の糸!!

「寝てるな」

…お前…

心から尊敬するよ…

慶、忠は食料調達とか言ってる居なくなったし…  
残りが…

「あれ? どうしたの?  
仙刀さん?」

ブレインフラワーガーデン

…ムリだな

と、思っていたら…

「華琳様!!」

そのような男と言葉を交わす必要はございません!!

行ったア!! 猫耳イ!!

「アア?」

「すみませんでした」

弱ッ！！何しに行ったの！？

猫耳、わずかコンマ一秒で敗北。

姉弟喧嘩は止まらない。

と、思ったが…

「はあ、いつまでもこのままでは終わらん。

一度、腰を落ち着けて話し合おう。」

よかったア…！！

仁の提案で停戦の兆しが…！！

「俺が椅子持ってくるよ」

こんな雑用なんか安いものだ。

喜んで行こう。

で、持ってきてだ…

仁は開口一番

「このように、座ると顔が途端に近づくのはどのような理屈なのであるつか

姉よ

「仁！！そこに跪きなさい！！」

「止めてええええ！！」

火薬をぶちこんだ。

…仁。ホントに頼むから止めて…

霸王登場！……え！？お前、仁の（後書き）

フラグ回収！！

さてと、黄巾も終わりになるかね…？

決戦拘禁賊！！霸王との共同戦線！！～また字が違っから～（前書き）

区切りのいい所までできました。  
キツかった…

決戦拘禁賊！！霸王との共同戦線！！～また字が違つから～

SIDE 仙刀

あの後なんとか不毛な姉弟喧嘩が終わった。

帰る時、曹操は『……………やっぱり、小さいかしら…?』と言って  
仁は『……………』無言

…お互いに傷ついただけじゃね？

しかしその後、夏侯惇が

『仁！！何処に行くのだ！？

今夜は宴だ！！』と言って拉致つて、

夏侯淵は

『一年分の埋め合わせ…

しっかりとしてもらつからな』とか言つてた。

滅べ。

それから、共同戦線張る事に決定。

曹操から飯、武器、兵を借りた。

で、今は朱里を議長に軍議中。

「賊の情報ですが…」

「待て、それは私が集めた」

「お、頼れるね。滅部仁」

「うん、流石だ。喪毛露仁」

「……………賊は……………」

報告をする仁  
畜生が！！

お前が向こうに居た夜は男四人で寂しく過ごしたんだぞ！！  
修学旅行みたいなイベントも無しだ！！

この野郎……………！！  
怨念パワーを食らえ！！

「でだ、仙刀。  
そのような敵に痛手を与えるには何をする？」

は？俺？処刑法は……………」

「火炙り！！」

「全身撫で焼きでね……………」

合わせてくれる一刀。

お前……………」

「……………当たらず遠からずか……………」

一刀！！お前は、最高の親友だ！！

今、絆を感じた！！  
今迄にない固い握手！！

これが……………友情か！！

「軍議の最中です。  
ふざけないで下さいご主人様、仙刀さん……………」

「何だとオオオ!!ふざけだとオオオ!!」

「愛紗!!俺達の友情はそんな物じゃない!!」

「訂正しろオオオ!!」

「え?あ、はい。すいませんでした…」

全く…何を言うのやら

『何故、謝ったのか…』とか、言ってるけど気にしたら負けだよ。

「何か、仲良くなる時がおかしいような…」

「ニヤハハ、気にしたらダメなのだ!!」

それ正解。

…ヤバッ

仁の処刑を考えていたから作戦聞いてないな。

なことを考えていたら曹操の所の兵士が来た。

「劉備軍は横隊を組み、号令と共に突撃せよ。

我らは後方より弓による援護の後、すぐに後を追う!!」

態度デカッ!!

「やったー!!鈴々先陣ー!!」

「そんな!!無茶だよ!!」

あのチンチクリン何考えてやがる…!!  
裏があるのか？

「仙刀。姉の策が読めた。  
その策のため私は、別行動だ。  
義勇軍の被害を減らしてやる。」

うーん。

何があるのかさっぱり分からん。  
でもよ、

「分かった。仁の言う事だ  
信用するぜ」

信じるしかないだろ!!

「…礼を言う。…そして、貴様。態度が悪いな」

伝令に鎖鎌を当てる仁  
おっかね〜な  
でも、ムカついてたし、  
やっっちゃえ。

「も、申し訳ございませんでした!!」

「ならん。

貴様は我らを舐めた。

飽く迄我らは対等…

命令される筋合いは無い

無礼討ちだ。死ね。」

一気に斬る仁。

…マジで怖い。

仕事人モードだな

「うわっ」

「あわわわわっ」

「はわわわわっ」

「仁さん！！やりすぎです！！」

このような事をしては…」

「これを許せば侮られ、兵の士気が下がる。

仕方の無いことだ

…私に行くぞ

姉に負けてはおれん。

必ず見返す」

消える仁。

頼んだからな…

「愛紗。

仁も俺達の事考えてやった事だから…あまり気にしないで」

「大丈夫です。仁さんの考えが正しいです。

私の浅慮でした」

取り敢えず変なしこりはできてないみたいだ。  
安心した。

さて、次は…

「配置は？」

「はいつ!!」

曹軍の方がいましゅから…」

「前線に仙刀しゃん、愛紗さん、鈴々さん、慶さん、忠さんで行きます!!」

「分かった!!」

さて、行くか

陣から出て兵に指示だしか…

「仙刀オ!!一丁気合い入るの頼んだぜ!!」

「左様!!賊徒の輩、我らが斬り捨てる!!」

盛り上がっているね  
さて、

「お前等!!開戦だ!!場所は前線!!  
キツイ仕事になるけど、皆出るから気張ろつやア!!…!!」

『オオオオオオ!!』

気合い十分!!

さて、行く…

「俺の居場所は…」

「私の居場所は…」

「『『『『『『後方待機！！！！』』』』』』」  
「邪魔！！荷物！！！！」

「『待つて！！』

変な事言つた人居る！！！！」

え？誰の事？

S I D E 一 刀

初めて目の前で人が死ぬ所を見た…  
仙刀はアレを背負っているのか…

親友に抱いた初めての尊敬心  
…俺なら背負えない…

「負けるなよ仙刀  
生きて帰ってこい…」

仙刀…無事でな…

S I D E 仙 刀

「死亡フラグの匂いがアアアア！！！！」

ヤバい！！ここら一帯ヤバいから！！  
賊から『この戦が終わったら俺、結婚するんだ…』  
とか、

『家に待ってる奴がいるんだよ…！！』  
とか言う奴が！！

斬れるかああああ！！

じーん、ガチで早くしてええええ！！

「皆耐える！！策が成れば流れが変わる！！その時まで耐えよ！！」

「さあ！！派手にいくぜえええ！！」

「我が槍よ！！唸れい！！」

「にやにやー！！頑張るのだー！！」

皆、奮戦してる。

仁…早くッ！！

「陣から火がッ！！」

「何だとオオオオ！？」

これは…！！

「好機だ！！皆よく耐えた！！

一気に押すぞ！！」

『ウオオオオオ！！』

敵は混乱！！やるなら今だ！！  
決まりだな！！

「伏兵！！かかれ！！」

さらに仁の伏兵！？

おまつ、どんだけ活躍する気だよ！！

後ろから火、前は俺たち、横から伏兵。

このまま逆転される事無く勝った。  
被害も少なくな

SIDE 曹操

火が早いわね…

こちらの細作がこんなに早いなんてないだろうし…

仁…よね

自分がどれ程、危険な事したのか分かっているの？

…だから言ったのよ

要らないって…

決戦拘禁賊！！霸王との共同戦線！！～また字が違つから～（後書き）

黄巾編終了です！！

ここまで長いな…

## 脱二一ト！！桃香の就職（前書き）

平原統治編スタートです

これからもよろしくお願いします。

## 脱二一ト!! 桃香の就職

SIDE 仙刀

戦が終わわり、曹操と別れて賊を潰す流れになった。別れる際に、

仁は俺に付いていく、と言って、夏侯姉妹は必死で止めようとしてた。

夏侯惇は号泣してたぞ。

『じいいいん、なぜ来てくれないのだからあぁ?』

とか言いながら

…それでも俺に付いていくとか言うあたり、何があったの?

曹操も、目を伏せてたし…

何か深い溝があるのか?

で、荀イクは男嫌いの癖があり、一刀をボロボロに言ってた。

ま、その時の止めは俺だけだ。

仁については、かなり迷う感じだったけどな。

『どうすれば…華琳様の弟だし…いや、男なんだから…それでも…軍師って頭良くないとダメじゃない?』

悩む事がかなり頭悪い気がする。

こんな事があったけど別れた。

仁はこっちに来た。

ありがたい

そして俺達は賊退治

しばらくして、賊の親玉の大剣獵師が死んだ、というニュースが来た。

…なんか、ハンターが頭を過った。

あいつ…不死身じゃなかったのか…

で、賊が弱くなり乱は鎮圧された。  
そして俺達は手柄があることから、桃香が平原の相、とやらに任命された。

「やった！私、相だつてさ！！平原の！！」

「おめでとつございます。桃香様」

「おめでとつ、桃香」

「うん！！私、頑張るよ！！」

ま、これがさっきまで

平原に着いて仕事スタート  
脱ニートか？とりあえず手に職を持ったし。

そして愛紗、鈴々、慶、忠、仁は兵士の訓練。  
俺と一刀は与えられた屋敷の掃除。  
桃香や朱里達は事務仕事。  
皆、やる気を出してた

で、今は…

「仕事多いよ〜助けて〜」

「……………さっきまでのやる気はどうした…」

だれてやがる。

俺達はすぐに使う部屋一通り掃除をした。  
正直バカ広いから全部はムリ。  
しかし、こんなになるなんて…どんな仕事…

「……………」

「？仙刀さん。  
どうしましたか？」

雛里が聞いてくるが、知ったこっちゃない  
…それより

「…何語？コレ  
…ウルドゥー語？」

「違います。漢字です」

「嘘だツ！！読めないから！！  
漢字だけとか有り得ないから！！  
初めて見たぞこんな文！！」

「一刀が『古典の時間に何してた？』とか言っているが知らん！！  
何だこの禍々しいのは！？」

「仙刀さん…まさか、漢字が読めな…」

「朱里。言っちゃ駄目。  
コイツの頭は生ごみだからね。」

「言っただなこの野郎！！」

「一刀才！！上等だあ！！  
読めるに決まって……」

「ならこれ読んで」

「まめ」

出てきた文字は『豈』

まあ、豆が入っているから問題無い。大して変わらない筈だ

「「「「………」」」」

あれ？違った？

「ごめん。山豆だな。」

「「………正気でしゅか？」」

「朱里、雛里。」

言っちゃ駄目。あれが全力なんだよ……」

軍師二人の呆れた目。

…そんなに酷いの？

「いや！！桃香も読めないはずだから！！」

なら、コイツも巻き込む！！

桃香は馬鹿な筈だ！！

「あに」

「はい、正解」

「嘘だああああ!!」

お前バカキヤラじゃないの!?何かこんなの見たら  
『うん。頭がグルグルする』とか言う奴だろ!!」

「え!?そんな風に思われてたの!?私!!」

え!?違うの!?

「これでも白蓮ちゃんと同じ私塾に行ってたんだよ。」

.....

「ドンマイ」

「良い顔すんな。肩から手を離せ。」

悔しくなんかないからね!!

「...だけど、これが読めないのは致命的でしゅね」

そうなの?朱里

「そうか?漢字なんて普段使うの知っていいりゃあ...」

「使いましゅよ。反語でよく出ます」

「マジ！？俺、初見だよ！！」

「……」

普通だつて！！

読めない人多いよ！！

「……仙刀さあ、学校の古典で何してた？」

「……学校？」

「あ、そうか……こつちには無いな。学校は国の私塾みたいな場所だ。」

「遊び場だろ？」

「……え？」

「仙刀が言った事は違つから。で、何してた」

「古典つて睡眠時間の事だろ？」

「……真面目に勉強して下しやい！！」

「真面目だよ！！理系と体育だけ！！ただ古典とかの歴史モノは眠くなるの！！教師の顔も覚えられないくらいに！！それだけだから！！」

なんて失礼な奴らだ！！

「絶対におかしいでしゅ…」

とにかく、仙刀さんには試験が必要かもしれませんね…」

「は？」

アニが分からなかったただけだよ！！」

「理由としては十分ですよ…」

雛里のとんでもない提案

マジ！？テスト！？

………

「ま、いつか」

「…以外と物分かりがいいですね」

心底以外そんな雛里

そんなに聞き分け悪そうか、俺？

「だってよ…」

向上しないから別に変わらないしな」

「既に諦めでしゅか！？」

「そつだよ。悪いか？」

「」「開き直らないで下さい！…」

今更言われた所でな…

「取り敢えず、試験は受けてもらいましゅから…」

「チツ！！面倒だな」

「ザマア見やがれ！！」

普段から真面目にしないからだよ！！！」

一刀にムカついた

殺すか

「いえ…ご主人様にも受けてもらいましゅ。

どれ程できるかは事務仕事のために、把握したいですから…」

「え、俺も？」

「ザマア見やがれ！！」

人の事バカにするからだよ！！！」

お前だけ何もないなんて甘いんだよ！！！」

「…どつちもどつちなような…」

桃香。余計な事言わない

で、朱里と雛里がテストの準備  
つたくよー。

時間の無駄なのに…

「では、試験ですが、読んで下さい。

「一問二点。計百点満点でしゅ。」

「勉強時間は無いの？」

「はい。」

「全部基礎なので大丈夫でしゅ。」

「全く一刀…」

「お前はそんなのが必要か…」

「別に要らないだろ。」

「読めない事に変わりない。」

「諦めないで下さい！！」

「まだ早いでしゅ！！」

「雛里…」

「分かったよ。0点は避けるさ。」

「ちょっとはやる気出すか…」

「……前向きになっただけ良いんですか？」

「雛里ちゃん。」

「…気にしないでやろう。」

試験開始

「一刀との間に仕切りが置かれる。」

「試験官は一刀が朱里」

「俺は雛里。」

桃香は見学している。

で、仕切りは甘いから声が聞こえる。

「あ、これ分かる。

これは…

次は…。本当に基礎だな

白文だけど分かるな」

「はい。簡単なモノを選びましたから」

カンニング防止のためか、答えだけ聞こえない。  
チツ

で、俺のテストは…

「うわ、何これ読めなッ

次は…ムリだな。

本当に糞だな。

頭のなか真っ白だ。」

「…全部基礎でしゅよ…」

いや、どこの基礎？

知らないモノばかりだ。

「…ここなら…」

難里が違う所を指差す。

『矛盾』の字

…これは多分、武器と盾だな…

相性が良い…

いや、攻守が両立した物になると…

「グングニルね。分かります。」

「違いましゅ！！何ですかそれは！？」

マジかよ…自身あつたのにさ…

「なら、これは…」

『青椒肉絲』の字。

これは…待て。

今までこんなに難しかったんだ。

急に料理？有り得ない。

別の意味が…！！

「仙刀しゃん？」

「青？硫酸銅…いや、ヘキサシアノ鉄？酸カリウム水溶液か？

…しかし肉が分からん。」

「あの…そのままで…」

「分かった！！」

青い肉だから、カックスだな！！」

「次の問題でしゅ！！」

何で！？外れた！？

そして…

「試験終了です。」

「…試験終了です。」

「終わったー!!!」

「オワター＼(^O^)/!!!」

テスト終了!!!

あー、ムズかった。

「ご主人さま、どう?」

「うん。結構できた」

「桃香。俺には聞かないの?」

「聞くまでもないから」

「酷いッ!!!」

畜生!!!バカにしやがって!!!

「舐めんなよ!!!」

俺だって解けたんだ!!!」

「嘘!?!」

コイツラ!!!どこまで人を!!!

静かに怒りをひめていたら

「では、結果発表でしゅ！！！」

採点結果が出たらしい。

「まずはご主人様ですが…、92点でしゅ。」

「あー、どこ間違えた？」

「順番間違えや、

は、か、が抜けてました。そこですね。」

ふーん。

結構できてたんだな。

「ま、仙刀には勝ったな」

何だと？

「お前さあバカにするのも大概にしろよ。  
俺もできたんだよ」

「次に仙刀さん。

…8点でしゅ…」

「…最後の五問はな…」

そこならな…

「一桁！？出来てないじゃん！！」

「しかも、最後で一つ間違えているよ！？」

いや、勉強しなかったのが悪いな。

普段はもつとできるよ。

…ホントだよ。

「…雛里ちゃん。本当に、同じ問題で…？」

「…やったよ…最後は違うけど…」

本当に0点になるって思ったから…」

「…え？最後つて救済問題なの？」「」

マジ？

真面目に考えたけど…

「雛里ちゃん。…どんな問題？」

桃香が聞きに行く。

確か最後は…

「最後は『犬、水、田、字、草』でしゅ」

あ、そんな感じだ。

「お前舐められすぎだろ！！」

てか、その中のどれを間違えた！？」

え？確か…

「…実は田を、何故か2と答えて…」

あ、そんな感じだったな

「「「何で!?!」」」

「いや、昔ぞ。

1 + 1 = 田とかあったからさ、それを逆算したんだよ。」

「「「何やってんのオオオオ!?!」」」

あれはケアレスミスだったな。

流石に俺が悪い。

「「……………」」

「朱里、雛里。

何で俺の肩に手を…?」

「仙刀さんへの教育は任せました。」

「私達はまだ、仕事があるので…」

「あ、私も書類が…」

「待て。逃げるな。

伏竜と鳳雛の二人と桃香なら大丈夫。  
しっかり育てられるよ。」

「無理でしゅ!!」

私達の手にも負える物じゃありません!!」

「ご主人さま!!アレはダメだよ!!」

「俺だって無理だよ!!何とかして!!」

「頑張つてね、四人とも」

「お前のせいだよ!!」

怒鳴られた。

何で?

結論としては俺は事務無しになった。

まあ、不毛だから仕方ないな。

脱二一ト!!桃香の就職(後書き)

反董卓連合までどねぐらいやるか…  
計画は0です。

## 仕事の時間です

SIDE 仙刀

しばらくして、上手く仕事が始まった。

俺の仕事は

一つ目が軍の訓練

軍は、愛紗、鈴々

そして新しく入ってきた趙雲…星の三人と、俺の部隊になった。

更に俺の部隊、通称『南郷隊』は、

俺・慶・忠・仁の四部隊からできている。

各部隊には各自の特色が出ていて、

慶は攻めと体力作り

忠は守りと弓

仁は隠密と諜報

を中心に鍛えている。

俺は…

「このように、髪型をモヒカンにすることで迫力が上がり…」

「いや、お前何してんのオオオオ!？」

迫力と格闘が中心だ。

俺の所になぜか、ヒヤッハー!! な奴らが集まったからこうした。

…実際は良い奴等だよ。

「何だよ一刀。」

訓練中だから帰れ」

「いやお前何考えてんの!？」

賊を倒したのに新しく悪党を作んなアアア!！」

「うるせえよ

何だよ、何が悪いの?」

「全部!!」

てか、良い所は何処?」

「まったく、文句ばかりだな。

ま、そんな感じでも真面目にやる時はやる。

基本は四部隊纏めて訓練するし。  
でだ。」

俺がこの四部隊のトップだから、野郎共に…

「総長!!」

お早うございます!!」

「押忍!!総長!!」

「ヒヤッハー!!総長が来たぜー!!」

総長と呼ばれることになった。

総隊長を略して総長。

…モヒカンからの総長はヤバいだろ…

で、二つ目は事務が無理な事から…

「仙刀のお兄ちゃん!!  
炒飯を頼むのだ!!」

「ん、分かった。三人分ね」

料理人だ。

幾つも一人で作るのは面倒だから、基本三人前以上で作る。

因みに、軍でやらなきゃならない事務は全部仁に押しつけた。  
黙って押しつけた日の夜の話は…

「仙刀才!!」

貴様何故私の机に軍の書類を置いたあ!!」

「五月蠅いな!!今寝るトコだよ!!  
それに仁なら出来るだろ!!  
俺は読めないから無理!!」

「ふざけるなよ、貴様!!  
情報収集も私の仕事だぞ!!  
どれだけ働かせるつもりだ!!」

「え?情報に関しては趣味でしょ?  
趣味で働いてるとか無いから」

「黙れえ!!  
趣味で仕事をする奴があるかあ!!」

「うおっ!!  
踵落としは止めろ!!」

「てか、寝台壊れた!!」

と、仁の猛攻に曝された。

結果、やってくれるあたり本当にオラニヤンだ。

てか…

姉貴の曹操はツンデレ

弟の仁はオラニヤン

…血筋を感じずにはいられない。

な事を思い返していたら…

「やっと午前中の仕事終わったよ」

「お疲れ、桃香。」

「お疲れ様です。」

「桃香様もお昼ご飯ですか？」

「うん。愛紗ちゃんも？」

「はい。星もそろそろ…」

「来ましたぞ」

大分集まってきたな。

「雛里と朱里は？」

「まだやってるみたいだよ」

「ん、分かった。

一刀…じゃなくて雑用。

あの二人呼んでこい。

後でまた作るのは面倒だ」

「雑用言うな。

まあ、呼んで来るけどさ」

そういえば一刀は雑用する事になった。

まだ働くほど漢文…だったかが読めないから、勉強しながら雑用している。

「で今もう、鈴々から炒飯を注文されているから皆それでいいか？」

「いいよー」

「問題ありません」

「メンマは入りますかな？」

あれ？おかしいぞ？

「…星、もう一回言って」

「メンマは入りますかな？」

「あ、やっぱり聞き間違いじゃなかったな。入ると思っている？」

「なん…ですと…」

メンマの入らない炒飯など、炒飯と呼べん!!」

「普通入らないだろ!!  
理不尽にも程があるから!!  
その仕分け!!」

取り敢えず星について分かった事はメンマ好き。  
しかも極度の  
いつかメンマおかずにご飯食いそうだな…

「仙刀オー。連れてきたぞ。」

「ん、今は下拵え中だから少し待ってて」

これで全員。

あいつら三人は今日は先に食ったしな…  
訓練の予定で

今居るのは…八人か。  
何か他にオカズがある方がいいか…

「他にも何か一品作るけど要望ある?」

「なら、青椒肉絲をお願いしますか。」

「回鍋肉かな。」

「メンマですな。」

「麻婆豆腐なのだ!!」

「うーん、杏仁豆腐で」

「私もそれです」

「餃子だな。」

「一品に纏めろ。」

てか、星。メンマは無い」

バラバラだとは…

全部作るとか嫌だぞ

「何ですと!?!」

メンマの無い厨房など、厨房ではない!?!」

「厨房だよ!?!どんだけメンマ必要なの!?!」

こいつ…狂ってやがる…!!

「よいですかな!?!仙刀殿!?!」

料理人たる者、メンマを忘れるようでは話にならん!?!」

「なるよ!?!」

そんなに食いたいなら自前で持って来い!?!

で、一刀。決まったか?」

一刀に話を振る。

メンマ中毒はもうダメだ

「ああ、チンジャオ頼んだ」

「分かった。」

炒飯の下拵えは終わったから少し待て」

よかった…決まったか

「それにしても意外だよな。」

仙刀さんが料理出来るって」

桃香からの疑問。

そうか？

まあ、原因は…

「一刀が味には五月蠅いからな…

見返すためにやりまくったら上手くなった。  
そのせいで、味付けは一刀好みだけだな。」

「あ、そうなんだ。」

やっぱり仲良いんだね」

「「良くなーよ」「

もうこの返しは脊髄反射になった。

…そんなに仲良さそうか？

んな事してたら炒飯が出来たし、  
チンジャオは大分火が通った。

「おい、できたから誰か盛り付け頼んだ。」

「私がしますよ」

「雛里ちゃん、手伝うよ」

「なら任せた」

雛里と朱里に任せる。

てか、手伝いする子供にしか見えない。

「うーむ、まさか本当にメンマが無いとは…」

「当たり前だろ。」

てか、メンマ押し止める」

何回押す気だよ…」

そんな内に、こつちもできた。

チンジャオは大皿に。

よし、完成。

「おら、こつちもだ」

「お持ちしますよ」

「じゃ、愛紗頼んだ」

しっかし八人になると結構大人数だな

…疲れた

とにもかくにも昼飯

また午後から仕事か…

「なあ、仙刀。  
今日は塩味が薄くない？」

「うるさい一刀。  
次は塩足すからよ」

文句言うな  
不味いとかいっただら投げるからな。一刀を

「そう？おいしいよ？」

「いや、俺の好みの話だな  
不味くはない」

「たくよー、ならそうと先に言え。  
思わず投げそうになったじゃねえか。」

「俺をか？」

「正解」

よく分かったな。

こんな普段のやり取りに、今日という日に桃香は…

「なんか…ご主人さまと仙刀さんって夫婦みたいだよね？」

爆弾をぶちこんだ

「おい！…一刀！…こいつ吊すぞ！…」

「OK!! 縄ならあるよ!!  
鞭は!?!」

「鞭打でいく!!」

「ナイス!!」

「え? 私何か変な事...」

「言つたわアアア!!」

このアマ...!!

なんて事を!! 胸糞悪い!!

「はわわ... 雛里ちゃん。

あの二人は...」

「あわわ... 決まりだね...」

「決めんなアアア!!」

何!? 何なのコイツ等!?

そんなにヤバい関係にしたいの!?

「... 本当にメンマが無いとは...」

「お前は黙ってる!!」

メンマの守護將軍!!」



仕事の時間です(後書き)

星が参入!!

どつやって場を乱そうか…

労働基準法？ゴメンそれ何語？（前書き）

三国志の故事からの話です

…かなりの悪ふざけになりました…

労働基準法？ゴメンそれ何語？

SIDE 仁

私の部屋には多くの書類が集まる。

それこそ朱里、雛里の部屋以上にだ。

そうというのも、近隣地区と中央そして平原からの情報が全てここに集まるからだ。

そして…

「仁、軍の書簡全部ここに置くよ。」

「一刀、貴様はこの部屋を見て、何か思う所は無いのか？」

「さて、次は…」

「待て！！整理をしてくれ！！頼む！！」

…かなり荒れ果てた。

昔の春蘭の部屋並みだ。

私が叱り付けたらマシになったが…

これも全てあの男、仙刀が原因だ。

あの事件で更に増えたからな…

SIDE 一刀

……この整理？

やだよ。絶対。

書簡で山と谷と川ができてる。

風流なんてない。

まあ、原因は仙刀。

その理由が…

朝廷の遣いに対する、暴行だ。

その内容が…

「つまり、御使者様は賄賂を要求してしましゅ…」

「しかもかなりの金額…」

税は必要最低限でしゅから払う余裕はありましえん…」

「……」

勅使の督郵が、軍功の詐称をして権力を握ってないか調査に来て、  
賄賂を要求したんだ…

払わないと罷免される。

悪いと処刑だ。

いや違う、目的は…

「それが無理なら夜に来てい

…解りやすい下卑た要求ですな」

そう。それが狙いだ。

やる事なんて分かりきっている。

特に桃香に言ってた…

クソッ!!

「なあ！！俺の物を渡せば……！！」

「ダメでしゅ……相手が価値を見出ださないと交渉できません……」

「そして、探りを入れたら金か……桃香様でないとな納得しません……」

「何だと！？桃香様！！」

受け入れる必要などありません！！

私が叩き斬ります！！」

「そんな事なんて許せないのだ！！」

「！？ダメでしゅ！！」

相手は朝廷からの正式な御使者でしゅ！！」

「愛紗、鈴々落ち着け。

そのような事をすればただですまんぞ」

八方塞がりだ……

なら……！！

「売ってお金にすれば……！！」

「時間がありません……」

買い手を探しても相手が払えるのかも……」

「いや！！まだ、分からない！！」

諦めきれないだろ……！！

そんな簡単に受け入れられないだろ……！！

…なのに

「ご主人さま。ありがとうございます。でも、大丈夫だよ。私が行けばそれで…」

「!?なりません!!桃香様!!  
そのようなを事せずとも…!!」

「ダメなのだ!!そんな事したら…!!」

「でも、この平原の相は平和への第一歩だから…  
今の立場は必要なの  
だから…!!」

桃香…

強がるなつて。…怖いんだろ。

腕…震えているよ…

「桃香!!まだだ!!」

仙刀達の見回りがそろそろ終わるから…!!  
あいつらが良い案出すかもしれないから待ってて!!」

桃香を座らせ、外に向って走る。

仙刀。

お前が頼…」

「お前、何やってんのオオオ!?!」

外に出て目に飛び込んできたのは…

気絶して、十字架に、はりつけにされて火炙りにされている、太ったオッサン…督郵がいる光景だ。

その下で仙刀は楽しそうにしている。

おいまさか…!

「なんだよ一刀。

今キャンプファイヤーの真っ最中だよ。」

「上エエエエ…!南郷上エエエエ…!」

「気にすんな燃料だ」

「んなデカイ燃料あるかアアアア…!

何でなことしてんの!?

おい…!慶…!忠…!仁は何処…!

あのバカ押さえるオオオオ…!」

こいつはバカか!?

てか、火炙り…!

勅使にそれはマズイ…!

「コイツが俺の部隊の奴等バカにしたからむかついてな。  
あいつらは…向こう」

「おい、仙刀オ…!

野菜の用意できたぜ…!」

「肉も切り申した!!」

「ストップパーがアアア!!」

仁は何処だ!?

あいつら止められんのは…!!」

頼む!!最後の良心!!

あいつらバーベキューする気だ!!

止めてくれ!!

「仙刀、薪と油の用意ができたぞ。」

「仁!!お前もかアアア!!」

てか、薪と油って!!

最悪の組み合わせじゃん!!

「バツカお前。」

油なら吊してあるから要らねえよ。」

「そうであつたな。」

ダメだこいつら…

早くなんとかしないと…

このバカ共をなんとか…

「ご主人さま!!どうし…キヤアアア!!」

「桃香様何が…はわわ…!!」

ヤバい！！皆来てる！？  
いや、チャンスだ！！  
誰かと止める！！

「おー、鈴々。芋焼けたぞ  
いるか？」

「もらうのだ！！」

「はいよ！！」

はい！！一人陥落！！

「仙刀しゃん！！その人は…！！」

行った！！軍師の二人！！

「「「「ああん？」」」」

「「タダのデブでしゅ」」

まあ、予想はついてたよ…

「仙刀殿、そのような事は…」

星！！お前は…！！

「ああ、今日の夕飯、メンマで何作るうか…」

「もっとやるのがよろしいですな！！」

メンマで終わるだろ!!

「仙刀さん!! そのような事をしては!!」

頼んだ!! 委員長キャラ!!

「お前もさっきまで斬るとか言ってただろ?  
同じ穴のムジナだよ」

「…あ。」

普通に論破アアア!?

抵抗しないで次々に陥落する俺達。

ヤバいな…あのままだと…

上手に焼けましたー

とか、なるぞ…

「うつぐ…貴様!! このような真似をしてタダで済むと思う」「黙れ

「ムグア!!」

あ、目が覚めたと思ったたら薪で殴られている。  
痛ぞ。

ま、どうでもいいけど。

あいつが殴られるのは

「むぐら、もぐらっはめっそ!!」

「オラオラ美味いか？」

薪美味いか？」

気が付いたら仙刀は薪を督郵の口に突っ込んでいる。  
流石に同情…

「吐き出せ！！」

「めびよお！！」

普通に同情するわ！！

腹パンって！！

かなりいい勢いだっただぞ！！

あ、更にビンタ。

…なんて、楽しそうな顔してやがる…

「貴様！！帝の勅使たるワシにこのような事をしてタダで済むと思  
うな！！」

貴様等全員処刑じゃ！！」

そうだ…問題があるんだ

「チツうるせえなー

やってみろよ。

海皇が相手になるからよ」

あ、それ良いかも。

相手は朝廷の中心近くに居る奴。

海皇は効くかもな…

「何！？界皇！？」

バカを言うでない!!  
貴様のような小僧が!!」

「なら…食らうかい?  
俺の正拳…」

督郵の目の前に拳を突き出す。  
…すごい殺気だ。

「ひ…ひい!!止める!!  
止めてくれ!!」

効果は抜群。

これを使えばよかったか…

「ならバカにした事謝れ。

…肉溶かし骨焦がす鉄板の上で…

…焼き土下座、開始だ」

待て!!ここで!!?

てか、その前に!!

「仙刀。あと、賄賂もだ。

その事と、桃香の身売りも撤回させて。」

そう。これはやらないと

「は?何それ?

コイツそんな事まで要求してたの?

…マジクズだな

おい。」

「は、はいっ!!」

分かりました!!取り消します!!」

これで一安心の筈が…

「仙刀。この男は朝廷の官吏にありながら、海皇に齒向かったのだ。罰が要るだろう?」

じいいん!!止めてよ!!

お前等の罰は処刑だろ!!?

「罰う?焼き土下座か?

血抜き?生涯奴隷?人間学園?手にドスを刺す?車を崖から落とす?アジフライ?」

「…温いな」

なんでそんな

ざわ…ざわ…

しそうなレパートリーなんだよ…

後、最後つて罰?

「罰は…」

仁の提案は、界皇に逆らった事に騙しそれをネタにゆるする事だ。督郵は快諾。

結果、かなり財政に余裕ができた。

…鬼か?

バカみたいに取ったぞ。

でだ。

その案の実行の仕事は仙刀により、全部仁になすり付けられたので、  
(仁の仕事が)倍プッシュだ…！

諜報、南郷隊、金稼ぎ。

魔の三本柱で仁の部屋がヤバい。  
書簡で埋まった。

で、今はその整理と処理中だ。

「仙刀オ！！貴様は呪うからな！！」

仕事をしながら本気の叫び

その後少し、仙刀は体調不良になったらしい…

後さ仁、お前の部屋に蠟燭、藁人形、五寸釘がやたら多いけど…マジで呪った？

労働基準法？ゴメンそれ何語？（後書き）

反董卓連合をいつからするか…

早く移った方が良いですか？

三個の零々三顧の礼だから (前書き)

ヒロイン登場!?

恋愛に対しての は何も考えていません。

一刀の振り回し方なら考えていますが…

三個の零々三顧の礼だから

SIDE仁

「…おい、仙刀オ。

こりゃないぜ」

「左様。仁、生きてござるか？」

あれから書簡は減る事なく部屋には壁ができた。

…真面目に処理してこれなのだ。

休みを取るうものなら…

考えたくもないな。

「仁…」

そして、この状況を生み出した怨敵は驚くべき事に

「たまには休め。

働いてばかりだと能率下がるからさ。

で、ワケで明日休みだ。」

などと言つてのけた。

…私を殺す気か？

恐らく休みが終われば酷い量の仕事になるだろう。

「貴様！！それより減らす努力をしろ！！

この内、何割が貴様関連だと思つている！！

半分は貴様がやるものだ！！」

「絶対ヤダ

書類仕事は無理、出来ないから。」

「そのような事は分かっている!!

要らぬ物を増やすな!!

なんだこの経費!!

球、棍棒、革手袋、特製靴、帽子!!

貴様は何をした!?

「いや、訓練がつまらな…違うモノをしようと思って野球をした。」

「なら、これは遊びの経費か!?

この際、野球が何なのかは聞かん!!

貴様は訓練で何をしている!?

つまらない、については無視だ。

聞いて仙刀の考えを知ったら胃に穴が空く。

「いや、あそ…じゃなくて娯楽を通して隊の仲間意識や連帯感を鍛えるのが目的だ。

結果、連携なら一番だ。

武器を振ったり、走るのだけが訓練じゃないだろ?」

ぐっ!!

なまじ、成果をあげているだけ反論し辛い!!

…遊びなどという単語は聞こえん。

「でもよ、仁に押しつけるのは…」

「左様にござるな。」

慶、忠。

貴様等…

「なら、この弓矢の経費  
喧嘩で壊れた物の修理費は何だ？」

「さて、帰るか」

「仁殿。」

「いずれは終わろう。」

「待て、本気が貴様等？」

あの二人もか…

馬鹿が感染したのか…？

「兎に角だ！！私の仕事を減らせ！！  
もしくは分けるなり、新しく軍師雇うなりしろ！！」

本音だ。本気で頼む！！

「軍師…か…」

「雛里ちゃん。私たち宛てにお手紙来てるよ。」

「誰からのの？」

「白雪さんからだよ」

「お姉ちゃん！？お願い見せて！！」

「はい。後で私にも見せてね。」

「なら、一緒に見よう？」

「うん、そうしようか。」

「「えっと」「」

『お久しぶりです。雛里、朱里。

この度私も卒業しました。

今回このように筆を取ったには理由があります。

実は…』

「はわわー！！」

「あわわー！！」

「「…どうしよう…」」

SIDE 仙刀

軍師…つまり頭が良い人連れて来いってわけか…

なら、あの二人に聞くのが早い。

類は友を呼ぶなんて言うからきつと頭が良い奴を知っている！！

…多分

だから、こうして二人の部屋に向っていたら…

「はわわー!!」

「あわわー!!」

叫び声。

…何事？

「おーい朱里、雛里何があつた？  
てか、相談があるんだけどよ。」

「…(ビクッ!!)」

ど、どうしましたか？仙刀しゃん。」

あ、何かありそうだ。

だが、それよりこっちの話だ。

早くしないと仁が死ぬ。

夜中に蠟燭食うくらいに、追い詰められているからな…

「ああ。お前等、頭の良い奴知らない？

南郷隊で働いてくれる軍師が必要でさ…」

「…(ダラダラダラダラ)」「」

何だ？汗が滝みたいになつたぞ？

持病か？

「い、いえ!!!まったく知りません!!!」

「そつでしゅ!!!」

「何か隠してない？」

「「ま、まさか!」「」

確定だな。

さて、取り調べだ…

「素直に話せ。」

話さないのなら…お前等の飯はDCSになる。  
明日から武将としても頑張れるぜ?」

「な、何でしゅか？」

それは…」

怯えながらも聞いてくる朱里。 勇気あるな。

「一言で言えば、筋肉生産料理だな。」

明日から筋肉ダルマだ。」

「「すいません。隠してました。」「」

やっぱり筋肉は嫌か。

俺も筋肉ダルマのロリキャラは嫌だけど。  
想像するな…!!!

至 田風なロリなんて!!!

「お姉ちゃん…御免なさい…」

「？」

で、誰？紹介してくれるのは。」

「えつと…」

「ここ…ね。」

来たのは宿屋。

どうやら、徐庶がいるらしい…

あれ？ジヨ サン・ジヨースターだっけ？

まあ、いいや。

「すいませーん。

ここにジヨジヨって奴居ませんか？」

「誰？」

冷やかしなら帰りなよ総長さん。」

「いや、真面目なんだけど…」

…いきなり、女将さんに追い返された。

なんか、町でも総長が定着してるし…

チヨクシファイヤーの事もあり、一気に有名になったんだよな…

「徐庶って娘の事なら今は居ないよ。」

「あー、分かりました。」

それじゃ、帰ります。」

居ないか…

また明日だな。

「あれ？どこにいたのさ？

お客さん来てたよ。」

「すみません。町を見ました。

…雛里ちゃんかな？

仕事忙しいのに…」

「いや、南郷さんだ。」

「えっ！？えっ！？」

翌日

また、宿へ

少し早めに午前中だ。

「いよつ女将さん

D O居る？」

「…誰か知らないけど徐庶なら多分居るよ。」

見てくるから待ってな。」

スッ

「何だろ来た理由って？仕官？いや、もしかしたらけっこ…！…！…！  
っ／／／／

そんなまだあまり知らないのに物事には順序が…

いや、別に不満が有るわけじゃなくて…むしろ望む所だったり…！  
！…！…！…！

ゴロゴロゴロゴロ

パタン

「お取り込み中だったね」

「あーはい。分かりました  
じゃあ、帰ります」

また肩透かしか…

仁…明日まで生きてるかな…

その夜

「お姉ちゃ…何してるんでしゅか！？」

「はわわ…！白雪ちゃん…！宿でそんなお酒飲んだら…！…！」

「別に良いでしよ〜」。

大丈夫らって…

どうしよー！！二日連続で追い返すなんてー！！

絶対に嫌われたあああ！！

もう、仕官どころかあああ！！

「お、お姉ちゃん！！大丈夫でしゅー！！優しい人でしゅから（多分）  
！！」

「そつでしゅよー！！こちらも新しく軍師が必要でしゅから！！  
何なら明日屋敷に来れば！！」

「そつだよね！？大丈夫だよね！？あの人優しいから！！

初めて会った日も…

ーーっ／／／／」

「（あ、何かダメくさい。

…大丈夫でしょうか？）」「

更に翌日。

今度は仕事の都合上、正午に行った。

「吉良 影居る？」

「…あんたの記憶力は病気だね。」

「徐庶なら居るよ。まだ寝てる。」

またか！？

いや、居るなら待つか。

「なら待つ。」

今日はとうとう仁の飯が釘と糞になってたからガチで連れて帰らないとマズイ」

そう。仁が疲れてかなりオカシクなった。

無意識で釘を食うとか…

辛い事があるなら話せよ

相談になら乗るよ。

「分かった。ならここで待ちな。」

待つ許可も取った。

早く起きないかな…

SIDE 徐庶

あれ？今、何時？

日が高いな…

まさか正午！？

マズイ！！

完全に寝過ぎした！！

「おっ、起きたね。」

お客さんが来てるよ。

南郷さん。」

「えっ！？」

嘘！？また来てくれたの！？

やっぱり…重大な事！？

結婚！！！？？

いや、早いつて！！

確かに会えなくて思いが募っているけど！！

無問題だけど！！やっぱりお互いにもっと知り合ってから！！

で、その過程で…

——っ／／／／

「…大分待っているから早くしてやりな」

呆れたような女将さんの声

そうだ！！早くしないと！！

「あ？起きた？」

あの人の声。

嘘！？早すぎるって！！

身だしなみも心も全然準備できてないのに！！

「徐庶入るぜ。」

いきなりで悪いけど俺と来てくれ。」

え？どこまで？

この世の果て！？いや、貴方がいれば私はそれで…！！  
はっ！！何を！？

「…取り敢えず早くしてな」

「はっ、はいつ…！！」

で、徐庶が入った。

真名が白雪>はくしえく

連れていったら仁が泣いて喜んだ。

…そんなに辛かったのか…

その後、白雪が忙殺され新たな世界に入ったのは別の話だ。

三個の零々三顧の礼だから (後書き)

そろそろ、反董卓連合編に入ります。

これからもこの駄文を宜しくお願いします。

月を救え！！反董卓連合編開始！！（前書き）

感想、ありがとうございます。

ご期待に応えられるよう頑張ります。

月を救え！！反董卓連合編開始！！

SIDE 仙刀

「っはぁ！！」

「ツツ！！」

「私の勝ちですね」

「チクシヨオオオオ！！」

「また、負けたアアア！！」

愛紗相手に訓練。

最近、俺の戦い方になれてきたのか連勝している。

最初は勝てるのにさ…初見殺しだから。

「仙刀、愛紗さん！！来てください！！」

緊急の軍議です！！」

呼び出し？白雪から？

白雪はウチ、南郷隊専属の軍師になってくれた。

水鏡女学院では雛里の姉代わりだったらしく、雛里と朱里と仲が良  
い。

だからか皆から頼られる人当たりのいい人、みたいなイメージがあ  
る。

雛里の頭撫でるシーンなんて、完全に姉妹みたいだしな。

その白雪のお陰で、仁の仕事の負担が減り  
最近、無意識に蝨燭を食べるぐらいに回復した。  
…釘と比べたら回復だよ。

しかし、逆に白雪がオカシクなった。  
というのも…

「ハア…ハア…」

「おい、白雪大丈夫か？  
休む？」

「ハア…問題ないよ。  
一つ良い策を思いついたから…」

「策？」

「うん。この仕事は辛い事…  
ならば辛い事、痛い事、苦しい事を快感に変えれば乗り切れる！！」

「バカだろお前！！」

「ああっ！！罵られるのもイイ！！  
…だけど、蔑んだ目をしていないのが…」

「おい！！誰でも良い！！  
黄色い救急車を！！」

…こうなった。

何で事務仕事でMに目覚めるの…

まあ、そんな事より会議だな。

「お？全員集合？」

来たら既にみんな居た。

南郷隊からも仁だけでなく慶と忠もいる。

重い内容かね…？

「白雪さん。ありがとうございます。」

実は今日、袁紹さんから書状が届きました。

内容は…」

話としてはこうだ。

皇帝が…

ヤバい…話に付いていけん。

小難しいから良く分からない。

「…一刀。説明プリーズ」

「お前はこんなのも分からないのか…

要するに、董卓が悪い奴だから皆で倒そう

ということだ。

分かった…よな？」

「不安そうに聞くな。腹立つ。流石に分かるから」

てか、董卓？

…どこかで聞いたような…

話は参加に向いている  
… 何かが引つ掛かる…

「…月の事だな。」

「慶！！マジか！？」

あいつ良い奴だろ！！」

「？どうしましたか仙刀しゃん？」

どうしたもこうしたも無い！！

「月！！董卓の事！！あいつ良い奴だぞ！！

悪いことはしないから！！

そんな話、拒否れ！！」

気絶させ、騙して、馬貰ったのに敵になるってヤバいだろ！！  
俺の方が悪人だろ！！

「そつなの！？なら、董卓さんを助けなきゃ！！」

桃香も乗っってくれる。

止めさせないと！！

「助ける所で無駄だ。」

「仁！？」

何を言うんだコイツは！？

「味方した所で戦況は変わらん。  
我らは無勢なのだ。」

「まだ力が必要…」

「これを機にさらなる力を手に入れるべきだ。」

「おい！！アイツは悪くないだろ！！」

「今は乱世。」

「力無ければ滅ぶ。それだけだ。」

「貴様は桃香や一刀が滅ぶのを望むか？」

「……………」

「連合への参加は決定。」

「ゴメンな、月。」

「でも…助けるから！！」

「そうして、反董卓連合。」

「で、行ったら総大将がまだ決まってないんだとよ。」

「会議中の天幕に行くか…」

「行くのは俺、一刀、桃香。」

「他の人は陣作りだ。」

「面倒なことにならん」

「おーっほっほっほっ！！」

「俺達、帰るから。桃香あとは頼んだ。」

「待つて!!早いよ!!」

…もう、面倒臭さしか感じない…

「そう!!この連合において必要なものは…  
あら?どなたですか?」

入って目についたのは金髪ロール。

ロールのレベルは曹操より遙かに上だ。  
だけど…面倒臭そうだ。

「平原の相、劉備です。」

「北郷一刀です。」

「南郷仙刀。せんちーって呼ぶのもありで」

『……………』

流石、連合。

視線をバリバリ感じるぜ…

「お前バカだろ?天幕でふざけるな」

「真面目だよ。」

外国での初対面の挨拶であるじゃん。この流れ」

「いや、そういうの要らないから」

「まったく、何だよ。フレンドリー加減を滲みださせようと思っただけなのに…」

「とにかく、今この連合に必要なもの…それは何でしょう？はい、その貴方」

気が付いたら指差された。

足りないものね…  
分からないな。

「お前の頭だな。」

「待て！！喧嘩売るな！！」

あれ？マズイこと言った？  
普通な話なのに！！

「……………なら、その貴方…」

「ユアヘッド」

「おい！！喧嘩売んな！！」

「一刀！？何言ってるの！？  
本音だろうけど！！」

「意味が分かりませんわ…  
とにかくです！！必要なのは相応の家柄！！次に…」

延々と続く謎話。

総大将なんてやりたい奴がやれよ。  
とにかくあの話を止めさせよう。ウザイ

「曹操。止めるよアレ。」

髪型が近いのもあるし、通じる所があるだろ？  
何とかしてくれ。」

「アナタ…人を舐めてるでしょ。  
嫌よ、麗羽を止めるのは」

断られた。チクシヨー  
何が悪いんだか…

「おい、一刀。話、進まないじゃねーか。  
どうなってんの？」

「責任を負いたくないんだろ。推薦者としての  
成る程ね…

「なあ、仙刀。何で俺を掴むのか教えてくれない？」

「ここまで来て腹の探り合いだ？  
ざけんなよ…面倒くさい…」

一刀の腕を掴み、立ち上がる。  
そして担ぐ

「ねえ！？何する気！？  
ちよっと止めてエエエー!!」

「いつまでやってんだアアアア!!」

「ククククキヤアアアア!!!!」

そして投げる!!ブーメラン風に!!  
良い軌道だ。

まあ、流れ弾みたいに曹操と褐色眼鏡の人  
バスガイドと金髪幼女にも当たりかけたが良いや。

「仙刀さん!?何してるの!?!」

「いや、ムカついてな」

「ホントに何してるのオオオ!!」

叫ぶ桃香。まあ、大したことないから大丈夫

「仙刀オ!!お前何しやがる!!」

チツ!!使い捨てブーメランが復活しやがった!!

「貴方達!!この名家たる私に何をしますの!!」

「うるせえエエエ!!コイツ殴るのが先だ!!  
後にしろオオオオ!!」

あのバカロールが何か言ってるが知ったこっちゃない!!  
今すべきは、このブーメランの始末だ!!

「ご主人さま！！仙刀さん！！  
総大将決めないとダメだよ！！」

桃香からストップ。  
チツ

「なら、決めるか。」

「一刀とアイコン。」

「よし、イケる！！」

「俺がやる！！」

「なら、俺がするよ！！」

『……………』

……………

「「ノレヨ」「」

『何言ってるの！！！？？』

この流れをシカトとか…  
人として終わってる。

「アナタ達何してるのよ！？」

「うるさいアレの亜種！！」

こんな流れに乗れないような奴が、デカクなれるかあ！！」

バカロールを指差して言う  
全く曹操は…

「これだから、小さいままなんだよ」

「『絶』はどこかしら…」

あ、ヤバイ。思ってた事が口から出た。ま、いいや。

「と、仁が口癖のように言ってます。」

「仁!!どこなのあの子は!!」

姉として教育し直すわ!!」

これでよし。

「そんな事より貴方達が総大将とはどういっことですの!!」

チツ!!面倒なのが残ってやがった!!

「ならもう一回するぜ!!」

俺がやる!!」

「俺がするよ!!」

「待って!!二人じゃダメだって!!」

私<sub>が</sub>やるよ!!」

「桃香!!ここで入るなアアア!!」

台無しじゃねえか!!

三人目に入るな!!

さっきまで空気だったクセに!!

「ああもう!! やりたい奴誰だ!?

やりたい奴がやれ!!

居ないならクジだ!!」

もうやってらんねえ!!

「ゴメン!! 仙刀さん!!

次は空気読むからもう一回お願い!!」

「え? まさかの三回目?」

え、やんの? 正気か?

「俺がやる!!」

「正気か一刀!!

これを三回戦は無い!! やりすぎだ!!  
だけどやるよ!!」

一刀、俺と手を挙げる。

さあ!! ノれ!!

「なら私もだ」

「眼鏡さん!? 何すんの!?!」

まさかの褐色眼鏡が参加!?

「私もよ」

「曹操も!？」

「妾もじゃ!!妾がする!!」

「なら、私も!!」

まさかの超集団ダチヨウ 楽部。  
信じられるか…?  
こいつら…お偉いさんだぜ

「キーンツ!!私ですわ!!」

『どっどっどっどっどっど』

皆、綺麗に揃った。

とにかく決定。

妾がするのじゃあああ!!

何て叫びは知らんよ。

てか、大将決めでコレ

…月なら連合に勝てるんじゃないね?

月を救え！！反董卓連合編開始！！（後書き）

戦パートへ

華雄は生存 できます

馬鹿達の戦場〜泗水閑落とし前編〜（前書き）

バカ騒ぎの回になりました。

ある意味、ご都合主義があります。

ご注意ください。

馬鹿達の戦場〜泗水関落とし前編〜

SIDE 仙刀

総大将が決定。

まあ、最悪な人選のような気が…

言うだけ不毛か…

皆、もう帰る。

作戦は後から知らせるだつてさ。

何故か曹操だけは仁の居場所を聞いてきたが…ねえ、その鎌何？  
持ち歩くのは止めな。

「で、貴方達のせいで、私は総大将になってしまった訳ですが…」

あの金髪、袁紹がまだいたか…

「いや、自分から立候補しただろ？

人のせいにすんな。」

「うわ、コイツに言われたら人間終わりだな。」

うるさい黙ってる一刀。

「くっ！！なら総大将命令ですわ！！

泗水関を落とさない！！」

は？何コイツ？

「おい、俺達ってかなり少ないから。  
落とせてムリだろ。」

髪に頭の栄養吸われすぎだろ。」

ガチでバカだろ…

「問題ありませんわ。」

私に作戦がありますの」

ああ、なんだ。

一応考えあるんだ。

「じゃ、その作戦って？」

「雄々しく、勇ましく、華麗に前進ですわ。」

「……………?」

ゴメン、誰か作戦の意味教えて。

「おい…！もうアウトだ…！帰ろう…！」

「賛成…！」

一刀…！良い事言った…！

コイツは正気じゃない…！

俺達はそのまま帰った。

ダメだろ…その作戦…

「このバカ共が!!」

帰って会議を話したら仁から説教。

…勘弁してくれよ

「そのような策、いや妄言をそのままにするな!!」

しかも最前線!!

自由に動けないなら全滅だぞ!!」

「仕方ないだろ!!」

精神的にキツツいからな!!アレの相手!!」

あんなの相手にしたくないだろ!!

「せめて兵糧なり兵なり奪つ…借りて来い!!」

「奪え!!?何言ってるの!?!」

流石に盗るのはダメだろ!!

「全く…話なら私が通しておく。」

「正気か?アレ…袁紹はヤバイぞ。」

まともに話すのはキツいだろ。

「問題無い。」

私と麗羽は旧知の仲だ。

側近の二人もな。

話せば分かる奴だ。

ただし、付き合うことを要求されるが…」

「この男を殺せエエエ！！」

一刀との心からの叫び。

コイツは殺す…！！

「ご、ご主人さま！？仙刀さんも！！止めてよ…！！」

「止めるな桃香…！！」

男には殺らなきゃいけない時がある…！！

「そうだ仙刀…！！コイツは男の敵だ…！！」

流石一刀…！！分かってるな…！！

「あの姉妹に金髪…！！？」

下手したら側近も入っているとか！？

ハ―レム…！？ふざけんなアア…！！」

「その感じだと、曹操…お前の姉貴も入ってそうだな…！！  
ツンデレブラコン姉貴…！！？」

あり得そうで怖いわ…！！」

ふざけんなよ…！！マジで…！！

チキシヨウ…！！

ギャルゲの友人ポジの気持ちがよく分かるよ…！！

「何だ貴様等…！！大声出すな…！！」

「うるせえエエエ!!」

取り敢えず、さっさと物パクってこい!!」

仁を追い出す。

帰ってくんな、二度と。

爆発しろ。

俺達はリアルで、ハーレムしてる主人公キャラには優しくないからな!!!

「…いきなり大騒ぎね…」

「誰だ？」

急に話しかけられた。

誰コイツ？見覚えがないな。

「急にごめんなさい。

私は孫策、字は伯符よ。」

ゴメン、ガチで誰？

皆、驚いているけど俺は知らないから。

「雪蓮…いきなり入るな。

許可くらいとれ。

私は周瑜、字は公瑾だ。」

「一刀、説明プリーズ

誰か教えて」

誰なのかホントに分からない。

辛うじて周瑜が会議に居たのを覚えているだけ。  
てか、有名人なの？

「はぁ…孫呉の主君と重鎮だ。」

お前、少しぐらい君主と重鎮は覚える。」

まあ、偉い人でいいか。

多分間違いないだろ。

こっちも挨拶するか

「私は劉備、字を玄德と言います。」

「「そしてコイツはこの軍の恥ですって、貴様アアア！！  
喧嘩売ってんのかアアア！！」「」

何て奴だ！！せっかく紹介してやったのに！！

「へえ…貴方達が南郷と北郷ね…」

「「待つて！！何で特定できんの！？」「」

恥で特定！？最悪だ！！

コイツよりマシだろ！！

「あの…孫策殿、用件をお聞きしてよろしいだろうか？  
これ以上我々の恥をさらすのは…」

「「愛紗！？そんな事思っていたの！？」「」

身内からもか！？

俺達って何なの!?

「恥以外の何者でもありませんな。」

「星…止めて…」

真面目な愛紗に言われたのは、かなり響いているから…追い討ちしないで」

俺は一刀みたいな強い心は無いんだよ…  
打たれ弱いんだよ…

「そうね。アナタたちが前曲らしいじゃない。  
提案があるのよ。軍師の人は誰かしら。」

「はい。何でしょうか?」

出たのは白雪。

あの二人よりは適任だな。

朱里と雛里は、はわわ、あわわで噛みまくるのが楽々想像出来る。  
白雪雇ったのは正解だな。

「私達としても武功は必要なの。  
だけど、私達は後ろ…」

「一応あれでも総大将だ。  
命令に背くわけにはいかん。

しかし、手助けなら問題無い上、功も成る。」

………要するに手伝うってことか?

「……分かりました。  
水関攻めで重要なのは相手を出すこと…  
しかし、出した後数が足りずに敗北は避けたいですから組んだ方が  
得策です。」

「どうやら、協力するらしいな…  
多分、大丈夫だろうけど」

「ありがとう  
ふふっ…これで袁術ちゃんに…」

「あれ？ヤバくない！？  
急に黒くなつたぞ！！  
…ホントに協力すんの？」

「さて、戦だな…」

仁が帰ってきて飯、兵、武器を借りて来た。  
チツ！！仁は滅びろ！！  
取り敢えず自由に動けるらしい。

そこで三人の策が光る。

やる事は…  
？挑発し呼び出し  
俺の役目だ。一番の肝だとよ。  
ダメなら孫策が何とかするらしいが…

?引つ張るそして、弓矢

弓は鈴々が指揮する。

引つ張る時には、いい感じの距離を保てだよ。  
面倒くさい…

?擦り付ける

で、付いてきた敵を袁紹、袁術に擦り付ける。

?挟み撃ち

これで倒す!!

のが策。

で、敵は華雄と震。

…戦いたくないけど仕方ない。

出来たら、仲間にしたいな

両方とも楽しそうだし。

それより挑発だ。

…何言つか…?後腐れあるのはマズいし…

「仙刀オ!!出陣だ!!」

慶の声…時間だ…

道具は…あるな。

「よし!!お前等まずは確認だ!!  
戦う時は!?!」

『最低でも二人組!!』

「逃げる時には!?!」

『程々に!!!』

「危ない時には!?!」

『一刀を盾に!!!』

「待てエエエ!!!俺を前に置く理由それ!?!」

今回の戦。

前線は俺達、南郷隊と愛紗、星。

一刀は身代わりだ。

「よし!!!お前等死ぬなよ!!!

一刀以外!!!」

「お前シカトすんなアア!!!

てか、何!?!俺は死ねってかアアアア!?!」

今更言わなくても分かるでしょ。

「あれが泗水関ね…デカイな。」

旗が見える。

董、張、華の字。

やっぱアイツらか…

「仙刀。挑発って、どうする?」

一刀からの疑問。

まあ、当然だな。

「大丈夫だ。しっかり考えがある。忠からの情報では、華雄は気が短いらしい…そこを狙う。」

「分かった。考えはあるんだな。何するかは、聞かないからな。」

「OK!!行くぞ!!」

要塞に近づく…

ここだな…

愛紗、星もいる。

仁、慶もいる。忠は別行動だ。

孫策もいるな…

盾もある。

準備万端!!

行くか!!

「さあ、仙刀殿…どのような挑発を…」

「星、心配すんな。面白い物があるから。」

「一刀!!荷物!!」

「まったく、俺も前か…

はい、これか?」

今回、カバンに良い物を入れた。それは…

「仙ちー秘密道具〜タラララッタラ〜拡声器〜（ドラえん風）」  
だ。

「待てエエエ！！何でそんなのあんの！？」

「学校からパクった〜」

それしか無いだろ。

他にどうするかなんて知らない。

「何で盗ったアアア！？」

てか、どこに隠してた！！」

「いや、寝起きドッキリを企画してたんだよ。

本当はバズーカが欲しかったけどな…

隠し方は真空パツク。

布団とかでよくやるアレだな。」

「何を企画してんの！？」

てか、真空パツク凄いな！！！」

だろ！？俺も驚いたぜ…

「で、仙刀さん。それをどうするのですか？」

「まあ愛紗、そんなに焦るな。さて、

本日は晴天な〜り〜

本日は晴天NOWRE！！

「華雄ー！！聞こえるー！？」

スイッチを入れる。

さて…始まりだ！！

「そんなの返す訳が…」

「仙刀かー！？そうだなー、良い天気だー！！」

「せやなー！！」

「返した！？」

よし！！華雄が反応したな！！

このまま畳み掛ける！！

「あー、あー、董卓軍に告ぐ！！

貴様等は既に包囲されている！！」

「全然してないけどね。」

「そして、貴様等はもう逃げられない！！

何故なら俺が来た以上はポヒーン！！だからだ！！」

「ハウリングうるさい！！

止める！！」

「更に、ポヒーン！！ヒュイ！！ヒューン！！となるー！！」

「」「」どうなるの！？全然伝わらない！！」「」

「諦めてキューインしろ!!」

「最後、口じゃん!!ムカつくから止める!!  
てか、何で拡声器使った!!」

「なんか、刑事ドラマみたいなヒューン!!になるじゃん。」

「こつち向いて話すなアアア!!」

マジでウルサイ!!」

チツ!!出てくる気配がないな!!  
一刀がうるせえだけだ。

「せんちー、何しとるんや?」

「…分かる奴はバカだ…」

霞と華雄は動じてない。  
なら…!!

「よし!!お前等!!」

最終手段だ!!セツト!!」

「何を!?!」

『押忍!!総長!!』

全軍右手を突き上げる!!

良い流れだ!!

「あれ？愛紗と星も！？俺だけのけ者！？」

「一刀は無視！！今は邪魔だ！！」

「さあ、やんぞ！！華雄！！華雄！！」

『華雄！！華雄！！』

「そこ逆だ！！それだと雄華になる！！」

「あ、分かった。

分かる当たり、俺もバカか…」

よし！！一刀も乗るな！！

「「華雄！！華雄！！」」

『華雄！！華雄！！』

「貧乳華雄！！」

「オイ待てや」

『貧乳華雄！！』

「え？続行！？愛紗は！？」

止めないの!？」

「仙刀オオオオ!!」

貴様アアア!!言つてはならんことを、よくもオオオオ!!」

「華雄!!落ち着きいや!!」

相手の策や!!」

チツ!!まだとどまっているか!!」

「仙刀!!マズいぞ!!」

曹操が動いてる!!」

ハあ?

仁からの報告。

取り敢えず兵には続けるように指示を出す。

しかし、何が…

「何で動いた?」

「分かん。」

精々、さっきの所の>華雄<を姉の真名にただけだが…」

謎解明。原因これだ。

「お前、何やってんの!？」

曹操は気にしてるの!!」

あの二人と比較して!!」

弟ならそつとしいてやれよ!!」

「…そうであつたな。私の浅慮だ。  
確かに豊乳のために涙ぐましい努力をしていたな。  
結果はアレだが…」

そうか…そんな事が…

大丈夫！！努力は無駄にはならないよ！！

暖かい目を曹軍に向ける

…ん？

「あれ？曹操の動きが激しくなつたな…」

「お前等のせいだろオオオオ！！何やってんの！？  
敵より先に仲間にやられるとか冗談じゃない！！」

まさか、そんなわけない。

仁、南郷！！殺してやるんだからアアア！！

何てのは風の音だ。

気にする必要はない。

「仙刀オオオオ！！貴様アアア！！」

何てやってたら華雄が来た！！

作戦開始だ！！

馬鹿達の戦場〜泗水関落とし前編〜（後書き）

開戦まで長い…

次回で泗水関編を終わりにし、虎牢関へ行けたら良いのですが…

バカ共の戦場〜泗水閑落とし後編〜（前書き）

VS華雄!!

グラップラーオリ主なんてタゲあるし、戦わないとマズいからな…

## バカ共の戦場〜泗水閑落とし後編〜

SIDE 仙刀

「お前等走れエエエ!!! 全力疾走だアアア!!!」

「あああああ!!! 畜生!!! 体育の長距離走、真面目にやるんだったアアア!!!」

今、俺達が全力疾走なのは理由がある。  
それが…

「仙刀オオオオ!!! 貴様アアア!!!  
逃がさんからなアアア!!!」

華雄がヤバイ!!! マジ切れだよ!!!  
霞!!! もう少し抑えていてもよかつたんじゃ!?

取り敢えず今は作戦? のため、誘き寄せているけど…  
やったら速いんだよ!!!

「くっ!!! 流石は勇将にして猛将!!!  
べつたりと質の良い軟膏のようについてきますな!!!」

「星!!! 違う!!! あれは松ヤニだ!!!  
もしくはゴキブリほいほいでも可!!!」

ガチでそんなぐらいべつたりだ。  
頼むから離れて!!!

「仙刀オ！！無駄話してる場合じゃない！！  
追いつかれるぞ！！」

「分かってるよ一刀！！」

「愛紗！！鈴々はどこだ！？早くしないとヤバイ！！」

「あそこです！！」

「居た！！よしイける！！」

「今なのだ！！」

「イーチ、ニー、サン」

「ッダーアアア！！」

「乗るな仙刀オオオ！！」

「てか、早い！！最悪だアアア！！」

「仕方ないだろ！！あの流れは言いたくなるから！！」

「大丈夫です、ご主人様！！」

「全力疾走を維持すればぴったりです！！」

「勢いを落とすな！！走り続ける！！」

「愛紗の指示だ！！」

「なら、イけるな！！」

「危ねエエエ！！…乗り切ったか！！」

「お前、何やってんの？」

余裕だからあんなの」

いーいタイミングだった。

「…仙刀殿。背中に用心なされよ。」

「は？…あれ？刺さっている！？え、何で…！」

マジか！？勘弁してよ…！」

全然ダメじゃん…！」

「ワハハハハハ…！ザマ見る仙刀オ…！  
調子に乗るからだよ…！」

ウゼエエエエ…！」

コイツは殴るからな…！」

「…ご主人様。頭に…！」

ん？あ。

「嘘！？頭に刺さってる！？え？マジで…！」

あ、何か気付いたら痛くなってきた…！」

「バカだなお前…！刺さってやんの…！  
それにイタイのは元からだろ…！」

コイツ本物のバカだ…！」

味方の矢が刺さっていやがる…！」

「…バカですな。五十歩百歩ですぞ。」

「星、言うな。あの人達の頭はアレだからな…」

失礼な

「みんな！！大丈夫！？」

「ダメだ！！バカが…って八モんなアア！！」

「大丈夫でしゅね…」

取り敢えず本陣に着いた。

きつかった…！！

今は作戦？

擦り付けは成功！！

そして…

「斗詩！！華雄が来たぜ！！」

「分かってる！！姫様に…！！」

「お前のせいでエエエ！！」

「きゃあああ！！」

「ん？何か…」

どさくさ紛れに袁紹にバックドロップをしてやった！！  
あんなに走る事になったのも、前線に置いた袁紹がバカだからだ！！  
しっかしよ、誰も止めなかったな。

「さあ、皆しゃん！！最終段階でしゅ！！頑張りましょう！！」

離れの激励。…正直、気が抜けるような…

「仙刀…怪我、しないでね」

「ん、白雪。大丈夫だ。」

白雪からの何か良い。

こういうのが…

「あ、しても舐めると命令されたら、喜んで舐めるから…足でも良いよ。」

「まだ、頭がイッてるのかよ…」

アウトだ！！何かMキャラが定着した！！

「仙刀。関はどうする？」

そうだな…

「攻め落とす余裕はありましえんから、他の軍が…」

朱里が返す。

ふーん…何もしてない奴らが…ね。

「ハナツから渡すつもりは無い!!お前等!!」

そう、これは仁が考えた策だ。

「ハッハー!!泗水関俺達がぶんどつたア!!」

「中々の策にござるな!!」

「フン、空城を取るなど手柄とは言わんな。」

「よし!!制圧!!」

「『『『『『『『』』』』』』』」

忠の別行動。

それは伏兵…裏に回り、空になった泗水関を取るためだ。

慶と仁も隙をみて突入。

霞は華雄が出たら引く可能性があったらしい。

だからこそその策。

命懸けだが、やるといって聞かなかった。

本当に成功するなんてな…

流石は仁。頼れるな!!

「さて…お前等!!華雄に当たるぞ!!この戦の手柄を総なめだア  
アア!!」

今、華雄は袁紹と袁術軍の中で大暴れしている。

愛紗達より早く接触しないと…

「仙刀オオオ！！どこだ！？ドコニイル…！！」

あそこだな。

…ヤバイ何かに進化…てか、人が成ってはいけない何かになってい  
る…

めっちゃ帰りたい。

「…ミツケタゾ…」

うわ！！見つけた！！

おい！！くるな！！頼む！！お菓子あげるから！！

「死ねエエエ！！」

斧を振り上げ迫る華雄。

殺気が凄まじい。

俺のせいなんだろうけどさ…

「ツツ！！」

化猫で受ける！！

重い！！かなりの威力だ！！

「ツハア！！ヤア！！」

連撃！！あの斧振り回して大丈夫とか力ありすぎだろ！！

忠はこんな奴に勝ったってのかよ！！

「ハツ！！」

辛うじて受け流す!!  
下段蹴りを入れる!!

「ッ!! ヤアアアア!!」

入った!! だけど、ひるまねえ!! まだ斬りかかりやがる!!  
クソがッ!!

上段斬り狙いか!!

「ッガッアア!!」

抑える!! なんとかこらえるんだ!!  
目の前で交差する化猫。

そこに迫る斧。

つばぜり合い!!

パワー勝負だ!! マズいだろうが!!

「喝ッッッ」

「んぐう…!!」

前蹴り!!

空手の基本の型だ。

今まで何千何万ダースとやってきたんだ。

狂いはない!!

そして、パワー勝負を切り上げ間合いを取る。

いくら全力で気で強化してもパワーはキツイ!!

パワー勝負に関しては氣の量の差がはっきりでる。

いくら回転をよくしても、いくら一点集中させても、天性の量には勝てん！！

「仙刀オ……！気にしている事をよくも……！！許さんからな……！！」

マジかよ……良いトコに入ったのに……  
そんなに恨んでいるの？

「まだイケるのか？

勘弁してよ……結構会心だったんだぜ、さっきの蹴りはよ。」

「うるさい！！アレは許さんぞ……！！あの集団は……！！  
あの恨みを晴らさんでは死ねん！！」

あ、やっぱり恨みのベクトルはあれね。  
俺は楽しかったけど

「なら、来いや。受け止めてやる。」

「そうか……コロシテヤルカラナ……」

あれ？進化してない！？

何でこのタイミングで進化すんの！？

ポケン！？ヤバイ！！

どこだBボタン！！早く進化キャンセルを……！！

「シネエエエ……」

「ヤバイ……その声はヤバイから……！！」

華雄の怖い声！！

仙刀の防御がぐんつと落ちた！！

てか、何！？

これはゾンビですか！？

「イイエ、ケファイアダアア…」

「何でその返しができるんだよ！！  
つて斧がアアア！！」

油断した！！

やべえ！！

辛うじて抑える！！

「取り敢えず寝ろオオオ！！」

上段蹴り！！狙いは顎！！

「ツガ！！」

崩れ落ちる華雄。

何とか勝ったな…。

たしか、勝つたら…

「敵将華雄！！南郷仙刀が…何だっけ？  
最後、締めるやアアア！！  
とか、突っ込まれた気がした。」

「…ん？」

「お、起きたな、華雄。」

あの後、華雄は俺達の陣に連れ込んだ。

そして、治療。

ケガは少ないのにはホツとした。

そうしたのにも理由がある。

「なあ、聞きたい事があるんだ。

月が悪い事してるってマジか？

仁からの情報も少ないから分からないんだ。」

「月様が悪政などするわけないだろう！！」

やっぱりな…

となるとこの連合には裏があるな。

あとは…

「分かった。なあ、華雄。俺は月を助けたいんだ。

かなり世話になったしな。だから、助けるために力貸してくれ。」

華雄は、ウチに居た方が良い。

この説得に関しては皆に一任された。

「何だと！？貴様も月様の敵ではないか！！

後で処刑するつもりだろう！！」

「しない！！それ以前に、俺達が助けないとマジで月が処刑されち

まう！！  
助けるためにお前が必要なんだよ！！」

あんだだけ世話になりながら処刑されるの黙って見るなんて出来るか！！

「頼む！！力貸してくれ！！」

土下座して頼みこむ。

月を助けだした後を考えても華雄は居た方が良い！！

…まあ、仁の考えだけどさ

「…本当に月様を助けるんだな。」

「約束する。」

真っ直ぐ華雄の目を見る。

嘘はつかない。

「…分かった。協力しよう。」

だが、助けた後は私は月様に従うからな！！」

「ああ。それで良いよ。」

華雄ゲットだぜ！！

後は月を助けるっと。

でも、その前にだ。

「なあ、そっぴやさ。」

霞とお前ってさあその後、恋に勝った？」

「いや、一度もないな。いつか、私が勝つぞ!!」

華雄の宣言は正直、どうでもいい。

…恋と戦うのか…

ヤバイな。

本気で恐い。

バカ共の戦場〜泗水閑落とし後編〜（後書き）

宣言通り華雄参入！！

何故か仙刀がイジるシーンだけしか、イメージできない…  
華雄をダシに一刀、桃香を振り回したいんだけどな…

意見、要望がありましたら感想にお願いします。

戦後処理〜緩い話だけ〜（前書き）

緩い話だけです。

ああ、コイツ等バカだと思って頂けたら幸いです。

戦後処理〜緩い話だけ〜

一つ目　〜荒ぶる霸王と…〜

SIDE 仙刀

華雄の説得に成功し、白雪に薬膳料理を運ばせ外に出ると…

「仁！！南郷！！あなた達殺してやるんだからアアア！！！」

「お止め下さい！！華琳様！！ご自重を！！！」

「止めないで、秋蘭！！！」

仁には姉として再教育しないとイケないの！！！」

「なら絶を振り回さないで下さい！！！」

「だったら春蘭！！二人を斬りなさい！！！」

「はい！！分かりました、華琳様！！！」

「ほう…春蘭…。やれるならやってみるがよい。」

「仁様！！申し訳ございません！！！」

「ふうん、春蘭…。私の命令が聞けないのかしら…」

「春蘭…。やれるならやってみるがよい。」

「え、え〜と、その…あの…」

「春蘭!!」

「しっしょオオオ!!」

うわ、何コレ?

「おい!!仙刀!!お前の挑発のせいだぞ!!責任とって仲裁しろ!!」

「師匠!!戦勝おめでとございます!!」

「よ!!風、久し振り。元気?」

アレを抑えるより風の相手だな。  
一刀なんてどうでもいい。

「おい!!アレをシカトって本気か!?  
かなり迷惑なんだけど!!」

「ただの姉弟喧嘩だろ?大丈夫、大丈夫。  
なあ、風。」

「はいっ!!師匠が言うので問題ありません!!」

「夏侯惇、半泣きで狼狽してるじゃん!!巻き込まれて!!  
てか、仙刀が師匠ってかなりダメだろ!!人生棒に振るよ!!」

うっさいなー、まったくよー。

風は直ぐに分かってくれたってのに。

「まったく。失礼だな。  
きつちり、教えていたっての。」

「はい！！師匠！！」

ほら見る。

「そうなら良いけどよ、それよりアレ。仁と曹操。  
夏侯姉妹もキツそうだし、止めてやりなよ。」

うーわ、一番嫌な仕事じゃん。

・・・

「よし、凧。組み手の相手するから。」

「はい。お願いします、師匠。」

結構時間空いたからしつかりやらないとな。

「待て、普通にどっかに行くな。」

引き止められた。

せつかく楽しい組み手の時間になるはずだったのに。

「何だよ？」

「と・め・ろ。愛紗も止められないから俺達には無理だから。」

チッ！！ウザイ。

凧と組み手やってて良いだろ？  
いつか終わるって。

「普通にどちらか疲れて終わるから。それまで見ていたら？」

「やだよ。あの二人の口喧嘩ひどいからな。」

それより、お前が責任者として斬られる方が早い。」

「死ねと？」

何でたかが口喧嘩を止めるのに、斬られなきゃいけないんだよ。

「なっ！？師匠にそのような物言い！！許さん！！！」

「お、凧。やっちゃえ！！！」

さっきの一言で凧が反応。

止めないよ。楽しくなりそうだし。

「え？ちよっと待って…ぎゃあああああ！！！」

あ、いい蹴りだ。

「いい形だな。毎日基礎の型やってる？」

「はい！！ありがとうございます！！！」

褒められたのが嬉しいのか満面の笑みの凧。  
片手にある赤いボロ雑巾は気にしない。

「何でお前そんな余裕！？止めるよ！！」

「口をきくな！！」

追い討ち。

手刀もいい形だ。

あ、一刀が動かなくなっただな。

「よし、凧。それ捨てといて。誰か処分するから。」

「はい師匠！！分かりました！！」

一刀を投げ捨てる凧。

いい顔してるぜ…！！

「なら、春蘭！！南郷を斬りなさい！！」

「やってみる。許さんからな。」

「ど、どどどどうしたら…」

「ああ、姉者は可愛いなあ…」

俺にも飛び火してきた。

流石に止めるか…

「仁。そろそろ止めとけ。

曹操も仕事があるだろ？」

なるべく何事も無いように止める。

流石にそろそろ迷惑だ。

「だ、そうだ姉よ。私にも仕事がある。今日はここで終わりだ。」

明日もやる気か!?

そんな事は言わない。下手に再燃したら笑えない。

「…そうね。なら、私達は帰るわ。行くわよ春蘭、秋蘭。」

よかった…終わった…

尊い犠牲の元に…

「そうだ。早く帰って日課の無意味な豊胸体操をしてろ。」

「仁!!取り消しなさい!!いつかは大きくなるの!!」

「やってる事は否定しないんだ!?!」

二つ目 く大反省会

SIDE 仙刀

曹操達が帰った後…

「さあ、仙刀さん。何か言う事はありますか?」

愛紗に捕まった。

で、今は縄でグルグルに縛られ正座している。

目の前では愛紗、朱里、雛里が仁王立ち。

・・・

「…なあ、俺何か悪い事した？」

「」「逆に、良い事した？悪い事しかしてませんよ。」「」

「…そんな？何やった俺？」

そんなにボロクソに言われるような事はしてない！！  
多分！！

「策の独断専行！！勝手に突撃！！曹操さんへの挑発！！理由としては十分です！！」

怒鳴る朱里。…そんな怒られる事？

「でもよ、華雄を捕まえただろ？それでチャラにならない？」

「なりませんよ！！軍規を何だと思っているんですか！！」

「決まりは破るためにある！！」

「星！！石を持って来てくれ！！仙刀さんにのせる！！」

え？マズいの？どこが？

「とにかく、軍規は守り策は事前に私達に相談して下さい！！  
でないと犠牲が増えます！！」

「…分かりました。すいません。」

流石にアイツ等を多く死なせたくないからな…

「分かったなら良いんです。その反省をわちゅれないで下さい。」

「ブフツ！！」

「……………笑いましたね？」

いや、仕方ないだろ！！

何かシリアスな時に噛まれると笑うだろ！！

「…子供っぽいつて思いましたね？」

「いやいや、思っていない！！」

必死で否定する。

何か、朱里が拗ねた子供のような…

「石を！！仙刀さんに抱かせます！！」

ヤバイ！！正座にそれはないから！！

「なあ！！朱里！！お前程大人っぽい子供はそうはいないよ！！…つてニギヤアアア！！」

「まずは一枚ですね。」

褒めたのに！！頑張つて褒めたのに！！

「朱里、鞭、蠟燭、三角木馬、首輪もあるよ。使う？」

「どこから湧いた白雪！！てか、何のためにそんな物を持って…！！  
オイ！！顔を赤らめるな！！」

酷いラインナップだ！！  
戦場に持って来るなよ。

「じゃあ、蝋燭を…雛里ちゃんは三角木馬の準備、愛紗さんは…鞭  
をお願いします。」

「使うなアア！！てか、一刀、慶、忠、仁、白雪！！助けてエエ  
エ！！」

縛られ正座した状態でそんなアイテム使われるとかマジ無い！！

「分かったよ。ほら、外すから待ってて。  
良い悲鳴だったのに…。」

石をどかして、縄を解く白雪。

…助かった…！！

最後の一言は聞こえないよ、全くね。

「白雪エエエ！！反省したのに石のせられたアアア！！」

白雪の膝で泣く。アレは本当に痛いから。

「大丈夫だよー。フッフ…随分としおらしく…このまま天幕に連れ  
込んで…ジュルリ」

あ、貞操がヤバイ気が…

「あれ？白雪？何で抱きしめ…逃げられない！？力強いな！！あれ？何処に連れて…おい！！鞭とかは捨てる！！」

コイツはヤバイ！！

「あれ？何この天幕！！ちよつま…！！」

あの後、何とか脱出。

貞操は無事だ。

…白雪、あの組合せはないから…

三つ目 ウホッ！！いい踊り！！

「なあ…」

「どうした？」

「コレ。慰安としてやらないか？」

「…やるか」

SIDE 桃香

私達は無事、泗水関を占領した。

今回も私は後ろに居るだけだった。

…ご主人さまは仙刀さんに拉致されて前に居ただけ。

最近ちよつとご主人さまと仙刀さんは凄い人達だと思う。

仙刀さんは最初、ムチャクチャだったり極悪人と思っていたけど、最近はおバカな人で変な人だと思う。

…やっぱりダメな人かな？  
でも、さっきの戦は凄かったよ！！…後で起こられていたけど…

ご主人さまは一番凄いなと思う。

仙刀さんに突っ込んで声も枯れなかったり、頭がハゲなかったり、  
まともに相手してるあたり…

あれ？何かおかしいかな？

まあ、とにかく凄いなと思うよ。

そんな事を考えていたら、外から兵士の人達の騒ぐ声がある。  
どうしたんだろう？

気になって外に出ると…

「一刀オ！！準備出来たア！？」

「OK！！一緒にヤル奴も大丈夫だってよー！！仙刀はー！？」

「ああ、スピーカーにつないだー！！」

お坊さんが着る袈裟を着たご主人さま。

上下が繋がった青い服を着ている仙刀さん。

白いピッチリした服を着た人。

裸に禪と帽子の人。

仙刀さんが言った、もひかんで自重と書かれた禪の人。

…何する気？

「イイのかい？ホイホイついて来て…俺は分からなくなっただって躍らせる男だぜ…？」

「…はい、俺達…総長の踊り好きですから…」

「嬉しい事言ってくれるじゃないの…それじゃあ、今日はとことん踊るからな」

「お前等自重しろ。」

…凄い不安なんだけど…

「さて、と。それじゃあ、ミュージックスタート!!」

手元の何かをいじる仙刀さん。天の国の道具かな？

そして流れる音楽。

あ、踊りで楽しませるのかな？

二人とも、兵士の人達の事考えて…

「……やらないか?」「」「」

無いよね!? 何してるの!? たしかに踊りだよ!! キレも凄い良いけど!! ただ歌が!!

「え? 何して!! 止めっ…」

「いやいや劉備様。止めたらダメでしょう。」

「そつですぞ。総長も皆の事考えているんだ。」

「ヒャッハー!! 総長の悪ふざけだー!!」

観客の人達に止められる。私よりあの二人を止めて!!

「桃香様!! 一体何が!!」

「星ちゃん!!あの二人止めて!!」

よかった!!星ちゃんなら…!!

「趙雲様。総長秘蔵のメンマが…。」

「分かった!!桃香様!!では!!」

南郷隊の人からの伝言。

…誤魔化すための方便じゃないの?

居なくなるの早いよ星ちゃん…

そして、いつの間にかサビに入っている曲。

早く止めないと!!

「ご主人さま!!仙刀さん!!そろそろ止めて!!」

「ド変態と ホモ ONE NIGHT!!」

止めたいと思わない!?

いや、もっととんでもない事を言ったような!!

「はわわ…!!」

「あわわ…!!」

「しゅ…!!」

頼ろつとして止めた。

仙刀さんに睨まれて抗議しなくなるとかは考えてないけど、とにかく

く止めた。

「お前、俺の…」

「その先言っちゃらめエエエエエエ！！」

仙刀さんの発言に上乗せ。上手く被せた…！！

「腹の中がパンパ…」

「ご主人さまも何してるのオオオオオオ！！！」

この二人ダメだ！！

天の国ってどうなっているの！！

「……やらないか？」「……」

曲を全部やったバカ二人。

もう、二人共バカ扱いで良いと思う。

…本物の御遣い様は何処にいるんだろう？

…その後二人共、愛紗ちゃんと白雪ちゃんに怒られていた。

「二人共、天の御遣いとして毅然とした態度で…！！」

「愛紗、何それ？天の御遣い？初耳だよ。」

仙刀さんの上に石が三枚ぐらい乗ってたけど、同情する必要はないよね？仙刀さんには。

「フフツ…楽しくなってきたな。」

「何で蝋燭！？垂らすな！！熱い！！この年でSMとかしたくない！！」

「ご主人さまにも要らないよね。」

あの二人にはマトモになってもらわないと。

戦後処理〜緩い話だけ〜（後書き）

どんだん仙刀がオカシクなる…  
気が付いたらこんなだ…

虎牢関へ！！（前書き）

導入部です。

正直読み飛ばして構いません。

虎牢関へ！！

SIDE 一刀

「あれが虎牢関ね…」

俺達は泗水関を落として虎牢関に進んだ。  
そこにいるのが…

「籠もるのが張遼、陳宮…そして呂布。…厳しい戦になりますな。」

そうなんだよな…

そういう、ヤバイ所なのにさ…

「虎狼関？うわ、なんか厨二臭いネーミングだな。」

緊張感0なんだよな、このバカは。

「ええ、さらに別名を難攻不落極悪非道七転八起虎牢関と言いまし  
ゆ。」

…

「仙刀。医者を呼んで。」

「むしろ、病院が来いだろコレは。」

「頭がオカシクなったわけではありませんえん！！」

ダメか…朱里も仙刀のバカが伝染したな…。

辛うじて残ってた緊迫感がガラガラと砕けた気がするな。

「で、私達は後ろにいるんだよね？」

「はい、今回は後衛です。前は袁紹さんと曹操さんの軍になります。」

俺達が泗水関では華雄捕り、泗水関落としの大手柄をたてた事に焦っているのか袁紹は前に行った。  
その結果…

「仁さんからの情報だと袁紹軍が前に張り付き、その結果曹操は上手く動けないらしいよ。横にいるってさ。」

そう、結局上手く攻める事ができないでいる。

「白雪。他には？」

「報告書には延々と姉…曹操さんへの愚痴が綴られているよ。」

「何故報告したし。」

仁…。仕事で何やってるんだか…。

「でもさー、ずっと後ろなのはな…。アイツ等と交代できないかな？霞とか恋とか引き込みたいしさ。」

仙刀の提案。それはさ…

「うーん、厳しいよ。」

一応命令されているんだから。前が危ない時に救援が一番有り得る

形かな。」

白雪の考えは正当だ。

正直、前に行く意味ないと思う。

「あーあ、ならいざというときのために作戦会議でもするか。」

心底退屈そうな仙刀。

暇潰しで作戦会議をするんだろう。その目論見を…

「策はもうあるよ。」

白雪は一撃で叩き潰した。

「なんだよ!!せつかくの暇潰しがアアア!!」

「遊びで作戦を作るな!!」

「せつかく一刀を振り回すためにやろうとしたのによオオオオ!!」

「……理由それ!?!」「」「」「」

暇潰しならそんな事をする奴だからな…

そもそも暇なだけでハンドメイド爆薬作るうとしたしな…花火からあれが校庭で…いや、思い出したくない。

コイツが絡んだ事に碌な事はない。体育祭とか文化祭とか修学旅行とか…。

あれ?学校行事がコイツのバカしかない気が!?

「で、策だけど…朱里と雛里と話し合って、もし呂布と戦うなら最

低三人組で当たる。将が三人組ね。」

「なんだと！？それでは！！！」

愛紗が怒鳴る。

受け入れられないだろう。性格からして。だけど…

「愛紗。それだけの差があるんだ。仕方ない。」

「はい。そうしないとかなりの被害を受けます。

下手すれば連合軍が負けましゅ…」

これが呂布。三國志では張飛、関羽、劉備の三人でやっと追い返した。

桃香は戦力にならないだろうから代わりに星が入るのが妥当な所だ。

「当たるのは鈴々、愛紗、星の三人だよ。

仙刀を含む南郷隊は防衛。これが私達に出来る最善のかた…」

「申し上げます！！虎牢関から出てきました！！

現在、苦戦中です！！至急救援を！！！」

良いタイミングで入る伝令

…来たのか。呂布…

虎牢関へ！！（後書き）

次回はキツイです。

下手しなくても笑える所殆どないです。

…元から少ないですが。

次回に仙刀VS呂布！！

VS恋々深紅な誓い々（前書き）

仙刀と一刀がちよっと成長する話です。  
やっぱり悪ふざけが少ないな…

## V S 恋〜深紅な誓い〜

SIDE 仙刀

「…マジかよ…」

すぐに愛紗達は救援に向かった。

袁紹軍の中にあるのは『深紅の呂旗』…呂布…恋がいるのか…

霞は曹操の方と当たっている。曹操は上手く立ち回り苦戦中という感じではないな…

となると恋だ。袁紹軍はかなり危ない。

救援は俺達。虎牢関は孫策が向かっているからいつか落ちる。それまで袁紹は持つか…？

で、救援に行き。三人共恋と戦っているが…

「くっ…!!」

「ハッ…ハッ…!!」

「強いのだ…」

「…お前達、強い…。…でも、恋より弱い。」

子供扱いかよ…

愛紗、星、鈴々の三人を…

…よし。

「誰か!! 抜刀すんの手伝って!!」

化猫は刀が十本くつついた手袋だから、抜くのに時間がかかる。

「「「おう!!」「」」

南郷隊のメンツはしつかり反応してくれた。

そして、一斉に鞘を掴み…

「あれ?頼む!!ゆっくり抜いて行ってね!!」

「「そりゃアア!!」」

「ヒヤッハ!!」

一気に抜きやがった!!

「危ねエエエ!!戦う前に怪我する所だったじゃねえか!!」

マジで扱い難いからなコレ!!本当にうっかり足とか腕を斬りそうになるから!!

「おい!!仙刀!!何を…」

「ちよつと行ってくる!!」

「おい!!無理だ仙刀!!呂布だぞ!!」

「俺、歴史とか強さとか知らねーからー!!」

助けに行っただ方が良いよな絶対に。

「恋!!」

「…せんちー？」

こっちを見た。

この隙に三人には下がってもらおう。

俺はその時間稼ぎ。それか孫策に砦を落としてもらいたいけどな。

「…そいつらに止めを刺すな！！その前に俺と戦えエエエ！！」

声が震えているのを誤魔化すために叫ぶ。

…もう、後には引けない

「仙刀さん！！無理です！！」

「うるさいな！。怪我人は下がってなさい！！」

愛紗の警告は無視！！

今さら無理だからって下がれるか！！

「…行く…！！」

きやがった！！

この国で一番強い猛将…三国無双…鬼神。

色々話は聞いた。…でもよ俺は海皇だ。下がる気は無いッ！！

「ッッ！？」

突きだ！！疾い！！霞や星よりもッッ！！辛うじて避けて蹴り！！

「ラアッ！！」

「…」

普通に蹴りは取られ…

「…ハッ…」

回されるッ！！投げだと！？

そして振り落とされる柄

内臓狙いかッッ！！

「…ゲホッ！！」

辛うじて防ぐが受け身を取れずに地面に叩きつけられる…！

胃のなかが逆流しそうだ…！

「…終わり」

振り落るされる刃。

化猫で防ぐ…！！

目の前でクロスさせ、守るッ…！！

金属同士がぶつかり高音

少し…恋の表情が変わったか…？

「そいや」

腹に蹴り…！！

防がれても無問題…！！

間合いを取ればいい…！！

「…せんちー強くなった…？」

「当たり前だろ…今の俺の戦闘力は53万だよ。」

「…………？」

いや、突っ込んでよ。無言は無いよ。滑ったみたいじゃん。

「…ちよつとやる気だす…」

構える恋。あれが手加減とか止めてくれよ。走馬灯流れたんだから…  
ああ…

一刀を殴りたくなってきた！！

「チクシヨオオオ！！あの野郎！！」

「…………？」

首をかしげる恋。

分からなくていいよ。個人的な話だし。

「…やるよ？」

「おおアアアア！！」

迫る恋！！さっきより速い！！

「…つた！！」

いなして、貫手！！首狙い！！  
殺す気でいかないと勝てないツツ！！

「…遅い」

柄の払い上げに弾かれる。ならよっ！！

「喝ツツツ！！」

前蹴り！！バックステップで避けられる！！

切り上げ！！刃で防がれるツ！！

「…足…！！」

足払い！？ハツ？

「効くかツツ！！」

足を固め守るツツ！！

倒れないから！！

「…！？…」

「反応鈍いわアア！！」

回し蹴り！！入ったツ！！

「…！？…ハツ…！！」

吹き飛ばす恋。

何回も空手の型はやってきた。

向こうでも。修行の時も。旅の時も。一刀と合流してからも。平原でも。戦場でも！！効かないはずがない！！

「…せんちー…本気でやる」

そりゃ、一撃で倒すのは無理だよね。これで勝てるなら愛紗達が勝ってる。

「来いよ。勝てたら俺が作れる最高の飯食わせてやるよ。」

「…分かった。」

凄い殺気…本気だな…

空気が痺れるようだ。でもよ、一つ分かった。

「お前の本気を倒せないと界皇様には並べない。お前はただの通過点だ。勝つ。」

海皇を本物にするにはコイツに勝たないと。

「…そう…」

間合いを詰める。

戟が当たりそうな間合い。あと少し…

「ハッッ！！」

左の貫手！！刺されッ！！

「フツ!!」

切り上げられる戟。

金属の悲鳴

さつきよりも何倍も澄んでいる。

左手が軽くなる。

「は？」

化猫の爪が…無くなっていた。

そのまま戟は止まらない。

「…は？」

服に赤い一筋の線

そこが熱い…は？

「仙刀オオオオオ!!」

一刀の叫び声。…まさか、切ら…れた？

「……………」

無言のラッシュ。

防ぎきれない!!柄が!!

「呼ツツツツ!!」

三戦!!耐える!!

「ツガアアア…」

響く…当たる時に関節を固定したのか…？

「チツ…やられるかアアア！！」

右の貫手。再び快音。

いや、体からも鈍い音がした。痛い。腕が動かない。

「仙刀オオ！！下がれエエエ！！」

うるさいな一刀。

片腕だから大丈夫だよ。

「…まだやる気？」

不思議そうに聞く恋。

…そんなの

「当たり前だツツ！！」

右がダメなら左！！掌底！！

「…もう、終わり…」

逆に食らった。左耳だ。

肌同士が当たる音…？

左から聞こえない？

左に、何か温かい液が流れる。鼓膜を…？だけど…

「近付けたな…!!」

かなり近い。頭を取り。

頭突き!!

骨同士の鈍い音。

「…痛い…」

…それだけ？

「こつちもな…」

俺は額が割れたのによ…

血が垂れてくる。

「…まだやる？」

「当たり前…」

足に柄。払われる。

地面が向かってく…

「ヲツ…ゲエエエエ」

胃に石突の突き。中身が出てくる。いてえ…。もう、疲れた。動けな…

「恋どのオオオオ!!大変ですぞ!!虎牢関が!!」

ねねの叫び声。

見ると関に『孫』の旗。

「…せんちー。月を…」

「助けるよ。」

「…お願い。…ご飯は後で」

ああ、畜生。チクシヨウ

負けた。情けまでかけられた。

「チクシヨオオオオオオ!!」

完全に負けた。

SIDE 一ノ

「桃香!!止めるな!!このままだと仙刀が!!」

「無理だよ!!愛紗ちゃん達が負けたんだよ!?私達じゃ…!!」

「待った!!あの人は今、武人として戦っているんだ!!邪魔をし  
ちやならねえ!!」

仙刀と呂布の闘い。

回し蹴りが入った時には勝てるんじゃないかと思いきや…ただ  
ど相手は呂布だ。負けて殺されそう。仙刀が殺されるなんて冗談  
じゃない!!ゴキブリ以上にしぶといの!!

「待って!!呂布が引きます!!」

白雪の制止。仙刀は無事なのか!?

「早く担架を!」

「ああ、分かってる!忠!仁!」

「うむ!」

「言われずとも!」

迅速に動く南郷隊。仙刀はすぐに運ばれてきた。

「おい!仙刀!」

「うるせー、鼓膜破れてんだ。静かにしろ」

「うるさい!!無茶すんな!」

「いつ…無茶をした…」

「全部!」

仙刀の無茶に対する怒りと無事に対する安心感が押し寄せる。

…この馬鹿野郎…!!

「おい…一刀。慶、忠、仁、白雪。」

呼び寄せる仙刀。どうした…まさか…

「遺言!?!安心しろ!?!俺が止め刺す!」

「……冗談じゃないから止める!!」「……」

違うの!?

「俺は…もう、負けない!!一刀が桃香を支えて、夢が叶うまで負けない!!海皇を本物にするまで負けない!!」

畜生オオオオ!!恋だろうが誰だろうが、もう負けないから!!」

叫ぶ仙刀。力が入ったのか傷口から血が流れる。

…この馬鹿。

「?どこに…」

「桃香達の所。今、愛紗達を見てるだろ?ちょっと行ってくる。」

「頼む!!仙刀に向ける顔をくれ!!」

桃香達の所に行き、土下座して頼み込む。兵士たちの前だろうが関係ない。

「ご主人さ…」

「その呼び方もいい!!軍じゃ役に立たないから文官として働かせ  
てくれ!!」

このまま手伝いだけするなんて、仙刀に向ける顔がない!!頼む…  
!!」

地面が濡れていく。  
自分が余りに情けなさすぎて。  
何もしてなかった自分が。

「……………」

皆、無言。恐ろしいほど静かだ。  
その静寂を切り裂いたのは

「分かった。なら、朱里ちゃん、雛里ちゃん。お願いね。  
呼び方は一刀：さんでいい？仙刀さんと同じね。」

桃香だった。：ありがとう本当にありがとう。

「あ、私達は今まで通りの呼び方でいいよ。」

そう言っておどける桃香。愛紗達も同じみたいだ。

「ありがとうございます！！」

多分、俺の三國志はここから始まったんだ。  
仙刀に向ける顔を作るために。

SIDE仁

仙刀の容体は死に至るまでではない。無事だ。  
詳しい状況は知らんが。白雪が看護するそうだ。

「フフツ…では…」

「あれ？何で馬乗りに…？ちよっ！？怪我したら舐めるってガチ！？」

「ああ野外がいいなんて…。でも、見られてというのもゾクゾクしてイイ…」

「止める変態！！」

「ああん／／罵倒されるのもイイ…！！／／／」

「おい！！待て近づくな！！ちよっ…なミヤアアアア！！！」

「イイ悲鳴…もつと聞かせて」

「SかMかはつきりしろ！！おい！！また…！！ニギヤアアアア！！！」

私は何も聞こえん。今は情報収集だ。

「他軍の動きは？」

「はっ！！孫軍が関を落とし孫策の陣営は士気高く逆に張遼を捕えた曹軍は意気消沈です。」

「何故だ。」

「戦において、曹操の片腕たる夏侯惇が負傷したからにございませぬ。」

！？春蘭！！

V S 恋々深紅な誓い (後書き)

どうでしたか？

シリアスすると上手くないんだよな…

霸王として〜姉として〜（前書き）

本作、もう一人の主人公の話。  
大分重くなっていました。

霸王として、姉として

SIDE仁

春蘭が負傷。軍の士気が下がる程の…。私には信じられん。

「事実か？」

「ハッ！！」

短い返事。事実…なのだろう。正直様子を見たい。  
…しかし

「おい！！仁！！居るんだろ！？助けてエエエ！！」

「フフフ…」

仙刀も負傷。これで春蘭の元に行けば、私へのあの男の信頼が揺らぐかもしれない。

…ここまで、信頼されたのだ。失いたくない。

「分かった。下がって休むがいい。後の調べは私がやる。」

「ハッ！！では！！」

私の部隊の者も、育ってきた。信頼できる。そして、私も信頼されている。

失いたくない。だが、春蘭も気になる。

…どうすれば…

「じいいいん!!」

「やかましい。何だ」

天幕から出ると

白雪に馬乗りになれ、手を押さえつけられている仙刀……

「ふう……」

「待て!! 帰るな!!」

「大丈夫。空気を読んでくれたんだよ。…さて、このまま…ジュルリ…」

「白雪止めてエエエ!!」

お楽しみであったか。人騒がせな…

「仁マジで頼む!! 言うこと聞くからアアア!!」

…ふむ…

「分かった。白雪、抑える。治療は…してあるな。」

白雪をどかし仙刀を見る。

手足に包帯。左耳にもしてある。腕には添え木をしての固定。…足もか。

重傷だが、死ぬという印象はない。

…博打に出るか。

「言っこと聞くと言ったな。」

「?どうした?」

「…姉の陣に行く許可をもらいたい。春蘭…夏侯惇が負傷したらしい。見舞いたいのだ。」

嘘は吐かない。…どうでるか…

「良いんじゃない?てか、俺も連れて行け。」

「…は?何を馬鹿な事を!!貴様は自分の体を分かっているのか!」

重傷だぞ貴様は!!

「左耳の鼓膜破損に右前腕完全骨折の、不完全骨折が左手、両手の指そして両足。打撲が…」

「そこまで分かるのか!?!」

それで行くとは阿呆か!?!いや、元から知っているが…

「風が心配してるだろうし、戦っていた霞も気になるしな。行こーぜ!ー!」

…この男は裏を考えないのか…このまま姉の陣営に加わるといっ可能性を…

言うだけムダだな。

「て、ワケで仁。肩貸せ」

「知るか。歩くのだな。」

「何者だ!!」

「曹孟徳の弟、曹子廉だ!!通せ!!」

「はい、仙刀だ。凧どこ?あと霞も。」

結局、この阿呆は付いてきた。…止めたのだがな。楽進と霞に用があるそうだ。

「しいいいいしよおおおお!!」

「ドツプラー効果!?!ちよっ!!凧止まれ!!」

「ご無事で何よりです、師匠!!」

迅速に現れた楽進。素晴らしい礼だな。直角に曲がってる。

…後ろにしがみついてボロ雑巾のようになってる李典と于禁は見えない事にするべきだな…。

「呂布と素手でも戦うその姿、感服しました!!」

「ああ、そう…。で、凧。真桜と沙和が…」

「あと、あの戦いに関して質問があるのですが…」

「後ろ気にしろ!！」

「後ろ気付けや!！」

「後ろ気にするの!！」

…首を突っ込むべきではないな。今は春蘭の容体だ。

「夏侯惇はどこにいる。」

兵卒に訪ねる。知ってるはずだ。

「それは…」

「仁様!！」

「秋蘭か…」

丁度良い。秋蘭から聞くとするか…。

「春蘭はどうした!！無事か!？」

「……………」

「秋蘭!！」

声が荒くなる。何故何も答えない!！それほどに…!！

「姉者は…」

「…いい。あの天幕だな。」

軍医が出てきた天幕がそうか…。よし。

「！！仁様！！」

急いで向かう。春蘭…！！

天幕に入り、目に入ったのは…

「じ…ん…？」

隻眼となり、余りに痛々しい春蘭だった。

「春蘭…」

何と言えはいい。…分からない。だが…

「春蘭！！よかった…！！命に別状はないのか…！！」

無事…とは言い難いかもしれないが、生きている。

よかった…本当によかった…！！

「じ、仁！？何を…／＼／！！」

「すまん…。だが、ここまで心配させられたのだ。

抱きしめた所で罰は当たらんだろう。」

「じ…ん…。」

「で、俺は…チツ…！」

「師匠？何が…」

「いや、リア充の匂いを感じてな…チツ…！」

「？」

「なあ…風。疑問感じるトコおかしいやろ…」

「何で…沙和達まで正座して仙刀さんの話を聞いているの…」

「師匠の前だぞ…！礼儀正しくするのが当然だろう…！」

「ウチ等ちやうで…！」

「沙和達は違うの…！」

「うわあああ、じいいいいん…！」

抱きしめたら春蘭は大泣きし始めた。

片目になり、姉と私に嫌われるのでは等と考えていたらしい。

…阿呆が…

「うっ…ぐすっ…」

「落ち着いたか？春蘭、お前は私と違う。姉はお前を必要としている。」

安心しろ。」

段々、落ち着いてきたか…

「…仁。本気で言っているのか…？」

泣き止み顔を上げる春蘭。目が真っ赤だ。まだ、声も震えている。

「華琳様が本当に仁を要らないと考えていると思うのか！？」

「…何の事だ。」

「華琳様のあの言葉は本心では…！！！」

・・・

あの言葉…か。

「私の知る事ではない。…私にも仕事があるのだ。帰るぞ。」

「仁！！！」

天幕から出る。無事なら問題ない。

「…秋蘭…」

出たら、目の前には秋蘭がいた。

「…また、劉備殿の陣にお戻りになるのですか…？」

「違う。南郷隊に戻るのだ。」

「…仁様！お願いします！再び、華琳様の所へ…！！華琳様はもし、戻るのであれば大都督の地位を仁様に…！！」

頭を下げる秋蘭。

・・・

「断る。地位で決めん。」

『士は己を知る者がために死す』…不要と言った次には大都督…。忙しいことだな、我が姉は。」

秋蘭を躲し、仙刀の所へ行く。

「あら、仁。どこに行くのかしら？」

「…姉か。」

しかしすぐには行けない…か。次は姉、華琳だ。

「どこに行くの？」

「私の居場所にだ。」

「どこでしょ？」

「阿呆が。仙刀の居る所だ。」

ここに来たのは春蘭の見舞いだけではない。  
もう一つ…

「ん？せんちーやないの。何しとるん？」

「よっ！！霞！！てか、お前…捕まったの？」

「表現変えるや！！真っ直ぐすぎるわ！！」

「逮捕？」

「悪なつとる！？てか、なんでここにおんねん？」

「凧の様子見」

「師匠！！ありがとうございます！！」

「…。そういや、せんちー。華雄はどないなつた？」

「俺が捕まえた。無事だよ。」

「そつやったんか…」

「お？ホツとした？」

「せやな…。色々心配しとつたんやで。」

華雄もそつやし、せんちーは恋と一騎打ちしよるわ、惇ちゃんはウ

チとの一騎打ち中に片目を射られるし…」

「片目！？じゃあ何、アイツ今は 地独歩！？サインもらわなきゃ  
！！」

「誰やソイツ！！」

「何だと…貴様は神 会を嘗めたツツツ」

「いや、飛躍しすぎやろ！！」

「ハイハイすいませんね。チツ！！」

「アカン…ここでドツイたらアカン…てか、仁はどないしたん？扱  
いが普通やないで。」

「…アイツは曹操の弟だよ。」

で、夏侯惇が怪我したから見舞いに来たってこと。」

「なんやて！！なら、冷苞は偽名やったんか？」

「そゆこと。家出してたんだとよ。」

「…おかしい？」

「何がだ。」

「ただの家出なら偽名は使わへん…それを使うんや  
孟ちゃんとの繋がりがバレたくないってことや…。孟ちゃんとの間  
に何があんねん…」

「…さあ？」

…あーあ、俺が霞と戦えば良かったかね。お前を他の所に取られたくないのによー」

「何や告白かいな？…ホンマ、ウチもせんちーの所が良かったなあ…」

「へ！？」

「ウチ、付き合つたら自分より強い奴がええねん。せんちーは恋と武器壊れても戦ったやろ？ウチにも勝ってる。」

「いや…おまつ！！…チツなら、無理矢理攫うか…」

「ニシシ…ええやないの。ウチ…それでもええよ。」

「ハア！？」

「所で、後ろの娘…せんちーの彼女と違うん？」

「え？はっ！？白雪！！何で…え？その手何！？

撫でる！？いや、その形はアイアン…ニギヤアアア！！誤解だろおおおお！！てか、付き合ってもいなアアア！！」

「ついでにその娘、『攫う』言った時には後ろにおったで。」

「お前確信犯かああああ！！男の純情弄びやがって！！」

「せんちーやから、ええやろ？」

「良くねえ！！てか、白雪！！マジ止めて俺は怪我人んんんん！！」

「丁度良かった。姉よ。これを返す。」

後ろの髪筒に手を伸ばす。髑髏が彫りこまれた銀の髪筒だ。

「…どっいつつもり？」

「私は姉の陣営に加わる気は毛頭ない。」

「仁様！！」

…この事を伝えねばならんな。

「私は姉とは違う。王の器ではない。」

「なら、私に仕えなさい。」

「ふん…仕える人間は既に決めた。」

「…誰よ」

声が小さくなったか？

…気付いているだろうに

「南郷仙刀。」

「私には王の器には見えないわ。」

フツ…よく分かっているな。だが…

「関係ないな。『士は己を知る者がために死す』だ。自分を不要と言った姉。」

その私に絶対必要など言い信頼する仙刀…。  
どちらに仕えるかなど、言つまでもない。」

「私も信頼してるわ。」

…いやに引き際が悪いな。

「なら、不要など説明がつかんな。」

「…それは…」

言いどもる姉。これで帰れるな。

「帰るぞ。やるべき事は終えた。」

仙刀！！帰るぞ。」

「じいいいん！！白雪止めてエエエ！！」

「…またか…」

白雪をどかし、肩を貸す。

「一応こんな奴でも私の主君だ。」

「華琳様！！あのような無礼を……！！！」

「桂花……いいの。」

姉も止める気はない。十分だ。

「帰るぞ。」

「あー、鼓膜破れているからあんま耳元で話すな」

「……善処しよう……！」

「する気ないだろ……！」

耳元で怒鳴り合い。

曹軍の面々にはどのように映るのだろうか……

SIDE 曹操

「華琳様……兵を下がらせました。」

「……分かったわ……。」

仁の離反宣言。

これは私達に大きな衝撃を与えた。

……春蘭はまだ立ち直らないのだ。

「では、私も…」

天幕から出る秋蘭。

今日は誰も天幕にいない。居るのは私だけ。

「…仁…」

渡された髪筒が手を離さない。…いや、捨てられない。

「…どうしてなの…?」

目に熱い何かが込み上げる。胸を何かが攻め立てる。

だが、いつまでもこのままではいけない。

私は霸王、曹孟徳だ。霸道を歩むのだ。

霸道に敵は多いなど知っている。例え…自分の弟でも…敵なら倒すだけだ。

…だけど…

「何で私じゃないの…?何であの男なの…?ねえ、教えてよ仁…。」

今まであの子が居ないなど考えなかった。

いつか、戻って来ると信じて疑わなかった。

「ねえ…じ…ん…どうして…?」

私の声は夜に飲まれ、誰も答えなかった。

霸王として〜姉として〜（後書き）

この話の裏で仁と曹操は、ちよくちよく絡みます。

霸王として、姉として曹操がどちらを選ぶのかも書きたいことなので…

次回は悪ふざけです

そつだ、洛陽に行こう。(前書き)

…この小説の主人公って誰だっけ…？

そうだ、洛陽に行こう。

SIDE 仙刀

「仁、洛陽ってどんな？」

連合軍も虎牢関を突破。…もう、洛陽まで目と鼻の先らしい。

「治安に関しては言うまでもない。整っている。私の独断で月に保護を約束する手紙を渡した。」

「仁マジ最高!!じゃ、助けるか!!」

やっぱり、月は悪い事してなかったか!!

「…桃香と一刀に保護の話を通したか？」

「……………あ。」

忘れてた。皆を説得しないと。

「貴様は阿呆だ!!話を通せ!!でないとも月と詠の行き場がないだろっ!!」

そして思い出すのに時間がかかりすぎだ!!」

大声を出すなよ。うるせーから。てか…

「華雄は？抜けてるけど」

「私は帰るぞ。」

忘れてたの！？俺もだけど！！  
まあ、普通に保護はOKだよ。  
いやー、やりやすかった。簡単に通った。  
飲まない殴るとか言ったけど。デモで一刀にやったけど。  
会議を終えると…

「おーい、仙刀お！！車椅子ができたぜ！！」

慶からの呼び声。

まだ、怪我が治らないから車椅子を作らせた。

切り傷と鼓膜は氣の巡りを良くしてなんとか治した。

…まあ、応急措置みたいなもんだけど…

骨はまだ治ってないから車椅子。

真桜が頑張っていたな…

制作風景？

「真桜！！師匠が使うんだ！！早くしてくれ！！」

「風…ちよつと落ち着きいや…」

「で、怪我を治すのには何をしたらよいか…」

「話を聞きいや…」

「うーん、薬草を渡したらいいと思うの〜」

「分かった！！唐辛子だな！！」

「絶対ちゃう！！」

「絶対違つのー!!」

制作風景?

「えーと、李典さんで良かった?」

「せや。自分は…?」

「北郷一刀。南郷仙刀の…友人?」

「何で疑問形なんや!」

「気にしないで。で、依頼なんだけど、その車椅子に爆破機能を…」

「つけへんで!」

…まともな車椅子かなあ?

「これにござる。さあ、仙刀殿。」

忠が持つてきてくれたのは木製車椅子。振動やばげ。まあ、乗るけど。文句は言わない。

「あー、楽だ。じゃあ洛陽に行くか!誰か押して!」

『うおおおお!』

「人数多ツ!!ちよ、待つ来るなアア!」

怪我を増やすなああ!!

とにかく、洛陽へ。

後は月を助けるだけ…の筈が…

「私が先に入りますの!!!美羽さんは譲りなさい!!!」

「なんじゃ、麗羽!!!妾が先じゃ!!!」

…また?また、姉妹喧嘩?入り込めないのに…。

「ねえ、仙刀さん。なんとか出来ない?」

「無理、俺は怪我人。働きたくないでござる!!!」

無理なもんは無理だから桃香。

「仁のアニキ居るか!?姫を止めてくれ!!!」

「仁さん、どこですか!?!」

何もできないでいると、袁紹の所から緑髪の娘と青髪の娘が来た。  
てか、仁。お前の知り合いなの?

「…ハア…私の役目か…分かった猪々子、斗詩。」

「流石仁のアニキ!!!頼んだ!!!」

「お願いします!!!」

何か楽しそうな、緑髪と青髪。…まさかな…  
でも一応…

「一刀。」

「分かってる。」

アイコンだけでなく、言葉も交わす。

…これは重要な事だ。

「何をしている。麗羽、美羽。」

「仁様！…いらっしやいましたの！？」

「じーん！！麗羽がいじめるのじゃー！！」

…ふーん。

「一刀…」

「まだだ、まだ分からない。」

「ねえ…一刀さん、仙刀さん…何を…？」

桃香はシカト。それよりも大切な事がここにある。

「下らん事で喧嘩をするな。全く…七乃も止めよ。」

「いえいえ、仁さんが止めてくれると思っていましたよ。」

「…ふん…」

「仙刀…」

「ああ……」

「おにーちゃん達どうしたのだ？」

「さあ……？」

バッグはあるな……中身もバツチリだ。

「仁様……お見苦しい所を、お見せしましたわ……」

「よい。気にするな。」

「仁……！久しぶりじゃな……！妾の婿になれ……！」

「なっ……！？仁様は私の……！！！」

「パララパツパバ……仙ちー秘密道具……アーマライトA2……」

「パララパツパバ……かずピー秘密道具……メガ粒子砲……」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、星ちゃん……！このバカ二人抑えて……！」

「……ハッ……！！……」

何だ急に……！！

「一刀さん、仙刀さん……！お止め下さい……！」

「この場は暴れる場にございませぬぞ……！」



「嘘でしゅよね!？」

真空パワーなめんな!!

「…何してるの？」

「お姉ちゃん!!お願いしましゅ!!」

チクシヨウ!!白雪まで来たか!!

「…仙刀。この車椅子の絡繰知ってる？」

「へ？」

車椅子をいじる白雪。

…嫌な予感…

急に黒いしなる何か。それが体に巻き付く。

「おい!!どんな仕掛け!？」

車椅子に固定された!!最悪だ!!

「一刀さん確保!!」

『ハッ!!』

結局このまま取り押さえられた。…チクシヨおおおお!!  
あれ?白雪!?!何でそんな道具を…オイ止めっ!!

「さあ、月を助けるぞ。」

仁が戻ってきた。あの後、普通に洛陽に入った。

まあ、袁紹は洛陽の様子が話と違うとか何とかで詰め寄られ、今動けるのは

俺達、曹操、孫策ぐらいか…。ばれないな。

「月どこ？あと一刀、走るの遅い。」

「お前の車椅子を押しているからな!!」

仕方ないだろ。問題点はお前の、速さと根性と筋力とお前自身だよ。

「こつちだ!!」

宮殿の中に入る。

こんなイイ家に住んでるのか…。家賃いくらかな？

「げっ!!直角カーブ!?面舵一杯!!」

「お前も働けこなくそおおおお!!」

おお、曲がった。

このまま真っ直ぐ…!!

「この部屋だ。」

「ふざけんなああああ！！止まれ一刀おおおお！！」

「車は急に止まれない！！てことでバイバイ！！」

「手を離れた！？つて壁があああ！！」

あの野郎…！！ぶつ殺す！！

そう決意し、俺の意識はぶつ飛んだ。

「んなっはっ！！」

「意外と早く起きたな。仙刀、新記録だ。」

目を覚ますと…

「月、責任をとるなど身投げの中に無い。責任をとるのは、もっと地味でまっとうな道…。」

「仁…さん…」

仁が月の肩に手を置き、真っ直ぐ目を見て説得する姿…。  
てか、口説いてね？月の顔赤いぜ？

「…分かりました。これからお願いします。」

「仁、ボクも行くからね。」

月、詠が参入…か。  
これで目的達成!!

「なら帰るか!!ホラ、華雄も心配してるぜ。」

「あ、仙刀起きたのね。話は…?」

「通してある!!」

月、詠を連れて出る。

問題はどうかやって正体を隠すかだよな…。

だけど、それは後回し。取り敢えず普通の服に着替えてもらった。

「…普通か?」

「序盤のな。」

「仙刀：アンタはバカってはつきり分かったわ…!!」

月 装備 布の服

詠 装備 たび との服

「目立つじゃないの!!」

「バツカお前、皆一度は着る服だよソレは。」

「着ないわよ!!別のに…!!」

「ステテ パンツ?」

「しよつと思つたけどこれでいいわ。」

納得してくれたか…良かった良かった。

「…男性用…だよなソレ？ホントに他の無かった？」

「メタル　ング系なら…」

「さて、皆の所に行こう…！」

なんとか他人にバレないで合流。…てか、バレそうになつたら仁が…いや、言わない方が良さそう。強いて言うならゴル　13だ。

…で、合流したらよー

「仙刀さん！！洛陽の人達に炊き出ししているから、ご飯作って！」

「！」

と、桃香に言われ…

「なあ？お前等…俺に言うこと無い？」

調理中。

…泣くぞ、俺は怪我人だぞ…！！

『作るの遅い…！もっと速く…！』

「ふざけんなあああ…！」

ブラック軍に勤めているが、そろそろ限界かもしれない。

「メンマが足りませんぞ!!」

「カエレ!!」

「おい!!仁!!食材渡して!!」

「これだな。」

「おい…俺は怪我人だぞ。せめて切つてよこせやあああ!!さて、慶!!忠!!槍はいらんからあああ!!マジ帰つて!!」

「……………」

「仁は笑つてんじゃねーよ!!お前のせいだぞコレ!!木っ端微塵切りじゃねーか!!」

「頑張つて調理するんだな。私は見物だ。」

「怪我人いたわれエエエ!!」

「所で、貴様は鼓膜が破れているが、大声だして大丈夫か?」

「あ?そんなの…気にしたら痛くなってきた!？」

「…本当に阿呆だな。」

「笑いながら言うんじゃないやねエエエ痛あああ!？」

「…羨ましいな…」

「華琳様、いかがなさいましたか？」

「いえ、何でもないわ桂花。それより董卓の遺体は…?」

「はい、こちらにそれと思える男の死体が…」

そっだ、洛陽に行こう。(後書き)

活動報告に『オリキャラ裏話』を作りました。  
かなり蛇足です。司会はバカ二人でいきます。  
次回は未定です。

戦後処理（洛陽編）

一つ目 ハウトゥーハイド

SIDE 一刀

月と詠を救出し一番最初にやるべきことは、正体を隠す事…それについては案がある。

「…これでどう？」

「いいわけないでしょ…！」

取り出したのは、白と黒のコントラストが見事なフリフリがついた服…つまりはメイド服だ。

「何でボク達がこんな服を着ないといけないのよ…！」

「だって、元々は太守とその軍師だろ？普通の侍女服だと失礼でしょ。」

「うるさいこのチンコ…！」

「だからどうした…！」

このメイド服の夢とロマンが分からないのか…！

「…一刀。」

肩に手をやる仙刀。あ、そういえば、この二人は恩人だって言うて

たな…。

やっぱりこの服を着せるのに抵抗が…

「…裸ワイシャツの方が、良くないか…？」

「「お前はよおおお…！」」

詠とのダブル突っ込み。いくらなんでもそれは…！！

「お前等何だ急に…！」

「何だじゃねえよ！！着せるのオカシイだろ！！てか、裸ワイシャツでご奉仕とか完全にアウトだろうが…！」

「わいしやつが何かは知らないけど『裸』でいい気がしないのよ…！」

「詠ちゃん！！もしかしたら普通かもしれないよ…？」

「気づいて月！！コイツは最低最悪のチンコよ…！」

仙刀にストンピングの嵐。怪我？ゴメンそれ何語？

「詠！！メイド服より涼しいぞ！！だから大丈夫…！」

「そりゃあ裸ならね…！」

まだ諦めていない仙刀。…何をそんな必死に…

「チクシヨウ、ロマンが…！！…！」

「お前は仲間だっ！」

同じことを考えていたのか。

「ねえ、月。ホントにいいの？もう、ここから帰らない？」

「あは、ははは…」

何て事を言っんだ。

二つ目 ホームラン

SIDE 仙刀

氣の力で洛陽に居る間に怪我をそれなりに治した。

少なくとも鼓膜と切り傷は完治。骨折についても普通に動くぶんには問題ない。空手の型もできる。  
てか、した。でも…

「ヒマだなあー」

やっぱり治りたてだから、荒いことすんなって仁達に止められた。  
だからヒマだ。つまらないから今は散歩中。  
仕事は料理だけだ。

「あーあ、ヒマ…」

何の気なしに井戸を見ると発光してる。

新手の貞子？てか、幸子？  
中を見てみると…

「ハンコ…だな。金ぴかの」

何でこんなのが…？てか、こんなに金色なのは…

「うん？」

目に入る物干し竿。…暇潰し発見！！

SIDE 一刀

「あのバカどこに行った…」

怪我が治ってブラブラしてるらしい。アイツが一人はダメだと思っ  
色々と。

「あー、上手くないかな…」

そこにいたか。声がする。見てみると…

「やっぱ勘が鈍ったなー」

棒を振り回す仙刀。

野球の練習？訓練でやるらしいしな…。  
今度俺も参加するか。

「さて、もう一回…」

何か取り出す仙刀。金色で龍の取っ手ってアレは…!!

「おい、待て！」

「ツツ」

カッキーン!!

「ホームラン」

「玉壘がああああ!!」

多分そうだ!!洛陽にある金ぴかはそれしかない!!

「何だ、一刀いたのか。」

「お前アレ何!?何でかつ飛ばした!!」

「井戸で見つけた金メッキだ。なんか重いけど、タングステンあたりに張ったんじゃない？」

玉壘確定だ。漢の宝じゃねえか。

「アレは玉壘だ!!本物の金だよ!!」

バカかコイツは!!金を球がわりにノックとか!!

「は?あんなに金って感じだからメッキだろ?純金のハンコとか誰が使っの?普通作らんから。」

「コイツ…狂ってやがる…!!」

「あら、何してるの?」

「ん?孫策…だっけ?」

「正解。バカと言われてたけど、そこまでじゃないのね。」

話していたら孫策が来た。後ろにいるのは…周瑜か。

「流石に人の名前を直ぐに忘れはしないって。影が薄くない限り。」

影が薄いとか言うなあああとか、叫んでいる人がいる気がしたけどイヤ。

「そつえば…虎狼関を取ったのって…」

「私達よ。泗水関は誰かさんに取られたし…。大変だったんだから。」

「あ、文句は言わないの?」

「泗水関で華雄が、袁術ちゃんの所で暴れるように仕向けたんでしょ?文句は言わないわ。」

虎狼関でも、呂布を抑えてくれたから取れたんだもの。」

楽しそうに話す仙刀と孫策…何か引つ掛かる。

「ま、アンタ等が虎狼関取らなかつたら、俺は死んでたし、礼を言うわ。ありがとう。」

「ええ、私もお礼を言わないとね。」

イイ笑顔の孫策。…怖いぐらいだ。

「いや、いいって。」

「大丈夫。そんな大した事じゃないわ。」

「……………」

金印を取り出す孫策。

…アレッ、仙刀が…

「これが私の頭に当たったのよ。何か知らない？」

「…コイツがやりました」

互いに指差す俺達。

よく見ると孫策さんにコブが出来ている。

「孫策！！俺の目を見て！！ホントだよ！！一刀がやったんだ！！」

「孫策さん！！仙刀の手を見て！！その棒で…何、証拠隠滅して  
んのおおお！！」

必死に折って誤魔化そうとする仙刀。今更ムダだ。

「私の勘だとアナタね。こっちに来なさい。」

「いや、違うから!!俺じゃない!!」

「こっちに来なさい。」

「いやああああ!!」

連れてかれる仙刀。ザマア見やがれ。

「あの男…まさか、雪蓮に当てるとはな…」

「すみません。代わりにお詫びします。」

頭を下げる。仙刀の断末魔はBGMだ。

「いや…久し振りに笑ったのだ。咎めるつもりは無い。」

笑って答える周瑜さん。

良かった良かった。

「あのバカにもいい薬になります。」

「そうだな…雪蓮にも薬があればいいが…」

あれ…何か…

「孫策さんで苦労してますか?」

「ああ…北郷だったか、あの男のせいで苦労…」

「バリバリしてます。」

「ハア……」

何か近いのを感じる……

「冥琳だ。」

「一刀でお願いします。」

……仲間だな。同じ事で苦勞する。

「愚痴……聞きましょうか？」

「ああ、私も聞こう。」

「ちょ、止める孫策うううう……」

「アハハハハ……」

「策殿……！何をしておるんじゃ……！」

「助けてバアサン……！」

「策殿、儂も参加しよう。」

「スマン……！俺のばあちゃんは弓道してるから弓使いはババアの印象があるだけだからああああ……！止めてエエエ……！助けてエエエ……！」

「ハア……」

戦後処理〜洛陽編〜（後書き）

次回はクリスマス特別編です。  
マトモになる気がしない。

**特別編！！南北コンピのクリスマス〜メニークルシミマス〜（前書き）**

10万PV突破！！&クリスマス記念！！

皆さんのおかげです！！ありがとうございます！！

時間軸、場所は一切不明。携帯についてはノータッチでお願いします。

特別編！！南北コンビのクリスマス〜メニークルシミマス〜

SIDE 一 刀

クリスマス…これはどんな日だろうか。

カップルで過ごす？友達とパーティー？それとも一人で？

俺は自分の家で…

「何でよりによって、仙刀とおおおお！！！」

「うるせえな！。俺だって嫌だよ。」

まさかの男二人。家族の人達はいない。理由が…

「旅行に行くって…」「」

そつだ。結果二人きり。家はすぐ向かいで近いから、来たらしいが…最悪だ。チクシヨおおおお！！

「夕飯はどうなの？」

この状況下で、仙刀の手料理とか言ったら発作的に自殺を考えるな。俺は。

「鍋。冷凍庫に土鍋ごと入ってる。」

良かった…！！泣くほどうれい…！！ウチの家族の狂った行動なんか気にならないほどに…！！

「あーあこんなクリスマスなら、一人の方がマシだろ。」

「まあ、な事言つな。ゲーム ユーブやるつぜ。」

「古いなオイ。」

普通W iじゃね？

「ならロク ン？バンジョー カズーイでいいだろ？」

「なんで更に古くなる！！てか、一人用だろソレ！！」

「バカだろ。打ち合いのミニゲーム的なアレなら皆で出来るから。」

バカなやり取り。クリスマスにこれは悲しすぎる。

「ったく、ならゲー キューブでカービィ エアライドやるか。」

「結局ゲームキュー に戻るのか…！！」

振り出しに戻る。どんだけしたいんだ。

「別にやらないよ。またシテイ ライアル一択だろ？」

「当たり前だろ。神だぜアレは。」

「：お前とは絶対やりたくない。なんだよ、チャージの早さがウイリ スクーター並のハ ドラって。チートだろ。」

「当たり前だろ。ハイ ラ作る時はチャージ狙いってのは。無かったら敵から奪うー！！」

そう、コイツは自分で集めるより敵から奪うんだ。  
で、ドラーンはシカトでイドラを作る。

…俺が作ったら、上から某ルーデルのスツーカーを彷彿とさせる急降  
下でやられたけど。

レックスウリーに一瞬でやられたからな…。

「せめて一回やろうぜ。ヒマだしさ。」

「まあ、いつか…」

くプレイ中ダイジェストく

「あ、岩が…行くか。」

オイ！！お前ゴールドボール捨てる！！」

「ヤダ！！CP潰したからお前やる！！」

「お！ハイド パーツだ。」

「オイ止める！！あ、あのコンテナ…」

「割らすかあ！！」

「よっしゃ、ハイ ラ降臨！！」

「ヤバイ！マシン壊されたのに！！」

「さーで、対決は…よし直線！！」

「あ、オワタ。」

「いやー、楽しいわ。」

「なあ、さっさとゴールしろよ。敵全員破壊して撥ねて遊ぶとか止める。もう10分たった。」

「終了」

「いやー、堪能した。」

「はあ…普通にウエイドしない？」

「マジ？あれは…」

「お前53連敗だからな。」

「何だと…なら、そこで止めてやるよ。」

「はい、73連勝」

「チクシヨウ…何で逆走するんだ…」

流石に飽きてきたな。違うのやるか…。

「次何やる？」

「スマ ラデラックスで…ってこのまま行く気か？」

あ。

「特別編だっけ忘れてた！！」

「メタ発言すんな。…でも動きないとヤバイか…。」

仙刀も意見一致。さて、どうするか…

「呼べる奴は、慶と忠に南郷隊の野郎共と華陀、貂蝉、卑弥呼、于吉に左慈だとよ。」

「漢祭りいいいい！？何そのチヨイス！！」

最悪だ！！クリスマスじゃねえよ！！プレゼントじゃないから！！

「下手すると今回は恋姫は出ないらしいぜ。」

「どこが特別！？ゲームしてた方がマシだ！！」

こんな展開無い！！

普通にラブコメさせる!!

「まあ、携帯で連絡取れるけど…」

「まだマシ…なのか？」

あの話を聞いて感覚が狂ったのか、マトモに思えるこの不思議。

「お、メール来た。桃香からだ。」

「よかった…ホントによかった…!!」

とりあえず一安心。連絡無かったとかいいたら泣く。

「じゃあ、読むぜ。」

『仙刀さん。一刀さんといますか？居ると思って続けます。

私達は今、皆で宴会をしています。そこで…』

急に無言になる仙刀。…何事？

携帯を取りメールを見るとそこには、絵文字付きで楽しそうに話す桃香。

蜀の皆が集まっているらしい。…俺達は？

「……………」

何だろうこの敗北感…

「写メだけど…見る？」

「やだ、これ以上惨めになりたくない。」

桃香達に招かれず寂しく過ごす。…皆でワイワイしてるのに、男二人で…

これを敗北と言わずに何と言おう。

「…鍋、温めるか？」

「…ああ。」

この寒さを何とかして欲しい。この寒さを鍋に慰めてもらいたかった。

「なあ、マジで誰か呼ばね？寂しいから。」

「来るの結局男だろうが…」

「二人きりよりマシだろ」

こたつに入り、鍋をコンロで温める。少し沸騰してきたけど、足りない。

それではこの寒さが癒せない。ここで、大男二人追加はキツイ。

「仁から呼べばいいだろ。アイツはむさくないし。」

仙刀から提案。まあ、確かにこのままは嫌だし徐々に馴らしていけば大丈夫か。

「よし、呼ぼう…」

「OKじゃあ…」

携帯をいじる仙刀。仁にはすぐに繋がった。

「お、仁？ヒマしてる？」

『いや…今は実家にいる。』

「あ、そうなんだ。来るの無理？」

『流石に無理だな。』

スピーカーホンにして、俺にも会話が聞こえるようにしてくれる。  
全く聞こえないのは寂しいからありがたい。

「無理…か。」

『すまん。』

「今何してるの？」

すぐに切らずに話し。流石に俺と話すのは飽きたらしい。

『姉達と宴会だな。』

「おい！！本編に責任もてや！！」

何してるの仁は！！曹操との分かれは何だったの！？

『いや、特別編だから問題ないと春蘭、秋蘭に言われて攫われたからな…』

「抵抗しろよ！！俺達の輪に加われ！！」

『だが断る。大体貴様等は今何をしている。』

横暴な要求。一瞬で断られる。…言い方があるだろ。仁が居ないのはキツイぞ。

「二人きりなんだよ一刀と！！気分悪いから来てくれ！！」

『…』

「笑ってんじゃねえよ！！聞こえてんぞ！！」

『いや、スマ…クク…』

「笑うなあああ！！泣くぞ！！」

仙刀、俺も泣きたい。

このままだといきなり大男がヒヤッハーだ。

『仁！！こそこそと何をしているのだ！！』

携帯から楽しそうな声。

…勘弁してよ。

「ん？近くに誰居るの？」

『姉と春蘭、秋蘭だ。』

チツ!!

アレ？仙刀がいい顔…イタズラ思いついたか？

「なあ、仁ちゃん。面白いこと思いついたんだけどよ。」

『碌なものではないな。』

それ正解。よく分かったな。

「早いから。ただ携帯を皆に聞こえるようにして。」

『うん？こづか？』

「いや、分からんから。」

『おお!!聞こえるぞ!!華琳様!!』

『姉者…叫ばずとも聞こえているぞ。』

『どうしたのかしら春蘭。せつかく仁の膝枕を堪能してたのに…』

うわ、仙刀が露骨に嫌な顔した。

てか、曹操さん？何かとんでもないことを…

「いや、ちょっとした遊びしない？」

『…貴様の提案か…』

『仁。良いじゃないの。のってあげたら?』

携帯越しに姉弟の話しが聞こえる。本編については…いいか。

『ふむ…まあ良からう。』

「じゃあ、しりとりやって詰まった奴は罰ゲームでどう?」

『貴様のような阿呆に私が負けるとでも?』

「嘗めんなよ仁。で、罰ゲームはどうする?」

『そうだな…浮かばんな。』

「じゃあ…」

アイコンタクト。俺に聞いてきたか。そうだな…

「仙刀が負けたらモノマネで、仁が負けたら

『お姉ちゃんだーい好き』を感情込めてハート付きで言うのは…」

「それだ!」

『それよ!』

『待て!!後生だ!!』

何?どうしたの?

『南郷!ぬで攻めなさい!!それが少ないわ!』

「よしキタ！！じーん、頼んだぜ。」

『貴様等…！！』

『私にも頼んだ！！』

『ずるいぞ姉者！！』

ヒートアップする向こう側。凄いな…。

「じゃあ、いくぜ。硫酸銅！！」

『…馬。』

『『『チツ…役立たずが…』』』

始まったしりとり。  
いきなり辛辣だな…。

「祭り！！」

『漁師』

『いい加減にしなさい。さっさとぬえを使え。』

うわ、キツツ！！てか、曹操さん！？

「…死ぬ！！」

『南郷！！良くやったわ！！』

キヤラ崩壊激しいな！！

『…塗り壁！！』

「べ、べ…チクシヨオオオ！！」

「『『』』嘘！！もう終わり！？『『』』」

『勝った…！！』

早い！！弱いな！！

「お前正気か！？」

「仕方ないだろ！！浮かんだのがベンゼンにベンゼンスルホン酸とベンゼンジアゾニウム…！！あ。」

今更！？遅いから！！

『南郷！！アナタは殺す！！処刑よ！！』

『華琳様！！落ち着いて下さい！！私も同じ気持ちですが！！』

『南郷貴様あああ！！私達の夢を…！！』

うわ、携帯の向こう側ヤバイな…

『フン…私の勝ちだ。さあ、モノマネをするんだな』

『早くしなさい。無駄な時間よ。』

一発で分かるほど不機嫌な曹操の声。キツッー

「ハイハイ、分かりましたよ。」

舌打ちしながら何か取り出す仙刀。あれは…蝶ネクタイ？

「はい、じゃあ仁の真似

『お姉ちゃんだーい好き ずつつつと一緒に居て欲しいな』

おwwまwwえww

取り出したのは名探 コナンのアレ。

見事な仁ボイス+余計な一言。

『仙刀貴様あああ!!』

「いや、モノマネだからいいじゃん。」

笑いながら答える仙刀。笑うなよ仁は必死だぞ。俺は大爆笑中だぞ。

『貴様、本編で…!!スマン急用が出来た。』

「あん?どうした?」

…何があったの?

『姉が鼻から血を吐いて血の海に沈み気絶した。急病かもしれん。』

「いや、違つと思つ。」

しようもなっ!!

てか、大丈夫あの人!? 霸王のカリスマは!?

あと鼻から血は吐かないから!! それにどんだけ噴いたんだよ!!

『スマンが、携帯を切るぞ。姉を運ばねばならん。』

幸せそうな顔をしてるぶん不安になってきた。』

と言つたが、切られていないのか向ここの声が聞こえる。

『仁!! その華琳様にしてるお姫様抱っこ、後で私にもしてくれ!』

『姉者!! ずるいぞ!! こうなつたら...!!』

チツ!! 本気の舌打ちが出来た。会心だ。

『南郷。』

「ん? 多分、姉妹の青い方か?」

電話に出る誰か。確か... 夏侯淵か?

『そつだ。所で... 先程の仁様の音声をもらえないか? 本編で。』

「いや、無理だから。」

『頼む!! さっきのはくるものがあつた!! 家宝にするから!!...』

のとおりだ!!」

必死だな。てか、この通りと言っても分からんから。

「いや、無理なモンは無理だ。仁に言ってもらえ。」

「…仕方ない…か。分かった。」

「おー、言わなかったら仁の飯にデスソースを入れると言ってみ。確率上がるから。」

『分かった!!試してみるぞ!!』

そう言っつて切れる電話。

・・・

「チクシヨオオオ!!死ねあのリア充ううう!!」

揃う絶叫。てか、本音。

「だから呼べる奴リストに居なかったのかよオオオ!!今日から仁の処刑法を募集します!!宛先は俺までです!？」

慟哭する仙刀。完璧に地雷踏んだな。てか、踏み抜いた。

「止める。てかさあ、どうするよ。ガチで二人きり嫌だし慶と忠を呼んだ方が良いから。」

マジの提案。そろそろ精神的にキツイ。てか、擦り切れ始めてる。

「ああ…。てか、仁は何してるの？最後が…。曹操が鼻血出した時も焦っていた感じだったし、アイツはシスコ…」

）　）　）　）

鳴り響く携帯。誰から？

「あ、仁からだ。はい、もしも…」

突如、爆音。しかも高音だ。音爆弾みたい。

「ああああ！！耳が！！耳がああああ！！！」

耳を押さえてのたうち回る仙刀（ガノトス）。この音って…あれなのか？

「ストーカー撃退音？」

「どっだけアグレッシブな使い方！？ただのいじめだろうがアレは！！！」

怒鳴る仙刀。ザマ見る。

「あー、もう。慶達呼ぶぞ。」

「孫呉メンバーと通信しないの？」

「まだ、接点少ない。ボケれないからイヤ。」

と、いうことで孫呉はパス…申し訳ありません。

「もしもし？慶？飯にするから早く来て。忠もな。」

結局は呼ぶ。やっぱ皆でワイワイやりたいしな。

ピンポーン

「お…来たな。ちょっと出る。」

こたつから出る仙刀。向かい先は玄関。

「よー！！慶、忠…」

ピシヤリ

「………」

「…何事？」

急に黙った仙刀。何があったの？ホントに。

「…忠が…トナカイのコスプレしてた…」

こたつに突っ伏す仙刀。

何を言ってるんだか…あの忠だよ？

「まったく…見間違いだろうが。俺が行くから待ってて。」

こたつが出る。まさか忠がね…

ガララ…ピシヤリ

…ビキニのマツチヨ？…まさか…

「うふん」

ピシヤリ、ガチャリ。

「ぶるうあああ…！開けなさいよ…！」

あり得ない。聖夜に妖怪とかあり得ないから。

「だあれが…！！」

シカトだ。ただ無心になれ…！！

「おせーぞー刀。先に食い始めたからな。」

「アンタ何やってんだい？美味いぜこの鍋。」

「うむ。それに、肉も買い申した。抜かりはござらん。」

あれー？何で？

「あれ？外に…」

「さっさと入れたよ。」

あれ？じゃあ、何で俺は玄関に？ただ、化け物見ただけ？

「しっかしよ、アンタ等男だけって色気無いな。」

「うるさい。チクショー」

今更いじるな。

「はあ…クリスマスって何…？」

「漢祭りだな。」

「漢祭りにござるな。」

…最悪だよホントに。

特別編！！南北コンピのクリスマス〜メニークルシミマス〜（後書き）

読者の皆様のクリスマス、この連休が良い日になることをお祈りします。

よろしい、ならば修行だ。

SIDE 仙刀

連合も解散し、俺達は平原に戻ってきた。新しい仲間にも月、詠、華雄を加えて。

月と詠は侍女をしてくれるらしい。服もメイド服に落ち着いた。ちくせう。

で、華雄は將軍として働くことに。だから先ずすることは…

「仙刀…お前、本気なのか？」

「わりとね。」

「これが…か…何なんだこれは？」

華雄にはまず、精神力を養ってもらわないと。

そのため用意したのは…

「油風呂…！」

「油風呂が何なんだと聞いている…！」

「発音が違う…！油風呂…！」

「油風呂…！」

「もっと…！油風呂…！」

「油風呂…！」

「よし、良いぞ華雄。もう一回だ。油風呂!!」

「油風呂!!」

「何回やる気だお前等はよオオオオ!? 差が分からんから!!」

うるさいなホントに。発音は気にしないと。愕怨祭とか、大威信八連制覇とかみたく。

修行? 華雄編

「で、油風呂とは何なのだ?」

風呂に浮かびながら聞いてくる華雄。入るの早いな。

「うん、油の風呂だ。」

「見ればわかる。それがどうして鍛えることに繋がるんだ。」

はあ…ちつとは考えろよ。

「その油に蝋燭をのせた紙船を浮かべるんだ。基本的に動いたらダメだから、忍耐力が鍛え上げられる。」

「…死ぬのではないか?」

不安気に聞く華雄。大丈夫だって考えてあるから。

「うん。可能性はあるから船に火をつけてない蝋燭を乗せる。倒れ

たら、終了だな。それなら大丈夫だろう?」

「まあ…確かに…な。」

納得してくれたか。良かった良かった。

「じゃあ、始め。俺達は精神を乱すから耐えてね。てか、そうしな  
いと修行にならんし。」

「うむ。分かったぞ。」

よし。紙船を風呂に浮かべる。

「頑張つてね。極めれば『私が劉備軍武将、華雄である!』と名  
乗るだけで、砦が崩壊するようになるから。」

「本当か!?」

「ああ。」

「嘘に決まってるだろうがあああ!?!てか何ココ!?!」

「男塾。かなり魁ているぜ?」

「華雄は女だろ!?!」

「いや、胸に関してはかなり男に…」

「貴様あああ!?!」

「「あ。」」

倒れる紙船。・・・

「…修行終了…」

力なく告げる。いくら何でも早すぎる…

「仙刀貴様許さん!!」

怒り猛る華雄。…でもさあ

「おい、修行だぞ。それに精神乱すと言ったじゃん。泗水関と同じ手口にやられんな。」

「ぐっ!!」

そう、修行中だ。やると言っただけだ。

「もう一回。」

「うむ…だが、体の事を言っな。」

風呂に戻る華雄。要求が多い奴だ。まあ、飲むけどさ。

「じゃ、再開。」

再び紙船を浮かべる。

華雄は目を閉じて座禅。本気で精神統一しているな。ちと…と。

(…一刀。)

(何だ?)

アイコンタクトで一刀と会話。しっかり乱してやらないと。

「…ぷぷっ…」

「クスクス…」

「「ありゃあ、もうダメだな。」」

「うがああああー!」

「「あ。」」

修行終了。

「貴様等ああああー!」

「またかよ…ほら、船。」

そう言って指差す。このままだと、いつまでも切れやすい奴だぞ。

「それにお前が言った事を守ったじゃん。文句言つなよ。」

「ぐぬぬ…!」

何も言い返さない華雄。まあ、自分が悪いしな。

「さあ、もう一回と言いたいけど、一回座禅でもしたら、多分そっちからの方が良い。」

いくらなんでも怒りやすすぎる。死にかけのディプロスよりひどい。

「うーむ、そうするか…」

華雄も了解。さてと…

「貴様が叩くのは無しだ。」

チツ！！ばれてたか…

「で、私ですか。」

「そ、愛紗なら適任だろ？」

愛紗に一任する事になった。一刀は仕事とかでどっかに行った。最近、漢文を頑張っているらしい。

「で、何をすれば…」

「いや、雑念を感じたら肩を叩くだけ。強くしなくていいから、ペシンとかの強さで頼む。」

「ずいぶんと抽象的ですな…」

軽く説明。で、

「何で星と鈴々も巻き込まれて…？」

「仕事をさぼっているのを捕まえました。」

哀れ。サボりはバレたらアウトだからな。

「愛紗！！私はしたぞ！！ただ合間に酒を飲んでただけではないか  
！！！」

「鈴々もしたのだ！！ただ、警備中に買い食いしただけなのだ！！」

「勤務中にだろう！！部下に示しがつかんじゃないか！！」

怒鳴る愛紗。てか、お前等そんな事してたの？

「まあ、自業自得ってことで。それじゃ帰るから」

「お待ちください」

あれ？肩の手は何かな、愛紗？

「仙刀さんにも軍の仕事があつた筈ですが…？」

あ、忘れてた。

「いや、華雄に修行を…」

「なるほど、ではあのまま放置されている油についての説明を…」

ヤバイ、片付け忘れてた。あの遊び道具。

「いや、あれは…」

「問答無用です。仙刀さんも…」

い、いやああああ!!

「お腹すいたのだ…イタッ」

「メンマ…っっ」

結局、俺まで座禅。チクショウが…!!

「……」

後ろには座禅らしく細い板を構えた愛紗。  
変なこと考えると直ぐに叩きにくる。  
鈴々と星が既にやられた。

「……」

華雄はしっかりと精神統一。弛みは感じられない。

「……」

静かだ…。そういえば…星はあの服のまま座禅か…

下着が見えるかも！！こうしちゃいられない！！

スツ…

あ、ヤバイ。構えられるあの板。…ばれたか。チクシヨウ…。

バチコーンツツ！！

「痛アアアア！？何で俺だけそんな威力！？それより、頭を叩くな  
！！」

「一番雑念を感じましたから。後は、日頃の行いですね。それに頭  
をやっても変わらないでしょう。」

軽くって説明したじゃん！！てか、日頃の行いって！！最後はノー  
タッチね！！

「あ…板が折れたか…新しい物を持って来ます。」

お前どんだけ強くした！？

部屋を出ていこうとする愛紗。何かこう…仕事人って感じだ。必殺  
で。止めて欲しい、切実に…。

「あ、居ないからといって逃げたらダメですよ。」

釘さされた！！笑顔だった分怖い！！  
そして出ていく愛紗。

「「「「「「「「「「「「

沈黙。何も話せるわけじゃないじゃないか！！

「入るわよ。」

「お邪魔します…」

この声は、月と詠だな。

「ホントにやっているのね…。一応お茶ここに置いてくわよ。」

再び沈黙が戻る。

流石に出ていき辛いのか月達も残っている。

あー、静かだ…

「一刀さん、最近頑張っているね。」

「あ、桃香。仕事は？」

「そろそろお昼だから中断してる。」

すぐそこを一刀と桃香が歩いているのか、声がする。

「何か前よりイキイキしてるよね。」

「そう？まあ、仙刀に顔向けできるように頑張らないといけないかな…」

「やっぱり仲良いよね二人とも。だからかな？」

朱里ちゃんと雛里ちゃんが二人を題材にした本を書いて…」

あの二人が書いた本！？  
ヤバイ匂いがする止めないと！！

「あ、仙刀さん！！どこに…！！」

月が呼び掛けるが止まらない。あの二人を止めないと…！！

ガチャ

俺が、開ける前にドアが開く。開けたのは…

「愛…紗…？」

・・・ヤバイ！？

振り向いて窓を目指す。アレは脱走と思われても仕方ない！！  
あれ！？前に進まない！？

「仙刀さん。『逃げたらダメですよ。』と言った筈ですが…？」

腕がミシミシいう。愛紗は今、かなりいい笑顔だと思う。月が怯えているし。

「いや…ちょっと…急用がね…」

「では、仙刀殿。先程、『鬼がいないうちに逃げるか』と仰っていたのはどういった意味ですか…？」

ここでその発言はマズイ！！

「ちよつ星！！愛紗、それ捏造だから…！！」

「ミシィ！！」

薄れゆく意識のなか思った。…華雄の修行は？

あの後、無事に復活。てか熱々のお茶ぶっかけられて復活した。詠にぶっかけられて。…ねえ俺、悪いことした？  
そして、再び座禅。  
叩かれたのは俺だけ。泣きたくなった。

「では、そろそろ終わりに…」

「やっと終わりが…」

「長かったのだ」

「中々、良い時間だったかもしれない…」

「皆、意外と集中力あるのね」

「……」

「あの…仙刀さん？無事…ですか？」

月！！心配してくれるのはお前だけだよ！！

「無事ならお昼ご飯、お願いしますね。」

…泣いていいよね？

SIDE 一 刀

今日の勉強が終わり片付ける。朱里と雛里、白雪から習いたいけど、仕事があるから独学だ。

早く、文官として働けるようにならないと…。

仙刀みたいに戦場で働くのは無理だからその分、事務が出来るようにならないと役立たずだ。

「…うん？」

中庭を見ると桃香と仙刀。桃香は剣を構えている。何をしているんだろう？

「落ち着いて…深呼吸」

「スーハー…」

目を瞑る桃香。いい感じに精神統一されているな…

「後は自分から行け。」

カッと目を開く桃香。剣に力が入る。そして…

「卍解！！」

「お前等何やってんだあああ！！」

バカやらかした…

修行？〜桃香編〜

「なあ、仙刀。言い訳はあるか？」

仙刀を正座させ聞く。何で桃香をオモチヤにしてるんだよ…

「いや、桃香が皆頑張っているのを見て『せめて自分の身は守れるようになりたい!!』って頼んできたんだよ。」

「最悪の人選だよ、桃香。」

「でも、南郷隊の人達や町の人達が仙刀さんが教えた事が役に立ってたって言ってたよ!!」

「あ、この町オワタ。」

この世にあつてはいけない町が産まれた。  
仙刀の教えた事なんてマトモなわけがない。

「失礼な奴だな。空手と、カンフーを教えたんだよ。結構人気なんだぜ。」

格闘技か…一応マトモだろうな。格闘に関しては真摯な奴だし。

「で、暇そうにしてたから仙刀さんに頼んだの。」

「格闘だけにした方が良いよ。他はダメ。」

コイツは格闘については信頼しても他は信頼できない奴だ。

「まあ、桃香の頼みは強くなりたいたいだから、格闘は避けたんだ。」

「格闘でいいだろ。完全にお前が遊ぶための選択じゃねーか。」

やっぱりアレは遊びか…

「先ずは悪魔 実を食べてから覇気や六式を使うように勧めたんだ。」

「いきなりふざけているな」

ダメだな。完全に。

「で、それは無理って言われたから次に、  
チャク を使えるようになり、人 力になれって言ったがまた拒否  
られた。」

「当たり前だろ。」

ジャン 系好きだな…

「だけど武器の名前知ってるから始解はできるものと思い、正解に  
した。で、ゆくゆくは瞬歩と虚化も…」

「はい、スリーアウト。お前チェンジ!」

絶対ダメだ。現実を見る。

「お前何て事を！！桃香は鬼道にまで乗り気だったんだぞ！！」

「桃香！！目を覚ますんだ！！現実を見て！！」

桃香…そんなに疲れてたのか…

「え！？何！？私は大丈夫だよ！！」

そう言う奴にマトモな奴は居ない！！

「全く…仙刀以外にも頼れる人いるでしょ？愛紗とかさ…」

とにかく、仙刀から教えられるのはダメだ。少なくとも格闘じゃなければ。

「愛紗ちゃんは厳しそうだし…」

「あー、確かに」

綺麗にハモる。まったくの同感だ。

「鈴々は…ダメだな。感覚論になりそうだ。」

「「確かに…」」

今度は桃香とハモる。普通にそのシーンが想像できたな…

「なら…仁か忠は？」

この二人なら大丈夫な筈だろう。そう思ってた時期がありました。

「仁さんと忠さんは仙刀さんとの訓練の 때가…怖いから…」

「そうか？別に普通だろ？」

「…どんな？」

「忠は『戯れ言無用！！武で語れい！！』てな感じで、仁は奇襲や暗殺的な感じだな…一回毒を盛られたしな…。」

怖いッ！！てか、仁は何を！？

「だから怖くて…で、もしかしたら、奇跡が起きて辛うじて、まともになるかもしれない仙刀さんに頼んだの。」

「「信頼無いな！！」」

驚きの信頼感！！何回も戦場くぐり抜けてそれ！？仕方ないけど！！

「でもどうする？俺は武器使えないぜ？誰かに頼むといっても…感覺論が絶対多い。慶とか華雄とかもそうだろ？」

死ぬの覚悟で愛紗しか…」

「死にはしない…だろ？」

「何で疑問形！？多分大丈夫だよ！！」

そうか…なら。

「「じゃあ、愛紗お願いね。」」

「はい。しっかりと桃香様に指導いたします。」

「…えっ？あれ？待って！！」

「大丈夫です。まずは基礎からですから。」

「ホントに待ってえええ！！」

愛紗に引きずられていく桃香。…なんていうか…

「「どなどなど〜なこ〜うしを…」」

だな。

SIDE 仙刀

…皆、動きだしてる。華雄も桃香も…一刀もだ。俺も動かないと。

「仙刀。」

普段、鍛えている所に向かうと仁に呼び止められた。

「貴様はこれから先が見えているか…？」

「…さあな。」

「ならば教えよう。…群雄割拠だ。弱い者は皆死ぬ…な。貴様はどう見る？」

「嫌な世の中としか言えないな。」

戦争だらけって事だろ？嫌な世の中だ。

「ふっ…そうだな。だが、好機でもある。」

…好機？

「…どういう意味だ。」

「天下の強者の名が上がる。それを下せば界皇に近づく…。」

確かに、強い奴は有名になるだろうな。

「だからだ。私が貴様を海皇に恥じぬ男に押し上げよう。」

「ありがたいな。でも…何が狙いだ。」

普段の仁と違う…。何考えてやがる。

「クク…ただ見たかなくなった。天才に対しての阿呆の道を…。霸王に對する海皇の道を…。」

いたずらっぽく笑う仁。

まったくコイツは…

「私は貴様に仕える。姉より、貴様の方が面白そうだ。」

「お前バカだろ？面白そうで進路決めるな。」

まったくよー、何やってんだか。

「ククク…まあ、いいだろう。とにかく今後何かあるなら頼れ。」

そう言って去る仁。

群雄割拠…か…。意味は知らない。だけど強い奴等に会えるのは間違いない。

…恋…先ずはアイツだ。

一刀の夢のためにも、俺の夢のためにも、アイツを倒さない事には始まらない。…強く、なるんだ。

海皇のために…あの号を本物にするために。そして、一刀との約束を守るために…！！

「負けてらんねえな…」

よろしい、ならば修行だ。（後書き）

恋愛要素をどうしようか本気で考えています。

…何か、仙刀がモテる画が本当に思いつかないので…

性格が少しマトモにならないとダメな気がしてなりません。

**新たな武器と本物の武器（前書き）**

徐州に行く前に、仙刀の目的を…

## 新たな武器と本物の武器

SIDE 仙刀

「にゃにゃー!!」

槍、蛇棒を振る鈴々。俺はその槍を…

「ツツツ」

避けて懐に入る。

「食らうのだ!!」

柄での雑!!ここだ!!

「しいつつつ!!」

合気道で鍛え上げた膝のバネを利用し、後ろに回る。

「にゃっ!?!」

「つつかまえた」

がっちり鈴々を抑える。その構えから…

「だアツツツ」

全身のバネで飛び上がる!!

「にやにやにや〜!?!」

そのまま地面に!!!食らえバク宙!!!  
地面との激突音。

「きゅ〜...」

伸びる鈴々。

「俺の勝ち。」

最近、模擬戦の回数が段違いに増えた。相手は慶、忠、仁から愛紗、星、鈴々が多い。一刀とは、たまにストレス発散のためにやる。その中で最近では白星が増えてきた。

「仙刀の兄ちゃん、痛いのだ〜」

「あー、ゴメンゴメン。怪我はないな。」

「でも、アレは痛いのだ!!!」

鈴々が復活。まあ、加減はしたしな。

「悪かったって。夕飯に好きなモン作ってやるから機嫌直せ。」

「なら、満漢全席を...」

「それはヤダ!!!」

とんでもない要求すんな！！

「冗談なのだ！！この前作ってくれたカツ丼を頼むのだ！！」

「ああ、分かったよ。」

カツ丼か…豚肉はあるけどパン粉がな…。余りあったかな。また店に作らせるか…

「お、仙刀オ。終わったのかい？」

「ああ。また勝ったぜ」

慶に呼び止められた。それに答えると慶は少し安心した顔をした。

「そりゃあよかった。…所で武器はどうする？恋との戦いで化猫は壊れたじゃねえか。新しいの用意しないと。」

「あ、ヤベ武具無いな。なら慶、見に行くからお前も来い。警備のついでだ。」

「ああ。行くか。」

町に出る。近くに南郷隊の野郎共ご用達の店があるらしい。

「なあ、慶。聞きたい事あるんだけどよ。何で、さっき安心したような顔したんだ？」

「ああ、俺の目に狂いは無かったと思ってな。」

…どゆこと？

「そんな不思議そうな顔すんな。ちょっと自分の中で賭けをしててな。」

「は？どんな賭け？」

「それはだ、アンタに仕えるか仕えないかだ。勝ったら仕える。負けたら仕えない。」

何やってんだか…

「内容と結果は？」

「アンタ…恋に負けただろう。で、そこからどうなるかだな。人は稽古だけでは強くならねえ…たった一つの出会い、戦い、勝利…そして敗北でまるで別人のように強くなる事もある。」

歩くのを止めて、向かい合う。慶の目が真っ直ぐに俺を射ぬく。

「アンタは恋に敗北し、自分が戦い勝つ理由を見つけた。そして…見違える程に強くなった。賭けの結果は勝ちだ。所で、だ。アンタが目指す海皇ってのはどんな物だい？」

真っ直ぐ、鋭い目。…そんな事決まりきっている。

「界皇に次ぐ強い奴だ。」

「強さってのは？」

聞くまでもないだろう？

「自分の我が儘、願いを叶える力だな。強さなんて、そんな物だ。どうなるか、なんてのは扱う奴次第だ。

賊の略奪も自分の我が儘叶えるための強さ。

これからの戦も、自分の願いを叶えるための強さ…根っこは変わらない。」

「なら、勝利は？」

「叶う瞬間だな。」

結構、狭い視野かもしれない。だが、関係ない。

「ハッハッハッハ！！てことは、アンタはこの世で二番目に我が儘な人間になる気がい？」

「そうかもな！！結果的にはな。」

笑って答える。確かにそうなるな！！

「やっぱ、アンタ気に入ったあ！！素直にも程がある！！最高だ！！」

気持ちよさそうに笑う慶。しっかしよー

「仕える仕えないなんて、町中で言うことじゃねえよー!!」

何で町中でこんな事してるんだか…

「良いじゃねえか。俺達みたいなバカにはピッタリだろうがー!!」

「確かに。固っ苦しいのなんて最悪だー!!」

町中で大声だしてのばか笑い。町の人に変な目で見ているが…いいや。

「で、何で今更そんな話をしたんだよ。」

笑いで出た涙を拭いながら聞く。笑いすぎた。

「ああ、それはだ…」

急に真面目になる慶。…笑いは終わりだ。

「世の中の男は誰だっぺ程度の違いはあれ、最強を目指す。だが、殆どは諦めるんだ。

ガキ大将、親父の強さを知ってな。でだ、知って諦めなくても、今度は強い女を知って諦める。

愛紗、鈴々、星。そして恋みたいな奴を知って…な。

俺も同じ口だ。師匠の強さを知って諦めちまった…  
だが、アンタは違うー!!」

急に語気が変わる。

「アンタは諦めてなんかいいえー!!恋の強さを知り、それでも最強

を諦めていねえ!!」

感情が叩きつけられる。重い言葉だ。

「その姿を見て、海皇が最強になるのが俺の夢になったんだ!! 仙刀を最強の男に押し上げるのがだ!!!!」

馬鹿馬鹿しい夢だ!! それを叶えるために仕える!!

俺の主君は仙刀だけだ!!」

一度も目を逸らさない。凄い眼力だが、逸らさない。

「分かった。俺も慶を頼りにしてるんだ。よろしくな!!」

「ああ!!」

話しを終え、ハイタツ…

「届かないんだけどおおお!!?」

「ハッハッハッハ!!」

この野郎…!! 手の位置高いんだよ…!!

「さーて、武器屋ってどこか?」

「ああ。」

武器屋に着いて物色。さて、何かいい物あるか…？

「…仙刀。武器を買う気…あるか？」

まだ見始めたばかりで、慶に止められる。

「さあ？俺は防具を探しているし。」

俺の目的は防具だ。武器は…ね。

「なら、武器を買う必要ないぜ。」

「おい目的…！」

あんまり見る気は無かったけどさ…！何でここで目的変わる…！

「やっぱりアンタは格闘の方が良い。武器なんざ荷物にしかならねえ。」

…分かってるじゃん。

「正解。なら何で提案したんだ？」

「武器つてのは人が弱いから出来たんだ。素手で戦うのは弱いからな…いや、一部は違う。」

格闘は神に選ばれた人間だけの世界だ。アンタは間違いなく選ばれた人間さ。

嫉妬…があつたのかもな…武器無しで強いアンタに。選ばれたアンタに。

だから提案したのかもな…認めたくなくてな。」

正直に言う慶。…やつぱ…や。

「武器つてさ、本当は武器じゃないんだよ。」

「なら、アンタにとっての武器はなんだ？」

「鍛え上げた体と技。買うことが必要なのは身を守る道具だけだな。」

これが俺の見解。俺は格闘家、空手家、拳法家。武器なんてのは…

「武器は要らない。ただの不要物だ。使うとしても地面とかそんな感じだろ。」

「ハツハツハツハ！！武器屋でなこと言うか！！失礼なんてもんじやないぜ！！！」

あ…まあイヤ。

「じゃあ、失礼にならないように…」

「防具だけ…な。」

夕方になり戻ると忠に呼び出された。何かしたか…？やらかした事なんて

サボり、遊び、悪ふざけ、仁の飯にデスソース、脱走ぐらいだが…？

「仙刀殿。」

「なんだ？」

正座して向かい合う。流石に胡坐をかく空気じゃないな…。

「様々な戦をくぐり抜け申したな。」

「あ？ああ、そうだな。」

なんか拍子抜け。説教だと思ってたしな。

「幾度も死線をくぐり、かなり強くなり申した。」

「そう？実感ないんだよな…一応最近の戦績は良いけど…」

「左様。我らは武で互いを幾度も語り申した。最早迷いはござらん。」

両手を床につく忠。そして頭を下げる。

「拙者の武、仙刀殿がために振るおう！雑魚は拙者に任せよ！  
仙刀殿を必ずや海皇として誇れる強者になそう！！」

矢継ぎ早に繰り出される言葉。…つまり、だ。

「俺に仕えるってか？」

「左様にござる。仙刀殿に敵の強者を任せ、拙者は邪魔者を除こう。」

「

…仁、慶に続いてか。

「…なあ、忠。聞きたい事あるんだけどよ。」

「何にござろう。」

「…何で三人とも俺に仕えるの？桃香で良くね？」

これが気になるんだ。

「単純な話にござるな。」

これからの群雄割拠…皆、己の理想をかけた戦を起こす。仙刀殿の理想は？」

俺の理想…か…

「海皇に恥じぬ男。もしくは、一刀の夢を支える…だな。」

「それにござる。」

意味分からん。

「いや、どゆこと？」

「そのような愚かな願い、理想がどこまでいけるのか見たいのだから。」

「愚か言つな。こつちは真面目だ、このヤロー」

ま、別に気にしないけどさ

「後…もう一個。どんな奴をぶっ倒せばいい？一口に強い奴って言うっても噂じゃ分からんぜ？」

これについても把握しないと。強い奴の噂であっちこっちに行くのはヤダ。

「ふむ…先ず人は三ヶ所に集まり申す。

一つに曹操…霸道に惹かれる者が集まる。

二つに孫策…あの王の器は大きいものにごぞる。

三つに劉備…人柄が人を引き寄せる。

ここにござるな。」

いいね。分かりやすい。

…つまりはだ。

「その強い奴全員に勝てば…」

「界皇に次ぐ、海皇になり申すな。」

「よっしゃ！！ありがとう忠！！何やればいいか大体分かった！！」

目的見えた！！道も見えた！！さあ…

「なあ、忠…どうして抑えるの？」

「本日の訓練…いかが致したか？」

あ、サボり、遊び、悪ふざけた上脱走したな。

「これより説教にござる。」

「待て！！俺は上司だろ！？」

「だからこそ忠告するのでござる。」

「ついでにあの調味料の仮も返そう…」

「げっ！？辛いの大嫌いな仁ちゃん（笑）！？」

二人目！？コイツはヤバイ！！

「さて、説教にござる。」

「貴様…二度とその口をきくな…！」

「あつちよ…！！俺上司iiiiiiii！！」

絶対コイツ等が仕えるって嘘だ。まあ、そんな感じで何も変わらない方がいいけど。

## 新たな武器と本物の武器（後書き）

そろそろ徐州に移ります。これからもこの駄文を宜しくお願いします。

引っ越し!!引っ越し!!さっさと(ry)(前書き)

徐州牧就任!!その前の引っ越しの話です。

引っ越し!!引っ越し!!さつさと)ry

SIDE 仙刀

反董卓連合が終わってからある程度して、面倒くさそうな使者が来た。それが、桃香に徐州の…何かになれってやつだ。

「私が、徐州の州牧…」

「おめでとございます、桃香様」

うーん、聞いていい空気かな? いいよね。

「…なあ、お前等聞きたい事あるんだけど大丈夫?」

「あ、私も。」

ん? 桃香もあるの?

「俺からでいい? 州牧って何? 牧場経営すんの?」

『知らないの!?!』

「え、知らないとマズイのか!?!」

初耳だよ!?! 皆に突っ込まれたけど!!!

「分かりました。猿…仙刀さんにも分かるように説明しましゅ。」

「ありがとう朱里。喧嘩売ってんのか。」

コイツ…いきなり猿って…!!

「すいません口が滑りました。「嘘だろ？」州牧は太守みたいなものの「おい、無視すんな!!」です。」

「成る程!!」

手を叩く桃香。桃香には分かってもさ…

「太守って何？」

俺には分からない。

『嘘!?!』

いや、知らないって!!そんな知らないのが非常識!?

「桃香：仙刀と同じはマズイよ…」

「いや、一刀さん。私は知ってたよ!!仙刀さんほどひどくないよ!!」

「お前等どんだけ俺をバカだと思っているんだ…!!」

俺と同格扱いがイヤなのか誤魔化す桃香。いくらなんでもデイスリすぎだろ。

「え〜と、太守は…」

色々と説明する朱里。…要するにだ…。

「頑張る人ってこと？」

「…もう、それでいいです…。」

呆れられた！？十分な認識だろ！？

「仙刀…もう少し、勉強しないと絶対にマズイよ。」

肩に手を置く白雪。いや、俺は理系だから知らなくて大丈夫。

「とにかく、桃香様が大出世したって分かる…よね？」

「言葉は分かるから！！不安そうにするな！！」

「分からないなら、分からないで良いよ。私は笑わないから…。」

「おい白雪！！その暖かい目止める！！」

言葉についても危ないって思われてるの俺！？

「でも…ここから離れるんだよね？少し寂しいな。」

「頑張ってきたのにね。」

寂しそうにする桃香と雛里。確かに、平原を離れる事になるのか。

「馴染みの居酒屋やラーメン屋が出来たというのに」

星も同じらしい。そりゃ、皆そうだな。

「しかし、これは大きな前進となる。引越しの準備をしましょう。」

「愛紗の言う通りだ。荷物をまとめないと。」

愛紗と一刀は前向きだ。後ろ向きでいた所で、どうしようもないしな。

「じゃあ、引越しの準備始めよ!!」

パンッと手を叩く桃香。あーあ、面倒くさそうな事が始まったよ…。

「家財整理か…」

引越しの仕事の分担は

? 家財班

メンバー 俺 一刀 桃香 鈴々 月

? 軍事班

メンバー 愛紗 星 慶 忠 華雄

? 書類班

メンバー 朱里 雛里 詠 白雪 仁

になった。適材適所ってヤツらしいが…俺は押し付け合いになっただ。

…真面目にやるのに。

で、入ったのは?。?は終わり次第、?を手伝うのがプラスだ。面倒くさい。

「で、何を持ってく？」

「持っていくのは基本的に私物。家具は元からあった物だし、後任の人のために残す。」

「オケ、分かった。」

私物っていつてもな…特に面白いの無かったな。生活はけっこう金無かったし。楽なのはいいけど。ただどこは…!!

「朱里と雛里の部屋か…」

「マッチ、ライターなら用意したぜ。」

「二人共…何やる気？」

桃香…そんなの決まり切っているだろ…？

「ああ、この部屋を燃やすんだ。」

「ダメだよ!!何でそんな事…!!」

「「アイツ等が書いた本を燃やすため!!」」

目的はそれオンリー!!ヤバイ匂いがするんだ!!

「正気!?待って!!火の用意しないで!!」

「さあ…焼き討ちの時間だ…」

「燃〜えろ〜燃えろ〜炎よ燃〜え〜ろ〜」

「何その歌！？待ってよほ「油を持ってきたのだ！！」鈴々ちゃん！？それ要らない！！」

鈴々ナイスだ！！

「よし、鈴々！！油をこつちに…火火火火火…！！」

「らめえええええ！！その笑い方もおおお！！」

結局、部屋に放火は無理だった。部屋に入り、それらしき本を燃やしただけ。しかし…この程度ではヤツ等は終わらないだろう！！全てのアイツ等のヤバイ本を燃やすまで、我々は戦い続ける！！

「「敬礼！！」」

「二人共…ホントに…何なの？」

「気にしたら負けなのだ」

さて、次行ってみよう！！

「やっと書類が一山…はわわー！！本がー！！」

「どうしたの朱里ちゃ…あわわー！！折角、出版の準備までしたのに…」

「雛里ちゃん…でも、無い物は無いんだよ…だから、次は南×北で

…」

「ダメ！！前回通り北×南で…」

…とにかく、次行ってみよう！！

お次は俺のホームグラウンドそして戦場の厨房だ。

「月ー！！皿の準備終わったー？」

ここは月が皿や鍋の片付けをしている。力仕事が少ない場所での仕事、月には与えられた。

「はい。後は調味料や食材ですね。」

殆ど終わったらしい。流石は月、仕事が速い。

「じゃあ、調味料と食材だな。色々あるから要る要らないの判断はお前等に任せた。持って行かない食材は腐らせるのは勿体ないから、皆の飯にする。」

「……はい……」

イイ返事だ。さて、始めるか。

一つ目 唐辛子

「これは、必要だよな。」

「でも、向こうで買えるから、持っていく必要もないんじゃない？」

「すぐに痛む物でもないですから、持っていても大丈夫じゃないですか？」

「ここで食べるのはキツイのだ!」

「うーんじゃあ、持って行こう。」

「ん、決定ね。」

二つ目 胡椒

「胡椒!?!この時代の貴重品じゃん!?!どうやって手に入れた?」

「カダタとか言うパンツマスクを倒した。」

「ドラ エー!?!」

「…とにかく、あつた方がイイんだよね?」

「持って行きましょう」

「そうするのだ!」

三つ目 塩

「岩塩ですね。結構重いです。」

「すごい、カツチカチだ…。どうやって割るの？」

「正拳。」

「仙刀さんって人間!？」

「まあ、今更だな。これも持って行くぞ。」

「お前等さあ、ちょっとは持って行くの考える。」

「考えているのだ!!」

四つ目 デスソース

「はいそれ処分!!」

「待て!!捨てるな!!遊び道具なんだ!!」

「知るか!!桃香捨てて!!」

「すごい、何これ…」

「髑體の絵が…」

「真っ赤なのだ…」

「興味持たなくていい!!捨てて!!」

五つ目 豆板醬 With デスソース

「もう一本!？」

「ギネスの辛さだ。持って行くからな。」

「止める!!お前の飯で辛い物が食べなくなる!!」

「別にお好みで使えばいいだろ?料理には入れないから。」

「それならいいけど…」

「ただし、デザートには入れる。」

「止める!!早まるな!!」

六つ目 レッドホットデスソース

「また!?!どんだけ辛さ必要な!?!」

「…ちよつと開けてみようか。」

「止めて桃香!?!」

「…怖いです。」

「でも…やるのだ。」

「二人とも!?!」

「」「ウツ…!!捨てよう…!!これは兵器だよ…!!」「」「」

「言わんこつちやない!!」

「分かったよ。…チツ…ばれないように…」

七つ目 ラー油

「まともに戻った…!!」

「…さっきと違うよね? あれ? 何か罽體が…」

八つ目 ワサビ

「どうなんだろ? 使う?」

「一応、蕎麦とかになら使えますね…」

「あれ? 鼻用って何なのだ?」

「処分!! お前とワサビはマズイ!! 処刑だろ!!」

「…まさか。フフツ…」

「凄いよ仙刀さん!! 私、不安しか感じない!!」

ちて…と。

「調味料はこれで全部。次は食材だ。」

「マトモなわけが…」

「ないよね…。」

一つ目 野菜山盛り

「ほわー…いっぱいあるのだー」

「最近買いましたから。」

「どうする月？今日の料理頑張る？」

「腐らせるのは勿体ないですからね。」

「やったのだ！！」

二つ目 砂糖

「これも多いね…」

「ああ。白雪と月が菓子を作りたいって言ったから、仁をパシらせたらこつ。」

「仁…お疲れ。まあ、持って行こつ。」

三つ目 豚肉

「野菜炒めにするか…後は何に使う？月。」

「青椒肉絲や回鍋肉ならどつです？」

「結局、野菜炒め！！」

四つ目 シュールストレミング

「バイオテロ兵器いいいい！！捨てなさい！！」

「ねえ、仙刀のお兄ちゃん。どうやって開けるのさ？」

「開けるな！！それは罠だ！！」

「ああ。それはこれから我が軍の最臭兵器として頑張ってもらおう予定だ。」

「ヤダ！！歴史に残したくない！！シュールストレミングが戦の勝因なんて嫌だ！！」

「どうやって開けるのかな？」

「無理やりは…？」

「だからダメええええ！！取り扱い注意！！」

五つ目 ドリアン

「入手経路はいい！！捨てろ！！」

「何ですか…これは…？果物？」

「いや、それも我が軍の最臭兵器だ。ぶつけると痛いし一石二鳥！！」

「バイオ兵器禁止！！」

六つ目 ド アン

「どこから連れて来たその爺さん!!」

「凄く背が高い…」

「アメリカ。いやー、海王だけあって強いわー。」

「キャン…デイ…」

「話すな!! 帰れ!!」

「分かったよ…。オバさん。お願いしまーす。」

「更に増やすなアアア!!」

後は…ないな。

「これで全部つと。」

「楽だったのだ!!」

「なら、後は書類班の手伝いですね。」

「……」

「一刀さん、大丈夫? 疲れて…いるよね…。」

一人机に突っ伏す一刀。さっきから叫びまくればそうなる。

「…もう、コイツの相手ヤダ…。桃香が突っ込みを…」

「さあ、次のお仕事頑張ろうー!」

仕事は無事に終わって引越。何故か一刀が真っ白な灰になっていたけど、知ったことじゃない。とにかく今は徐州だ。

## SIDE 一刀

疲れた。アホみたいに疲れた。精神、肉体共に。休みたいけどそうはいかない。徐州の把握が必要だ。すぐに取り掛かったが、平原とは規模が違う。時間がかかりかかった。しかし、何とか報告会を開けるだけになった。

「以上より、力を蓄えるに相応しくそして治世が難しい土地と言えます。」

朱里の報告。これに突っ込むバカは居ない。今は街の見回りをしてる。

「豊かさを狙い諸侯がいつ攻めてきても、おかしくありません。」

「なら、軍備の拡張が必要か…」

「でも、あまりに急速な拡張は民の不満を招くよ。訓練にも手間暇かかるから考えて徴兵しないと…」

「じゃあ、内政頑張ってそして並行して軍の拡張かな？」

「そうなりますね。しかし、随分と難しい…」

「だが、するしかないだろう。生産力を落とさずにな。」

「大変なのだ！」

軍備と内政の両立か…。屯田兵とかしたら…。いや、他に新兵器を…。なら仙刀に頼るか…。

「じゃあ、私と朱里ちゃん、雛里ちゃん、白雪ちゃん、一刀さんは内政。」

軍は愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、星ちゃん、仙刀さんに頼んで…」

「申し上げます!！」

最後のまともに入ろうとして、来訪者。急ぎみただけど、何かあった。

「何だ!！」

「只今、城門にこ、公孫贇様が!！」

「伯珪殿が？州牧就任の祝いに来たのか？」

「それが兵を連れて劉備様に保護を求めています!！」

「保護!？」

「何かあったのか?」

保護って事は何かあったのは間違いない。裏切り……いや、外敵か？  
とにかく始まったのは間違いない。

群雄割拠の乱世が。

引っ越し！引っ越し！引っ越し！引っ越し！引っ越し！(ry)(後書き)

そろそろ恋との再戦か…

どねぐらいの怪我ならいけるのでしょうか…？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7075y/>

---

真・恋姫†無双～南北コンビの三国志～

2011年12月27日22時49分発行